



097205-000-9

特9-469

浄瑠璃坂仇討(奥平源八郎)

玉田 玉秀斎/講演

M36

DBS-1018





玉田
玉秀齋講演

奥平源八郎

塙
大仇討

中川玉成堂新版發行目錄

<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 櫻田太田騷動 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 櫻田騷動後編 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 櫻田血染の雪 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>松月堂撰 丸山平次郎述</small> 鈴木主水 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>松月堂撰 丸山平次郎述</small> 橋本屋白糸 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 觀音丹次 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 小天狗小次郎 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 柳の立お仙 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>松月堂撰 丸山平次郎述</small> 妹春山眞記 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>松月堂撰 丸山平次郎述</small> 天鹿柴 正價廿五錢 郵稅六錢
<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 觀音靈驗記 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 良辨杉の由來 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 中將乳姫 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 壺阪の澤市 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 中山寺鐘緒由來 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 黑田騷動 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>松月堂撰 丸山平次郎述</small> 大山膳 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 尾小太郎 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 鷲尾武勇傳 正價廿五錢 郵稅六錢	<small>神田伯龍撰 丸山平次郎述</small> 由井夕瀆大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢



神田伯龍講演 丸山平次郎速記 平井權八 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 法華長兵衛 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 櫻川五郎藏 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 奧平騷動 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 淨るり坂大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 眞力庄吉 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 小金ヶ原大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 曲淵明和六歌仙 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 鎌倉山大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 豊原の太郎武勇傳 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 碓井峠大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	松月堂模林講演 丸山平次郎速記 元利後日譚 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 福島内亂記 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 福島三浪士 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 幸村諸國漫遊記 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 田佐渡ヶ島大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	玉田玉秀講演 神速記 九州中國漫遊記 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 關取千兩幟 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 大岡政談 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 大安寺堤 正價廿五錢 郵稅六錢	右川一口講演 丸山平次郎速記 野幽靈の片袖 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 孝子五郎正宗 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 高野山太仇討 正價廿五錢 郵稅六錢	神田伯龍講演 丸山平次郎速記 高橋享保大仇討 正價廿五錢 郵稅六錢
--	---	---	--	---	--	---	---	--	--	--	--	---	---	---	--	---	---	--	--	--	--	--	---



掛
469

討 仇 坂 璃 瑠 淨

源八郎 淨 瑠 璃 坂 仇 討

玉田 玉秀 齋 齋 齋 演

山 田 齋 神 速 記

幕 二 席

先般永々御機嫌を伺ひましたる奥平願助の御話し、非常の心来り得
まして私し始り出版元に至りますまで御禮を申し上げさす、借て
今同はその奥平願助の後編武蔵國豊島郡江戸市ヶ谷淨瑠璃坂と云ふ
處で奥平家正義の浪士十有余名の者が義の爲りに奥平内蔵之助の件
源八郎に加擔を致し花々敷き大仇討を致しなすると云ふ頗末を詳し
く御話しを致しまするのでございます、前編は何の邊迄で終りました
たかと云ふと以前兵藤玄蕃の屋敷へ仲間奉公を致して居りましたる



討 仇 坂 璃 瑠 淨

太助が當時江戸銀坐三丁目水木三郎右衛門方へ奉公中新場の魚屋安兵衛を助け亦は淺草諏訪町松前屋五郎兵衛伴五三郎或は乳母の難義を救ひ銀坐の宅へ歸つて参りますと、折節故郷宇都宮から武士が一人太助に遇ひに來て居ると云ふ事を聞き何人でも有るかど奥の一間へ通りまして其者に對面をするに云ふ處にて御預り致して置きましたのでございませぬ、其處で太助は誰が宇都宮から乃公に遇ひに來たので有らう、其れに乃公が以前奉公を致して居た御主人兵衛様御家の來か其れで無くんば何んでも乃公を知つて居る人に違ひ無ひ、其れしや御目に掛つて來ようか、奥の室へ参り唐紙を開ひて内を見ますと案に違はず古主兵衛様若鷲で貴島三郎と申す者でございませぬ、貴島太助か、お前も先以て一別以來御無事で目出度ひ太助お前さん不相變御壯健、御屋敷様も皆々様御機嫌宜しうございませぬ、私し一度び御暇を頂ひて圖表へ歸り先祖の墓参りや御機嫌伺ひに参り

討 仇 坂 璃 瑠 淨

たいと思つて居たのです、貴方も且那樣のお供でも仕て大江戸へ入來たのでございませぬ、貴島イヤ其うで無ひ、太助お前は御國家の願動を何んにも知らねへか、太助何ぞ御國家に願動が出來たのですか、貴島如何にも顛覆るばかりの大願動が出來た、太助して其願動と云ふのは何んな事が出來たのです、貴島借此願動の起りと云ふのは箇様で有る、と貴島三郎が物語るのございませぬ、されば此國の願動を明細に申上ると余り堅くなりませぬから成る丈け手短く宜く御判りにならぬ様に振ひ揃んで申上ります、貴島太助、此二月廿九日大殿奥平大膳太失忠正公六十八才にて江戸御上屋敷に於て御逝去せられた、其時循死の者が十三名有つた此循死、追腹を切ると云ふ事は大公儀に於て堅き御法度と有る、太助循死追腹と云ふのは其りア何の事です、貴島殿様が御逝去にならんと忠義金銀の武士が現世に於て御高恩を蒙りし殿様の御恩を忘れず、我々も共に切腹なし、未來へ参り尚御側に於て忠義を盡すと云ふて腹を切るのを循死追腹と云ふ、既に徳川將軍

討 仇 坂 璃 瑠 淨

家^が御^他界^の時^に七^大名^循死^を仕^た事^があ^る、之^に依^つて天^下の御^老中^松平^伊豆^守殿^が以^來循^死は堅^く法^度たる可^き者^{なり}と諸^侯旗^本へ御^布告^が廻^つた、其^公儀^の御^法度^を破^り之^が爲^めに一^家中^の者^は若^しやへ未^だ御^家督^相續^の願^ひが叶^はん、之^が爲^めに本^國宇^都宮^に御^國替^にても成^りは仕^なかるうかと大^に心^配、然^るに本^國宇^都宮^にて三月^四日^亡君^忠正^公の御^法事^御善^提處^光禪^寺にて行^はれる、内^の若^且那^彌五^郎棟^の御^新造^絹江^様の御^里方^{なる}與^平内^藏之^助様^が病^氣に付^若且^那彌^五郎^棟の御^新造^絹江^様が御^代參[、]處^が山^崎準^人奴^が絹^江様^を買^ひ損^じた^る意^恨を其^場に持^ち込^み、是^れ源^八郎^殿今^日亡^君御^法事^に代^り參^を立^てる^と云^ふは何^事だ、者^の指^南を致^する身^を以^て不^似合^千萬^代なる事^と一^家中^が大^勢並^{んで}居^る前^で若^年の源^八郎^殿を以^て赤^恥をか^した^ので有^る太^助準^人の野^郎奴^憎ひ奴^です、其^後は何^うした^んで貴^處其^處で源^八郎^殿は無^念の涙^目に溜^りて其^儘屋^敷へ立^歸り親^父内^藏之^助様^へ此^事を申^上げた、聞^くよ^り内^藏之^助様^も病^中とは云^ひな^がら鹿^島新^造

討 仇 坂 璃 瑠 淨

腰^も立^たな^い御^病氣^を以^て源^八郎^殿の肩^に纏^り無^理に光^禪寺^へ御^參詣^と相^成つ^て、山^崎準^人に向^はれ^て只^今源^八郎^殿へ御^心添^へを成^し下^され難^有ふとさ^ると一^禮を述^べられ、其^場は其^れで濟^んで是^{より}御^焼香^相濟^み、御^位牌^堂へ御^位牌^を納^めようとする時^に本^堂の脇^にベ^ッツ^ツリ眼^出して有^つた書^付に入^室勤^行と四^文字[、]字^が崩^して書^ひて有^つた者^ですから室^と云^ふ字^は山^崎準^人が物^知り顔^に方^々之^より冠^りに玉^と云^ふ字^に見^へる其^れを山^崎準^人が物^知り顔^に方^々之^より入^實勤^行でござ^ると室^の字^を實^の字^に讀^み誤^り辭^高々^と呼^はつたから、此^時奥^平内^藏之^助様^が内^藏山^崎氏[、]御^貴殿^は家^老職[、]殊^に人^にに對^して御^意見^迄仕^よふと云^ふ御^人が入^實勤^行とは何^うだ、入^室と云^ふの^が當^然だ、亡^君の御^位牌^を御^位牌^堂へ納^めるの^と入^室勤^行と云^ふの^だ、其^れに此^一字^を實^の字^に讀^み誤^ると云^ふは何^事で有^る、中^で準^人を^お耻^しり成^つた、準^人大^に怒^つて己^れ無^禮の一言^覺悟^致せ^と刀^の鏝^口を寬^げる、一^内藏^之助^殿も病^中とは云^ひな^がら鹿^島新^造

討 仇 坂 璃 瑠 淨

流の先生也、何に猪口才なりと双方刀の鞘を拂つた、本堂真只中に
てチヤン、何に猪口才なりと双方刀の鞘を拂つた、本堂真只中に
大蔵、御主人兵頭立善様が双方の刀を脱ぎ取り本日は亡君御
法事御大切の御場所に於て刃傷とは狂氣でも仕召されたか静りめさ
れど大聲で御呼はりなされた太助、大分活潑な事に成つ
て来たんですな、其れで其跡はとう成つたのです貴島先づ双方之れ
で物分れ、穩當に納まつたと思ふ處へ隼人に弟が二人ある、次ぎの
弟主馬と云ふ奴は先年より夏目將監と云ふ家老の屋敷に養子に行つ
て居る、其主馬が後れて光禪寺の本堂へ駆け付け來り物をも云は
す内蔵之助様が御油断をなされてござる後から袈裟に切り付けた
ア、ツト内蔵之助殿一聲發した、之を眺めた兵藤玄善様大いに怒り
汝れ無禮なる主馬拙者が挨拶にて事納まりしを、彼ゝる狼藉をする
とは不届至極と、主馬の手を取り肩に擔いで、其儘向ふの庭前へ御
投げ付けと成つた、主馬奴は腰骨打つて追々の体で逃げ歸つた太助、

討 仇 坂 璃 瑠 淨

宜い様だナア、其れから何うなりました貴島氣の毒にも奥平内蔵之
助先生は遂に養生不叶、其夜に御死去に相成る、此趣さを一老職夏
目將監より江戸表御上屋敷にござる、若殿へ御伺ひを出すと御上屋
敷より御沙汰には、内蔵之助事御指南番の身を以て門人隼人と及
傷に及び深傷を負ひ其れが爲めに相果てるとは言語同断、職祿取
上げ妻子諸共領分追放を申付けるとの御沙汰、又山崎隼人事も家老
職で有りながら御場所柄を辨へず刃傷とは言語同断職祿取上げ親兄
弟諸共領分追放との御沙汰、之れに依つて奥平内蔵之助先生の御弟
子たる桑名友之進、奥平傳藏、細江又左衛門、太田小左衛門、藤源
大夫、之等の人々、十四名江戸御上屋敷へ罷出で、内蔵之助家名
相續の義源八郎へ仰付けられたいと御懇願するも更に御聞き入れ無
く、遂に兩家共断絶、其れに内蔵之助殿を殺せし主馬には何の御咎
りも無く、夏目將監が暖味の取計ひにて相濟む、其處で十四人の人
々は片手落なる御政道最早彼ゝる暗君に仕へて居るに及ばずと、職

浄瑠璃坂仇討

祿殿へ返上に及び申宮を浪人致し若年の源入郎殿に助太刀に及び
内蔵之助殿の御主人が捨て置く譯に行かない、彼ら事に成るならば内蔵
と兵頭の御主人が捨て置く譯に行かない、彼ら事に成るならば内蔵
之助殿を止めるので無かつた、假令病身と雖も彼の時準人を一刀の
元切つて仕舞ふので有つた、家の爲めを思ふて止めたりばかりに主
馬の爲めに切られたり、必定草葉の商より某を恨んでござるで有る
う、此上は竹五郎が立歸り次第親子共知行を返上致し字都宮を
脱走して仇討黨派の人々に加入し共々恨を晴させたいと云ふ思召就
いて若旦那五郎様御行衛をば是非探して呉れいと仰付られたる
から、拙者江戸表へ参り且那五郎様の御行衛を探し又二つには
敵山崎準人親子兄弟を探し出た者じやございませんか、其じや私し
と貴島さん大變な願が出來た者此大江戸へ参つたので有る大助何ん
も若旦那五郎様と尋ね、仇山崎兄弟親子の者を探させう貴島右
内蔵之助様家断絶に付き御屋敷も大物入り路金も多分に貰はず江戸

浄瑠璃坂仇討

表へ参つたので有るから、宿屋住いも成り難く其處で御前に相談に
來たので有る大助左様でございますか私しも今は奉公中の身の上で
ございますから手元に金どては無く、何うした物で有るかと思案
途方に暮れて居る、處へ唐紙開いて這入つて参つたのが主人三郎右
衛門三郎委細は次ぎの間に於て聞きました、其う云ふ事なれば私し
の内御宿を申す、ゆゑに於て聞きました、其れじや貴島さん御當家の
大助旦那様、難有い思召でございます、其れじや貴島さん御當家の
御厄介と成つて、ゆゑに於て聞きました、其れじや貴島さん御當家の
不及ながら此大助も御旗本方へ手廣ふ致して居りますから屹度私し
も詮義を致しますから、暫時御逗留をして居りますから屹度私し
らば然う致さうと、若貴島三郎は水木方に滞在して、日々處々方
々敵準人兄弟、又は若旦那五郎の行衛を尋ねて居りました、或
日番頭の與助が番頭大助とん、お前日晝前迄に淺草蔵前久金屋勇
助と云ふ兩換店へ行つて、茲に三十兩と五十兩との二枚の手形があ

討 仇 坂 璃 瑠 淨

るから此れを取付けて来て下さい
二枚の手形は御預り申ました
太助や、拙者は一寸是より奥平家の御上屋敷迄行つて来る、直ぐ歸
つて来てお前には相談の仕度き事が有るから何處へも行かず待つて居
て下さい太助其しや成る丈けお早く御歸り下さい、私しも殿前へ盡
前迄に行かなくちやならない用事がございませうから三郎、直ぐ
歸つて来る、と其儘に表へ出て行く、太助は店の用事を仕ながら最
う貴島さんが歸つて来るだろうと待つて其く歸らず、盡も少し過ぎ
る時分に成るのに歸つて来ませぬ、何う仕たんだらう、是れじや手
換店と云ふものは最う七ッ過ぎに成れば引換て呉れない、其じや手
形を引換へて来る事に仕よう、と太助番頭さん、藏前兩換店迄行つて
来ますから、若し貴島さんが歸つて来ましたら其う云つて置いて下
さい、と其儘紙入れを懐に入れ急いで殿前久金屋の店に来る、太助へ

討 仇 坂 璃 瑠 淨

い、御免なさい、御面倒でございませうが何うか此手形を御引換下さ
いと紙入を取り出し中に入れて置いたる二枚の手形を出そうとす
ると手形が二枚ながら有りませぬ、是れはと驚き中を段々取調べて
見まして、有りませぬ、店者、貴方は紙入を出して中をお調べなすつて
入来いませうが、どうなさいました太助へい、此中へ五十兩と三十兩
との二枚の手形を入れて置きましたのが有りませぬから探して居る
のでございませう、店者、其れなれば此手形じやございませぬか太助へい
其れでございませう、何うして此手形が此處へ来て居ります、店者、今朝
早く御武士が御出に成つて之を引換へて呉れいと仰いましたから手
前の方は手形が證據でございませうから八十兩御渡し申しました、聞
ひて太助は大に驚き、心の内に借ては貴島三郎奴が己れの紙入に手
形の入れある事を知つて居たから出来心から心得違ひを仕やがつた
な、如何致した者で有ろうと思案途方に暮れて居ります、店者、お前さ
ん其手形を何うか成さいましたか、太助、イヤ何うも致しません、其御

討 仇 坂 璃 瑠 淨

武士に御渡し成さつて下さいましたら其れで宜しうございます、大に御面倒致しましたと其儘表へ出る太助、ア大變な事が出来た、公然に云へば貴島三郎を罪に落さなくては成らず、古主兵衛、鬼玄、様、の御名前の汚れ、今此八十兩の金が己れの手に有りさへすれば取り付けて来ましたと云ふが、今其金は無し、又今迄己れも人に三指突ひて謝つた事は無いのに御主人の前に手を仕へ、筒様々々でございませうと御詫言ひをするのも残念だから是りや寧ろ己れが此金を使つたと御役所へ名乗つて出て御處分を受けると外仕方が無ひと決心して其儘南町奉行大久保權右衛門殿役所の當番所へ馳け込ひ、大助、ア、御役人様へ申上ります、私しは銀坐三丁目水木三郎右衛門の店の若者で太助と申す者でございませう、主人の金を八十兩盗み取り使ひましてございませうから、何うか御處分を願ひます、役人、此りや貴様は亂心を致して居るの、太助決して亂心では有りませぬ、大盗賊に違ひないので有ります、ア、細をお掛けなすつて下さい、役人、愈々

討 仇 坂 璃 瑠 淨

本心なれば細を打つ太助、細をお掛け下さるのも、ア、何卒大盗賊らしく本細にお掛け下さり、菱細と云つて休中、妹の鼻を掛けた如く、大百日で淺黄の着物に白襟の掛つたのを着て居りますと、盗賊でも押前がさしますから、役人、黙れ、貴様は馬鹿だな、如何なる罪人でも其罪を遁れんとするのに、貴様は罪の重きを喜ぶ奴、早速細を掛けて倒く御留置所に入れて置きます、早速銀坐三丁目自身番屋へ御差紙、すると町役人、水木の内へ来りまして、役人、御番頭さん、只今南の御番所から急の御召でございませう、何の事件でございませう、三郎、何にも願う事もなければ、願はれる事も無いのに、御召状が付くとは不思議とや、私しは病氣にしてお前が名代に行つて下さい、番頭、へ、宜しうございませう、町役人、同道にて南町奉行所の當番所へ出る番頭、へ、手前は水木三郎右衛門、病氣に付、代人、與助と申す者でございませう、役人、其方宅にて、八十兩と云ふ金を盗んだ者が有るだらう、番頭、へ、手前方にて金子を紛失

討 仇 坂 瑠 璃 淨

致しましたる覺へは更にございませぬ役人篤と考へて見い、金を盗
 んだ賊が當御番所へ名乗つて出て居るのじや番頭假令盜賊が名乗つ
 て出まじ共手前の方には盗まれた覺へはございませぬ役人然らば
 只今其賊と突合せを申付け、それ本人を引出せ、ハッど答へて
 下役人、細付太助を其の處へ引据る役人水木の支配人其賊と云ふの
 は其れで有る、篤と見よ、振り返つて見ると手代の太助でございま
 すから吃驚致し番頭是れは太助どんじや無ひか太助ヤア、番頭さん
 私しも此ふな淺間敷ひ姿に成りました番頭お前何んで斯んなお細を
 頂戴したのだ太助盜賊を仕たんです番頭お前が盜賊をするものか、
 何を盗つたのだ太助藏前の兩換屋へ取り付けに行きました八十兩の
 金を盗んだんです番頭其んなら其金はお前の手元に有るだらう、其
 金さへ出したら盗んだんで何んでも無ひ太助其金が有れば出しま
 すけれ共使つて仕舞つたんです番頭其れは使つたんじや有るまい、
 紛失したか何うか仕たんだらう太助イ、ニ紛失しや爲ませぬ、盗ん

討 仇 坂 瑠 璃 淨

て使つたのに違ひ有りませぬ役人是りや太助、貴様其金は何に使つ
 た太助、ハイ、藝者を揚げて散財を爲て使つて仕舞たのです役人其使
 ひ捨てたる茶屋は何處だ太助吉原です役人吉原は何處だ、何町の何
 ど申す、呼んだ藝者は何んど云ふ、其れを申せ太助困りますねへ、
 スルト遊んだ御茶屋から藝者迄何にも彼も詳しう云はねば成らん
 ですか役人如何にも明細に取調べなければ處分する事は出来な、
 太助其れじや一寸模様が変わりました役人コリヤ、模様が変わつたとは
 何んだ太助、ユ一散財じや有りませぬ、博奕に負けたのです役人賭
 博は何處で爲た太助御役人、何にも其んなに詳しく調べ無くても宜い
 じやございませぬか、盗んで使つたと云ふ其罪に行つちや如何です
 役人黙れ、八十兩の金の使ひ方を調べるのだ太助野天賭博ですよ、
 稔草の裏田甫野天と云ふ者は誰彼なしに往來人が立寄り爲る賭博で
 す、誰に負けた彼れに負けたも其んな事は判りませぬ役人コリヤ、
 野天賭博と云ふ者は僅かに知れたる端錢の取り廻りをする賭博場で

討 仇 坂 璃 瑠 淨

當今なら郵便でございませう、三郎右衛門は何處から来たかど手
に取上げて見ると銀坐三丁目水木三郎右衛門様御店太助殿へ、貴
鳥三郎と認め有ります、其文面に「飛札を以て御断り申上候吾事永の滞
留中旅費を果し至極難澁、其元も手元不如意の様に見受け連も
金子出兼候様に存し無據二枚の形状借致し八十兩の金久金屋に
て受取り候永々御厄介に相成り其上箇様な事仕候ては何共相濟をさ
る義に候へ共國表へ引取り候は、早速返却可致候此處四五日の間何
卒御猶被下度分けて水木三郎右衛門様へ宜しく御断り被下度候以
上、太助殿へ、貴島三郎右衛門此手紙を見て大に涙を漏し三郎番
頭と見れば、見下さい、太助と云ふ者は主人の名を汚すまい、貴
島三郎に罪を掛けまい、自分も人に謝るの否やさに罪を自分に引
受けて御役所へ名乗て出たので有る、ア、忠と云はん義と云は
ん番頭と此手紙を讀み、居りませう、飛脚が表から手紙を投り込んで行くと、

討 仇 坂 璃 瑠 淨

有る、其處で八十兩の金を負けるなどは、理屈に合ぬわい、太助、
合はなけら如何なと勝手になさい、私らや盗んで使つたに違ひ無
んです役人「よし、云はねば白洲留りを申付ける、水木の支配人町役
人今日は下れ」番頭與助町役人は御役所を下つて銀座の内へ歸つて
参ります、主人三郎右衛門に箇様く、でございませうと申上げる、三郎
ア、一番頭とん太助に限つて其んな事をする者でない、お前御苦勞だ
が藏前の久金屋と云ふ兩換屋を聞き合して下さい番頭「へい宜しうご
さいませう」と急ぎ藏前久金屋へ来て聞か合して見ると全く武士が
朝早く来て手形を以て八十兩の金を引換へに来た、全く太助には
さなないと云ふ事が判つた、番頭立歸りまして此事を主人に云ふ、三
郎右衛門之を聞いて其しや番頭とん宇都宮から来て居られた貴島三
郎どのの仕業、太助で無い事が判りました、ア、アして早く太助を
御役所から下げたい、奥ひ飯を食はしてやるのが可哀相だと色々番
頭と相談をして居りませう、飛脚が表から手紙を投り込んで行く、

下さい「早速番頭與助は町役人を引連れて當番所へ右書面を差し出し、全くと助が主人の金を盗みしに非ず、何卒本人をお下げあらん事を願ひ申ます」と云ふ、掛役人右手紙を披ひて見て早速太助を引だし、役人「是りや太助其方は上役人を詐り盗みも仕ない金を何故盗んりました段は恐れ入りしました、私しも古主の名を汚しますまい、朋友貴島三郎を罪に落すまいと自分に罪を引受ましたのでございませ、役人上を詐りしは不埒と雖も又義心は大に衰れ遣す、今日は宿下掛迄下つて来る番頭太助どん、何でお前が斯んな事なら主人に委細を話さない、一日でも二日でも臭ひ飯を食なくちやア馬鹿くしい太助番頭さん、私しも一邊は江戸の半内へ這入つて見たいと思つたんで番頭戯談で無いよ、半へ這入つて喜ぶ奴が有るものか」是から銀座三丁目の宅へ歸つて来る太助へ、「且那樣へ程々御心配を掛け

まして相済みませぬ、私しも御當家へ御奉公へ参りまして御心配ばかりを掛けて居ります、何うも茶道具屋など云ふ品行の正しい商買は逆も出来ませぬ、一端は御暇を頂きまして手覺へましたる看屋でも仕やうかと思ひます、八十兩の金も一時に返済は出来ませぬ、追々儲けた内から御返し申す三郎イヤ其八十兩の金は私しは貰ふとは思ひませぬ、又お前が看屋を仕なさるなら家を借るにも金が入る、資本は私しが出して上げます太助難有うございませぬ、看屋の買廻し萬端は新場の看屋安兵衛さんを以て頼む積りでございませぬ、話を仕て居る處へ表から「へい御免なさいませ、淺草諏訪町松前屋より参りましたしてございませぬ、御手代の太助さんが八十兩の金を御使ひ込みに成りましたして御役所留に成つて居るよし、右八十兩の金は松前屋より辨金を致しませぬ、御手代御免なさいませ、太助は之を聞さいませ、八十兩は持参致しました」と其處へ出す、太助は之を聞いて大に喜び太助「是りや松前屋さんの御番頭難有うございませぬ、先

達て柳原の堤で聊か瀬戸物代金を拂ひ乳母やお坊ちやんを助けまし
 たとて其恩を報ずるが爲りに八十兩の大金で以て私しの命造助けや
 うどの思召難有うございます、御蔭で只今御役所から下りましたか
 ら何卒且那樣に宜しう仰つて泣いて太助が喜んで居りましたと仰つ
 て下さり「處へ又表から」□「イ御免なさい、新場の肴屋安兵衛の
 處から参りましてございます、御手代の太助さんが御使ひ込みにな
 りました八十兩の金は私方にて辨金を致しますから御宿下けを願つ
 て下さい」と又八十兩其處へ出す、聞て太助は余りの嬉しさに大
 上りて泣き出した太助「肴屋のお若衆さん、難有うございます、
 御役所から下つて来たのですから金はいりません、何れ安兵衛さん
 にお目に掛りますから宜う仰つて下さいませ」處へ又表から
 せ、某は駿河壺錦小路大久保彦左衛門家來伊藤治郎助と申す者、
 方手代太助大金を使ひ込んだる事に付き御役所留に相成り居る由
 人彦左衛門大に心配を致され、若し太助が御處分を受ける様な事
 が

有るなら則ち南町御奉行大久保權左衛門殿は主人彦左衛門様とは御
 兄弟の間、依つて之へ申入れ屹度救け遣したい、就いて如何なる
 か聞き合して参れいとの仰せに付罷越した「之を聞いて太助は又
 の様な涙を漏して泣きだした太助御用人様、難有うございます、大
 久保の殿様迄私しの事を御心配を仕て下さる、只今御役所から下
 て来た處です、何卒御歸りに成りましたら宜しう仰つて下さい、何
 れ御目に掛つて御禮を申上ります」情けは人の爲ならず、皆我身に報
 ふて来る、大に太助喜びまして是から處々方々と家を捜しに廻つて
 居る、折から宇都宮より兵藤玄蕃の家來鳥居一郎、中間の喜一を
 連れて水木三郎右衛門方へ出で来り、太助に遇ふて一郎偕て太助、
 此度貴島三郎の不都合断り無く二枚の手形を取り出し、其れを引換
 へ其金を旅費にするなどとは重々不届、主人鬼玄蕃様此事を聞かれ
 て正直潔白の太助を歎き其金を遣ひ捨るとは言語道断と有つて遂に
 貴島三郎を御手討ちと成る、右三郎の生首と八十兩の金を持参し、

太助へ申譯けを致せと仰付けられ罷越したので有る」と八十兩の金
 と生首の包んだのを出す、其包物を開ひて見て吃驚大助「何んにも兵
 頭の且那樣が首迄お切りなさる事は入らない、一時旅費に困つて出
 來心から成したる事、ア可愛相な事を致しました」と涙をこぼし
 其首は人を頼んで何れかの寺へ葬つてやりましてございませぬ、此
 を主人三郎右衛門に話す、三郎右衛門も大に驚きまして御氣の毒な
 事が出来ましたと申し居ります、此時鳥居一郎は「倍太助、久々
 御主人もお前に遇ひたいと仰つてござるから拙者と一途に本國宇都
 宮まで全道を致して貰ひたい、太助委細承知を致しました、太助は之
 を致し敵討の事に就て種々の打合せをなし江戸表へ引返して参り之
 れから鳥居一郎と全道して本國宇都宮へ参り古主兵藤玄蕃様に對面
 を致し敵討の事に就て種々の打合せをなし江戸表へ引返して参り之
 れからが名をば一心太助と改めて此敵討に就き非常に苦心を致しま
 しますと云ふ御話しに相成るのでございませぬが、一寸此處にて一服致

第 二 席

借て太助は兵藤玄蕃の用人鳥居一郎と諸共に本國宇都宮へ全道に
 て立歸り御主人兵藤玄蕃様に久々御目に掛り大助誠に且那樣、久々
 にて御目通りを致し御機嫌の体を拜しお目出度うございませぬ、承は
 りますれば、奥平内藏之助様には不慮の御最期を御逃げなさいまし
 たるよし、何んども御挨拶の致し様もございませぬ、玄蕃借て太助、
 其事に就き貴島三郎を以て悴彌五郎の行衛又は敵の詮議に遣したる
 處、其方を欺き八十兩の金を費消ふなごとは言語道斷、之れに依て其
 方へ申譯の爲めに其貴島三郎を手に致したるので有る、何卒其不慮
 合の段は勸辨を致して貰ひたい、大助、且那樣私しは其貴島三
 郎様が一事の出来心から成すつた事でございませぬから其罪を正した
 り又は貴方の御名前を出すのが否やさに私しは御町奉行に名乗つて
 出て御處分を受け積りでございませぬ、貴島三郎が入らざる手

討 仇 坂 璃 瑠 淨

紙を越しましたるばかりに貴方の御名前まで御町奉行所で申し上
 げる様に相成りまして何ん共相濟まぬ事を致しました玄蕃イヤ
 其れは何うも致し方がない、就いては太助其方を本國へ呼び寄せた
 のは外の事では無い、右敵討の事に就て其方に談したい事が有るの
 だ、其方は當時江戸表に居るのだから敵山崎親子兄弟の奴等は必ず
 江戸に居る事に違ひ無いから何卒か其詮策も致して貰ひたし、亦
 彌五郎が剣術修業の爲め三ヶ月前當地を出立し只今は何れに在る
 やら相判らず、之れも何卒か行衛を探して本國へ立歸る様に申して
 貰ひたい、其忤彌五郎が立歸り次第拙者も職祿は殿へ返上致し忤諸
 共に浪人をなし先達て當家を浪人せられたる十有余名の正義の人々
 と共に申し合せ幼少の源八郎に助太刀をなし内藏之助殿の御無念を
 晴させやうとの所存で有るから何卒か忤彌五郎の行衛が知れたなら
 早く本國へ歸る様申して貰ひたい太助如何にも承知致しましてござ
 います、左様なら最早御暇を頂戴致しますと御主人玄蕃様に御

討 仇 坂 璃 瑠 淨

分れを告げ宇都宮を出立なし江戸表へ歸つて参ります途次、幸手
 の宿吉野屋と云ふ宿屋の表から太助「オ、御免なさい、何卒か今晚は
 一宿お籠み申します、男へイ入来しやい、御早うございませす、おす
 るぎを持つて来なさい」ハイと女中は盥へ湯を汲んで持つて参り
 ます、足を洗つて下女の案内で奥の一間に通り、旅差しを床の間
 に置き坐敷に就きましてございませす、此時奥の一間に泊つ
 て居りました、一人の武士が仲間を連れて居ります、今其仲間が、
 仲間お旦那様、唯今表から還入つて参りました、奴は以前兵藤玄蕃
 の屋敷に仲間奉公を致し居つた太助でございませす、武士「ム、然ら
 ず、此奴は捕者の父、淺野丹藏殿を寛永七年の正月元日、宇都宮の大
 手下馬先に於て槍玉に上げて國を立退いた奴、其頃は拙者江戸勤番
 中に合したることを幸ひ、父の敵一刃の下に討ち果して呉れん」と考
 へて居ります、此方は太助でございませす、一淺野丹藏の忤彌五郎が

全宿を致して居ると云ふ事は毫しも知らず太助「オ、姉さん、小便所は何處に有るんだい」と其儘坐敷を立つて小便所に來り今用便を足しや
す太助「然うかい」小便所を立つて小便所に來り今用便を足しや
うと致して居りまする折敷、此方の蔭より「ヤ、ハ、ハ、無禮者奴、武
士たる者に不淨の小便を仕掛けるとは憎き奴、太助「オ、ハ、ハ、和郎
さんが其所に居なさるのなら何故聲を掛けて下さらない、乃公「ア、小
便が出来るうだから急いで此處へ遣つて來たのだ、和郎さんが其處に
居るか居ないか其んな事ア知りアしねエ、其れに無暗に乃公の胸を
突きアがつて無禮呼はりをする此ハコトコト武士、武士、ハ、ハ、武
士に向つてヒヨツ、ヒヨツ、何事だ、最う勘辨は相成らん、覺悟致せ」
と刀の柄に手を掛ける太助「コ、コ、コ、ムさけアがるな、此木葉武
士奴、手前達に此体と切られて堪るものかい」と其儘自分の坐敷へ
走り歸り床の間に立掛けて有つた差し追取り太助「ア、來せ」
と突然鞘を拂つて切つて掛る、此方も同じく鞘拂ひに及び双方互ひ

比チヤチヤ事起つた、と切り結ぶ、此時驚いたのは宿屋の亭主、
出来な、斯う云う事は武士で無ければ行けない、と思ひましたか
幸ひ、奥の間に泊つてお出で成さるは何んでも武術修業のお方に
遠ひ無い、彼の御武家さんにお願ひ申すより外致し方が無いと奥の
間に飛び込んで参り亭主「ハイ、お願ひ申します、武士「何んだ亭主、
唯今私の方へ御泊り成さいましたか一方は御武士、一方は御仲間何
んでも小便が掛つたとか掛らないましたか一方は御武士、一方は御仲間何
ますのですが何か卒か貴方に御仲載を御願ひ申したものでございませ
武士「然うか、身共も諸國修業を致して此度、本國へ歸る途中當家に
一泊を致した宵からは寢られもせず何にか當家にオ、ハ、ハ、でも起
つて呉れよば宜いから楽しんで待つて居たのだ、決闘とは何うも男
ましい、武士「た、然う云ふ事は至極好む處で有る、遣らせ」
亭主「且那、御冗談云つちア行けません、私し方に願助の出來る

を連れて自分の居間に歸り來り彌五借て太助、其方は相變らず吾が
 父上へ御奉公を致して居るか太助、若旦那様、和郎さんは御國の願動
 は何んにも御承知は有りませんか彌五、左れば國表の願動は九州修業
 中、筑後の久留米で聞いた、尤も詳しい事は判らぬけれど、共何か宇都宮
 に願動が出来たもの事、依つて取るものも取り敢えず本國へ引返す途
 中、此處で其方に面會致したのだ、全体何う云ふ次第の願動で有る、
 見れば其方も風姿の變つて居る様子、如何致したので有る、太助、左れ
 ば若旦那、貴方が三ヶ年以前武術修業に御出立成すつた其後山崎將
 監の伴、人奴が御新造の湘江様を己れの妻にする事の出來ざりしよ
 り、之れを恨みに思ひ誰れから聞き出し、アがつたか、私しが彼の時的の
 擦り變、其れを正さんと私し、の姉、アが番頭、淺野丹藏の家、女
 中、奉公を致して居りましたのを山崎、人、と淺野丹藏、奴が土藏の内へ
 連れ込み、殿しく詮議を致したのを山崎、内、に於て責め殺しました、
 之れが爲り、私し、の兩親も終ひに死去、其れから私しは旦那様に、
 暇

のを待つて居られ、堪りません、然んな事を仰つしやらないで御
 仲裁をして下さいませ、武士、其れ、拙者が行つて納めて遣らうと
 來つて見ると、今双方が互ひに切り結んで居ります、最中、武士、アイヤ
 暫く御待ち下さい、今宵當家に全宿を致したる交誼を以て御仲裁を致す、御兩
 傷つ、今宵當家に全宿を致したる交誼を以て御仲裁を致す、御兩
 人共御静まり下さい、と其處へ飛び込んで参りまして、武士、ヤ、
 御貴殿は淺野丹五郎殿ではござらんか、丹五、ヤ、
 貴殿は兵藤彌五郎殿ではござらんか、太助、エ、貴方は若旦那で有り
 ますか、彌五、オ、其う云ふ其方は太助で有るか、何んだか最前から口
 の軽いよく鏡舌る奴だと思つて居たが借ては、其方で有つたか、借て
 淺野氏、如何云ふ行掛りかは知りませんか、何卒か今宵の處は御勘辨
 下されて、一間へお引取り下さいませ、言はれ、淺野丹五郎も、相手
 は鹿島新流の達人、茲でグズグズして居れば却つて自分の身を危くす
 る道理と、其儘ス、自分の座敷へ歸ります、後、彌五郎は太助

討 仇 坂 璃 瑠 淨

を頂き江戸表へ出る世間を詐り翌寛永七年正月元旦の未明、宇都宮大手先に忍び、槍持共の喧嘩を幸ひ親の敵や姉の仇と、山崎半人が城内から下つて来る奴を一槍突き入れました。が誤つて半人の右の股を貫き其場は非常の大騒ぎ、折りから番頭淺野丹藏奴が此騒動を聞くが否や玄關先きより飛び降りて、韋駄天走りに駆け付け来ることをモツケノ幸ひと此奴は物の見事に槍玉に上げましてございます。其後私しは宇都宮を出て大江戸へ参り銀座通り三丁目御公儀御入の茶道具屋水木三郎右衛門方へ御奉公中、折柄奥平大膳太夫様の御病死、其時死な無くつても可い武士が御高思を蒙つた大殿の御供せんと切腹を致しました、之れを殉死追腹と申します。うで私しは詳し、御法度を破つたるが故に若殿九八郎様へ御家督相續の御許可が下らば、大儀に於て御評定中、三月五日の日、宇都宮の御菩提所高善寺に於て亡君忠正君の御法事の際、内蔵之助先生御病氣に付き若旦那源

討 仇 坂 璃 瑠 淨

八郎様御父上に代つて御代参、其れを山崎半人奴が豫て絹江殿の意恨を含み、今日には亡君の御法事に代参とは何事である、苟しくも家老職兼御指南番の身を持ち乍ら、病氣だとして御参詣を成さらぬとは不都合極まる事である、御無念と心得、御屋敷へ立歸り親御内蔵之助様へ此話しを成さると、是れを聞いたる内蔵之助様は御病氣も厭はず、御菩提所へ御参詣と成つたが、其時何んでも無い事が言ひ上りと成り、高善寺に於て内蔵之助様と半人奴と決闘と成りました、其れを親且那玄蕃様が漸く双方を引分けて一時其場は納まつたと思つて居た處へ、山崎將監の件、二人の中二番目の主馬は國家老夏目勘解由の許へ養子に行つて居ります、此奴が後れて本堂へ上つて参り物をも云はす内蔵之助様の後ろから袈裟に切り付けた、彌五、、、、、憎い事を致した、して其後は何う致した、太助其れを親且那玄蕃様が夏目主馬の襟首に手を掛け肩に擔いで本堂の庭先に投付け付けに成りま

討 仇 坂 璃 瑠 淨

君に仕へて居るのには面白からずと遂は職祿を返上して十有余名の正義の武士は宇都宮を浪人致し、御若年の若旦那源八郎様に助太刀を致し、仇討を致そうと専心其準備を致して居ります、之れが爲めに親且旦那春様も安閑として仕へて居る事は出来なから貴方が本國へ御歸りになれば職祿御返上の上浪人して共に敵討の事に就き奔走致した、いとの事でございませ、何卒か明日貴方は御國表へお歸り成さ

討 仇 坂 璃 瑠 淨

した、主馬奴は腰骨を打ち放々の体で逃げ歸りました、然るにお痛しいは内蔵之助様、御養生も叶はず其夜御逝去と成つたが此赴きを御國家老夏目勘解由より江戸表若殿九八郎様へ言上致しましたる處江戸表よりの御沙汰には、奥平内蔵之助事家老職兼御指南番の身を落ち命するとは不届至極、之れに依つて家名改易を成し、其れが爲め持ち乍ら主君御法事の當日門人なる準人と及傷を成し、其れが爲め辨へず、及傷に及ぶは言語同断、不届至極、職祿取り上げ同じ追放申し付け、其處で唯然な御若年の源八郎様、何う追ひ申し付け、内蔵之助様の御家名を此源八郎様に御相續をさせたいと正義の武士が十有余名連印をして江戸御上屋敷へ参り、種々御家督の願ひを致し、すける共、何うしても御聞濟みがない、然るに高善寺に於て内蔵之助殿を手に掛け殺した國家老夏目の養子主馬なる者に何んの御答りも無く、之れ實に依估の沙汰と云はん、かゝる暗

相成りました、此方は太助、江戸表へ立歸り水木三郎右衛門に暇を
 貰ひ、是れから自分が香屋稼業を致さんと處々方々と家見に廻りま
 したる内神田三河町に幸ひ一軒の明屋が有りましたから、之れを借
 り受け入用の金は水木三郎右衛門と松前屋五郎兵衛と兩家から出し
 て貰つて此處に立派な香屋を開業する事と成りました、素より義侠
 心なる太助でございませうから人の難義と見たならば火水の中にも飛
 び込んで助けようといふ心、其上自分の左右の腕に一心如鏡と諒
 を致しましたるより之れから人呼んで一心太助と申して居りま
 す、斯くして己れが大久保彦左衛門の愛顧で諸大名旗本の屋敷まで
 も出入を致し手廣く商買を致し、然うして敵山崎半人一味の者有
 勝を深して居る、然る處へ今般大公儀にて御評定の上、奥平家は太
 公儀の御法度を破つたる罪と有つて、職祿半知と成り出羽の國村山
 郡山形へ御國替へを仰せ付けられる、今までは十八萬石の處へ九萬
 石に成りましたので有りませうから家中の者も千石貰つて居た者は

五百石と云ふ割合と成つて参りました、其處で兵頭玄蕃親子の者は
 之れを僥倖として職祿の返上を致し遂に野州宇都宮を浪人なし雀の
 宿の片傍、宇古井戸と云ふ處に開居なし田地を聊か買ひ求めり自分等
 が如何なる事を致す共後へ難義の掛らぬ様と女小供の名前を付け此
 處に浪宅を構へる事と相成りました、處へ或る日先達て宇都宮を浪
 人為せし正義黨の十有余名の人々は源八郎を引連れて兵藤玄蕃の隠
 家に來り、挨拶終つて彼一同は言葉を揃へ、甲借て兵藤御親子に申
 し上げたきは外の事ではござらん、以前く、吾々は先祖傳來の職祿
 を返上なし宇都宮を浪人爲したるは唯是れなる源八郎殿を御痛しく
 存じ内蔵之助先生の御無念を晴さんが爲りて有る、然るに今度宇都
 宮表より出羽の山形へ御國替へに爲つたることを幸ひ、之れより一
 打揃ふて山形へ乗込み國家老夏目勘解由の方へ養子に參つて居る當
 の仇たる山崎半人の弟主馬、尤も此奴が御法事の際内蔵之助殿を手
 に掛けたる奴で有りませうから先づ手始めとして此奴から討ち果した

致とうと此處に評讀一決致し義黨の内に寺西與平と云ふ者が有る、
 支善御貴殿御苦勞乍ら山形へ行つて篤と様子を探つて貰ひたい與平、
 委細長りましたと百姓の風姿に變じ宇都宮を出立致し出羽の山形
 へ乗込みました、後に正義黨の人々は寺西與平よりの歸りを今日か
 明日かと相待つて居ります、處へ表の方へ一挺の駕籠が下りて中よ
 り出ましたのが餘人に非ず、是れなん一心太助でございませう太助、
 、人足の衆大に御苦勞だつた、と懐中から幾程かの金を取り出
 し太助、是れを取つて置いて呉れ、人足、是りや如何も親方難有ふござ
 います、と人足は空駕籠を擔いで彼方へ行つて仕舞ひました、一心
 太助は浪宅の表の戸を押して開けて太助へ、且、且、且、且、且、且、
 います、支善、オ、オ、オ、オ、オ、オ、太助か、珍らしい先づ此方へ上るが可い太助、
 れは誰方も且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、且、
 今度仇討の事に就ては大きに奔走をして呉れるよし承はり喜ぶぞよ
 して此度参りしは何か敵の手掛りでも有つて其れを知らして呉れた

いと存じますが如何でござる、支善殿の御意見が承りたい支善、是れ
 は御一同の仰せ御道理には候へ共是れより吾々一同が山形へ乗込み
 は相済ませざる様に心得る、先づ短兵急に事を爲さず、何れ江戸表に
 於て敵の行衛を詮議致して居る一心太助より何んどかの便りも有り
 ませうから其れまでの處は御待ち有る方宜しからん一同、是れは支善
 殿の御一言には候へ共高善寺に於て内藏之助殿を殺したのの主馬で
 ござる、然らば此主馬に相當の答りも申し付け可きの處其沙汰もな
 し、之れ國家老夏目勘解由の片願の取計ひに及びしものなり、如何
 にしても吾々残念心外に存じますから是非此夏目主馬奴を討ち果し
 ませんければ止みません、と満面に怒りを現はして申し出でました
 るが故に兵藤支善も支善、其れ程までに御一同が思召すなれば一應出
 羽の山形へ間隙を遣はし夏目勘解由の屋敷は何れで有るか、之れを
 篤と探らし然して後彼の地に乗り込み養子夏目主馬を討ち取る事に

淨瑠璃坂仇討

日か明日かど相待つて居ります、
 ましたる間際寺西與平、與平、
 討ち取るの時來つたり、其故如何
 膳太夫、江戸表へ御用有之趣にて
 の御名代として江戸表へ罷り出
 てございます、と申しませす、故
 々方、吾々是れより途中まで罷
 へ出立する夏目主馬を途中に待
 首に果し状を添へて江戸表へ参
 住居を致して居る敵山崎準人に
 負を決せんと存する、彼れも又
 出張するは必ら定、斯く致して
 此義は各々方には如何思召さ
 至極道理、然らば其義に決せん、
 と一同は身仕度を成して出掛けん

淨瑠璃坂仇討

のか何うだ、太助如何にも仰せ
 保彦左衛門様の御蔭で諸大名諸
 出入を致して居ります、其うし
 到頭其手掛りを得ましたと云ふ
 本で大久保助左衛門と云ふ御方
 與三郎と改名して居る、其金齒
 て居り、此奴こそ正に山崎準人
 するが、此奴こそ正に山崎準人
 を貴方がたへお知らせ致しませ
 した、此時兵藤玄蕃は一同に向
 す、此時兵藤玄蕃は一同に向ひ
 れた、此時兵藤玄蕃は一同に向
 子を探つて立歸るに相違ないか
 山形へ乗込ひか、の兩様を定め
 山形へ参つたる寺西與平が何ん
 と寺西與平の歸りを今
 此段

と致しませうと、見て居りましたる太助は、太助時に且那方お待ち爲
 さい、貴方がたが其異様の出立でお出で爲すつちア逆も首尾能う敵
 討ちは出来ませうまい、一何故なれば貴方がたが結構なるは知行を返上
 成されては浪人を成されたのは何故で有るか云へば山崎兄弟を討
 たうと云ふの御所存でございませう、然れば夏目主馬なる者も此度
 殿の御名代として江戸へ出るにも必ず油断は致しませうまい、左すれ
 ば手軽く主馬を討ち取ると云ふ事は出来ませうまい、依つて貴方がた
 もガツリと姿を變へて御出で成される様に成さいます、
 を變へると云ふのは如何云ふ事に致すのだ、太助左れば其れは湯殿月
 山羽黒山へ参詣する行者の姿に成つてお出で成さるが宜しうござい
 ます、之れは江戸で申しませうと富士講と申しませう富士詣で或ひ
 は相撲の大山参り、大阪で申しませうと大峰山、皆白木綿の着物に
 梵字を書き朱の印を押捺して杖の中に屨への一刀を仕込み、之れで
 御乗り出しに成つたならば私しが此上なからうと思ひませうが如何

第 三 席

でございませう、
 らば左様致そうと、之れより白木綿を買ひ求め至急に其衣類を關へ
 行者の姿と成り、一心太助は一同の若替への衣類を兩掛けに入れ合
 力と成つて之れを擔ぎ、愈々之れより正義黨の浪人十有余名は出羽
 の國山形の城下へ乗込ひ其途中、野淵村の庚申家の松原にて九万
 石奥平大膳太夫の名代、夏目主馬が供人百余名を従へ、通り掛る
 を待ち受けて僅か二十名にも足らざる小勢を持つて此大勢の中に切
 り込み遂に夏目主馬を討ち取り然して其生首に果し状を添へて山崎
 半人兄弟を誘き出して本懐を達しよう云ふ、是れより追々勇壯な
 るは話してございませうが一寸御免を蒙りまして次席に於て伺ひ致
 します……。

借ても正義黨の浪士の人数は行者の姿にお出で立ち杖の内には屨への

一刀を仕込み、一心太助は着替への衣類を兩掛けに入れて合力と成
 り、夜にまぎれて宇都宮を出立して大田原へ出て彼れより道を變じ
 て會津街道、芦野、白坂、井出、牧の内、永沼と段々を途を運び出
 羽の國米澤の御領分赤湯と云ふ處まで参りました、此處は山家の祖
 泉場でございますが、今は便利に成つて居ります、此處は山家の祖
 に稱しき處で有りました、其處に出羽屋と云ふ宿屋が有る、之れへ
 表の方から這入つて來ます、其處に宿屋の亭主が飛んで出まして、
 亭主是れは皆さん、此お暑ひのに湯殿山へ御参詣は御苦勞に存じま
 す、お早ふござひます、ア何卒か御洗ぎをお取り成さいます、
 湯を呉れますから一同は足を洗つて奥に通ります、此時兵藤立
 は寺西與平を秘かに招き、玄蕃、貴殿御苦勞乍ら街道筋の様子を探つて
 來て下されたい、夏目主馬が何の邊まで出て居るか與平、長ましまし
 た、と寺西與平は表へ飛び出しました、
 與平御一同へ申上げます、今晩主馬は之れより三里先の野淵村の

泊りでござります、然うして仇討の場所は此野淵村の松原が最屈強
 と之れも健かに見届けて参りました、玄蕃、是れは御苦勞でござつた然
 らば各々方何分敵は大勢、味方は小勢、若し吾々不運にして討たれ
 るやも計り難し、其の時は之れが今生の別れでござる、コリヤ太助、
 貴方は亭主に申し付け酒肴の用意を致させい、太助、へい、宜しうござ
 います、と壺所口に來り、太助、オ、御亭主、何卒か酒肴の用意を
 して下さい、亭主、へい、精進者でございませう、太助、精進はア無
 へ、魚類は、亭主、お客さん、元談云つちア行けません、貴方が九
 は是れから湯殿山のお山を成さるので有ませう、山へ登るまで
 魚類などを食つて入來しやいますと彼のお山は魔所でございますか
 ら、天狗様なんぞが出て引裂いて仕舞います、太助、オ、オ、御亭
 主、生臭ひものを食はうが猪を食はうが心にさへ誠が有りア罰が當
 るもんかい、天狗なぞが出やアがつたら反對に取つ掴まへて焼鳥に
 して食つて仕舞う、宿屋の亭主は膽を潰した亭主、是りア大變な人

討 仇 坂 璃 瑠 淨

が泊つた、一斯んな人には相手に成れねばと恐れ居ると一心太助は
大助「オイ、御亭主、和郎達ちは料理するのを大變に恐れ居る
様子はだから乃公がして遣る」と太助は庭へ下りて漸々の事に酒肴を
取り揃へて其れへ持つて参ります、是れから一同は暫時の間の英氣を
を養ひ酒を吸み交して少しの間唾眠まんと床に就き明け方に目を醒
して朝飯を食し宿料を拂つて此處を出立致し米澤領分野淵村庚申塚
に通り掛る、新から彼方のかたより九萬石奥平大膳太夫殿の御名代
夏目主馬は行列美々敷造つて参ります、之れを眺めましたる
兵藤玄蕃は玄蕃「サア忤爾五郎、其方の爲めには勇の仇、源八郎の爲
めには實父の敵、兩人致して乗物に近寄り當の敵たる主馬を討ち取
る事を第一に致せ、吾々一同は其他の者を引受けて闘ひを致すから
左様心得よ、兩人委細心得ましてございます」と夏目主馬の同勢を今
か、と待ち受ける、處へ斯くとも知らず通り掛りましたるを夏目主
馬の同勢百余名、今庚申堂の彼方まで来かゝりましたるを見るより

討 仇 坂 璃 瑠 淨

早く隊長兵藤玄蕃は「ソレソレ……」と合圖を致したり、此時兵藤
五郎に源八郎の兩人は着て居りましたる白木綿の衣類を脱ぎ捨てま
すると早や下には襷十字に綾取り杖に仕込んだる覺悟の一刀抜き放
ち松の樹蔭より乗物間近く近寄ると相見へたが兩人は天地も轟く大
音にて兩人「マア、其乗物の内にお在するは夏目主馬殿ならん、斯
く云ふ吾は父内藏之助の敵、吾れは身内藏之助の仇、兵藤源五郎、
奥平源八郎の兩人なり、サア尋常の勝負に及べ」と呼つたり、折し
も此方の松樹には正義黨の面々同音に皆々吾々一同は義の爲めに奥
平源八郎に助太刀を致す者なり」と皆々一同に杖に仕込んだる一刀
の鞘拂ひをなし「……」と一時に斬り込んで参ります、之れを眺め
たる夏目主馬は豫て覺悟は致して有つたるものと見ゆ、主馬「マア、
者共、ソレソレ字都宮浪人が現はれたるぞ、防げや」と大音上に呼
はつたり「心得たり」と今井五平、徳永甚平、小笠原武平、若江善
三郎、其他の人々は「ソレソレ……」と一擧に鞘拂ひに及び、浪人組を相手に切

討 仇 坂 璃 瑠 淨

を引き抜き其三頭馬の尻をアッアッ切る、馬こそ可い異端でございませす、尻を切られて堪るもので無ひ、ハ、ハ、ハ、と駈け廻るハアア遠つたりと太助は向も馬の尻をアッアッ切ると、馬は驚き、何かとは堪りませす、夏目主馬の同勢中に駈け乍ら走り出す、此れが爲り同勢は何事ならん、後ろを振り返つて見ると馬三頭が荒れに荒れ、今此同勢の駈け込ひ様子、コハ塔らじ此荒馬を止めねば相成らん、之れに敵方一同は氣を取られて居る、此時此方に有つて此動静を眺めて居つたる兵藤玄蕃は、何故敵が亂れたかと思はれ、見れば味方の一心太助が敵の後ろへ廻り敵の荷馬を理用して無暗に敵を惱まして居る様子、玄蕃、ハ、ハ、ハ、太助と云ふ奴は實に何うも感心な奴だ、今まで此處に居たと思ふ、早や敵の後れに廻つて居るか、シ、此處ぞ味方に取つての利益なり、ソレ方々進め、と激しく號令を掛けて居ります、此言葉に勵まされて味方の人々は追々激しく切り込んで居る、其内に敵方は早や半弓の筒種も射盡して仕舞つ

討 仇 坂 璃 瑠 淨

り結ぶ、中には半弓の用意を致して居る者も有り、弓に矢を番へて敵を切つて放つ、之れが爲りに浪人の面々は、大に群易をなす、中にも兵藤玄蕃は此方に有つて八方十方に下知を傳へて居りましたが、此動静を見て、此鹽梅にて時を移すに於ては、今にも此出羽國置郡米澤の赤城主上杉家より加勢の人數にても繰り出された時は、所詮此仇討は六ツヶ敷し、如何致して宜からうと大に苦心を致して居ります、勝負の様子を見て居りましたる例の一心太助は太助エ、ハ、ハ、ハ、齒、齒、齒、ハ、ハ、ハ、無いか、正義黨の旦那方は腕に覺わが有り乍ら未だ敵一人も討ち取る事が出来な、いと情ない、其れヒア乃公が一働き働ひて呉れん、と松の蔭より敵の後へ廻ると、駈荷を付けたる處の馬が三頭、馬方人足は此處に恐れ、逃げ仕舞う、馬は畜生の事なれば何んの頼着も無く、其處等に生へて居る草をバリ／＼食つて居ります、太助、コソ此馬を理用して敵を惱まして呉れん、と腰に帯して居つたる旅差

浄瑠璃坂仇討

在る内蔵之助の墓前に手向け其上江戸表へ乗り込む事に致さう
 と決心なし玄蕃太助、大に今日の働き過分である、其處で貴様は此
 夏目主馬の首級を吾れより先き宇都宮の入口の茶店まで持参して待
 合せて呉れ、吾れ等は後より参る事に致す、吳々も此首級は他人に
 見せぬ様に致して呉れ、太助へい、宜うござります、と此首級は片袖
 を切り其れに包み其上を風呂敷に括み浪士の人々に分れ宇都宮を指
 して急ぎます、後に正義の人々は血湖を拭ふて鞘に納め、又も行者
 の姿と成り金鈴を振り、南ア、無湯殿山大権現、南ア無羽黒山大権
 ……と、ン、ン、ン、と鈴を鳴らして以前来たし宇都宮指して引上
 げます、其後へ米澤上杉家より拔身の槍刀にて大勢來つて見ます
 と最早後の祭り、其處に此處で討たれたる奥平家の家臣の死
 骸、之れを其れく、取り片付けを致し此事を同國山形へ知らせ、
 する、當時の奥平大膳太夫殿は殊の外のお怒り、己れ惜く兵藤玄
 著、其他の奴等、予が名代に指し向けたる者を討ち取る、とは之れ予に

浄瑠璃坂仇討

た、其上味方の面々は次第に討たれて参る、夏目主馬も此方に在つ
 て下知を傳へて居りましたる處へ源八郎に頼五郎が夏目主馬に近寄
 り、兩人最早逃れぬ夏目主馬、實の敵勇の仇、イヤ尋常の勝負く、
 と切り込み來る、夏目主馬も今は是れまでなりと一刀の鞘を拂つて
 ナヤチ、ン、ン、と切り結ぶ、素より兵藤彌五郎は若年乍らも鹿島新
 流の免許取り、一ヤ、一ヤ、と一聲夏目主馬の右の腕を切り落す、何
 塔らうやア、ッ、と後へ倒れる處をヤッ、と一聲胸板目蒐けて切り付
 ける、乗り掛つて右左より「父の敵、勇の仇、思ひ知れよ」と遂に
 止めを差し遣す、難なく敵を討ち果しましたとございます、大將討た
 れて難兵全からずとの例、之れが爲めに敵は大に亂れて討ち残され
 たる者は、コハ叶はしと米澤の方へと逃げ散ります、毎に正義の入
 々、は大に喜び、先づ之れにて敵の片割れ一人は討ち取つたり、サア
 此上は此首級に關し状を添へて江戸表へ乗込み當の敵たる山崎隼人
 兄弟を討ち取らねば相成らん、一先づ國表宇都宮の善提所高善寺に

白刃を向けたるも全様此儘に捨て置かうやと、直に早討を以て江戸表大公儀へ向けて兵藤玄蕃其他の者の人相書きを添へ訴へに及びました、是れに依つて大公儀に於て當時此浪人は厳しく詮議と云ふ事に相成ります、然し之れは後のみ話してございます、之れより先きに彼の一心太助は夏目主馬の生首を預り宇都宮の城下の入口大谷と云ふ處へ来る、以前自分の香屋をして居たる時に心安くして居りました茶店に來り太助、ヤ、お婆さん、婆、コソ、太助さん、從前から江戸へ行つて香屋をして居るんだい、今度宇都宮へ少々用事が有つて來たのだが少時間彼の奥の間を貸して貰う、婆、サア、太助さん、悠々然々休みをしてお出で、其處で太助は袱包を引掛けたる儘奥の冷しそな座敷へ來て縁側へ袱包を置いて小便に行きたく成つたから向うの便所へ行つて便を足して居ります、處へ表から這入つてお來で成つたお方は年の頃五十七八、六十前後、那色の帷

子に黒絹の羽織に五所紋、野袴を穿ち金銀鍍たる大小を帯し賜ひ其後よりは十四五名の供を見へ、許せよと云言葉を掛けられてズッとお奥の間へお通りになり成り今既に縁側へ上らうと致しますと片傍に包物が置いて有るにフト目を付けたる黒坂善造と云ふ武士、何んぞ有らうと側へ引き寄せて上から摩つて見ると、何うも手當りが西瓜で無く冬瓜で無く何か變だわいと思ひましたから袱包みを引の解き開いて見れば、如何に、中には今切りたての生首でござひます、町人百姓なれば驚きませうが武士なれば別に驚く事も無く善造、ヘイ、恐れ乍らお前申し上げます、此の處に筒様な生首の括んだ袱包でございます何者が持ち参りましたもので有りませう老人、茶店の者に問ひ糺して見、善造、ハ、畏りました、コソ、此様側に斯う云う風呂敷包が置いて有るが何者が持ち参つたるか、婆、ハイ、其れは今しがた香屋さんが持つて來たのでござひます善造、何、香屋

……肴屋ならば、飾の首とか、飾の首とかなら、別に不思議は無ければ、共人の生首を賣買する事は有るまい、して其者は何處へ行つたか、藝ハ、今便所へ行つて居るのでございませう、善造、然うか、今に出で来るに違ひ無いから来たなら、糺して遣らうと、待つて居る處へ程無く、便所から出て手を洗つて此方のかたへ出で来り片邊を見ると立派の武士が扣へて居られるから、是りア行け無いと思つて例の風呂敷包を提げて何氣無く表の方へ出て行かんとするを善造「コリヤ、町人待て……太助「へ、且、那、何か御用が有るので、善造、如何にも、貴様が手に携へて居る其風呂敷包みには何が括んで有るか、太助「エ、且、那、是れですか、是りア何んです、私たちが出羽の湯殿山へ夏のお山を致しまして歸り途、山形の御城下を通りましたる處、八百屋の店に西瓜が幾つも並べて有りまして、大層宜い西瓜ですから、江戸への土産に一つだけ買つて来たのでございませう、善造「黙止れ、許りを申すと許さんぞ、太助、何を私にア詐りました、善造「コリヤ、貴様は眞面目な

顔をして居るが其風呂敷の内には人の首が括んで有るのだらう、如何だ……太助「何……生首だ、其れヒア和郎さん此風呂敷を開けた、コオ、武士、何故人の物品に手を着へた、善造「コリヤ、怪しいと思ふたから開いたのだ、太助「云ふな、怪しいと思つたら何故風呂敷包みの持主の出るまで待つて本人が得心するのを待つて開けねんだ、武士と云ふ者は正直にせんければならぬ、若者が謝りも無く人の風呂敷包みを開けるは、正直にせんければならぬ、若者が謝りも無く人の風呂敷包みを開けると云ふが有るか、善造「ヤ、其方は武士に向つて無禮過ぎ、有体の通り白状致せばよし、白状致さんに於ては細を掛けるが、何うだ、太助「ヤ、打つとも縛る共何うとも勝手にしる、然んな事で、白状する様な人間たア少とは違うぞ、善造「其れヒア其方に細打つから、左様心得い、ソレ者共此者に細打つ……ッ、ハッ、と答へて付さの、武士は今既に繩に掛けんとする、此時片邊に有つて、覽成すつて入らせられたる、老公は是れなん當時野州宇都宮の御城主松平下守殿の御隠居出典公と云ふお方でございませう、忠興「コリヤ、待て、

浄瑠璃坂仇討

必ず其町人に細打つ事は相成らん、唯今彼れが言葉の端々を聞いて
見るに町人乍らも丈夫の魂、中々一通りにては申すまい、コリヤ其
れなる町人、予は當時當宇都宮の城主松平下鶴守忠興で有る、其方
が持ち参りし其生首の様子を見るに町人百姓とも思はれず、武士の
首級と思ふが何者に頼まれて斯かる物を以て往來を致すか、有休の
通り申して見よ、太助「へ……殿様、如何様にお尋ね成さいますか、
何者に頼まれたとも何んども然んな事は白状する事は出来ません、
假令此場に於て私らの首を切られても容易言ふ事は出来ません、今
はお尋ねに成らなくとも相判ります、忠興「コリヤ、其れなれば強ひて
尋ねようとは言はん、コリヤ用人黒坂善造は酒肴の用意をなし其所へ持参を致
ハッ……と答へて用人黒坂善造は酒肴の用意をなし其所へ持参を致
しますると御隠居忠興公「忠興「コリヤ、其れなる町人、貴様は武士も
及ばぬ丈夫の魂、予が盃を遣す」とお差出しに成る太助「コリヤ何
も殿様、難有ふござります、其れヒア頂戴を致します……殿様、御

浄瑠璃坂仇討

冤なさい、御返盃を致します、一心太助と云ふ人は無頼着の人で
大久保彦左衛門様の御目通りへ出ましても遠慮用捨をしない、十八
万石の御隠居忠興公と盃の取り遣りを致して居ります、所へ表の方
へ参りましたるは例の舊宇都宮義黨の浪人方、皆々行者の風貌で大
谷の茶店に掛り浪人「許して下さい」と這入つて来る姿を見て、婆「オ
ヤ、貴方がたは先々領主奥平様の家中ではございませんか浪人「ア
イヤ、何んにも申すな、吾々は湯殿山へ参詣をなしたる行者である
時に先刻簡様くの若者が一人参りは致さなんだか、婆「ハイ、
先刻お出でに成りまして何んだか奥の座敷に出でに成つて居りま
す立派な武家様と酒宴を致して居られます浪人「ナ……、武士
と酒宴をするとは怪しからん、太助と云ふ奴は借て、無頼着な奴
だわ、今吾々は失望の有る折柄に無暗に知らない武士と口を交い
て呉れては大に困るわ、と思ふたが浪人「婆さん、一寸茲へ呼んで
貰ひたい、婆「ハイ、畏りました」と老妻は奥へ参り、婆「アノ……、肴屋

討 仇 坂 璃 瑠 淨

さん、唯今表へ湯殿参りの行者さんが来て和郎さんを茲へ呼んで呉れいと仰います。太助「オ、然うかい、エ、殿様、一寸免を蒙りますか」と其儘其處を立つて表へ参り大助「コリヤ、且那方でございませうか、お早ふお出でに成りました浪人太助、和郎は何か奥の坐敷に於て知らない武士と酒盛をして居ると云ふ事、有るが何う云ふ譯で其武士と懸念に相成つたのじや大助「左れば且那方、貴方がたからお預り申しました生首を提げて此茶店に参り様側に其風呂敷包みを置いて用便所に這入つて居ります内、其後へ這入つて來ました十五六人連れの武士、其中に年輩は五十七八、品行の正しい威有つて猛からん何んでも御大身のお方に違ひ無いと思ひました。其方が例の風呂包に怪しいと思ひましたものか開けて見まして何者に頼まれせん、首を切られても有るかと思ひました。尋ねますければ共私「ちア言ふ事は出来ぬ、首を切られても云はねど云つたを例の家來奴が私らに細を掛けやうと致しました。其年輩のお方が其れを止めて、吾れは當時

討 仇 坂 璃 瑠 淨

宇都宮城主松平下總守の隠居松平忠興で有ると名前を名乗り成されて私しの様な者を側近くお呼び寄せに成つて武士も及ばぬ丈夫の魂じやと賞りの言葉を下され、まだ其上、其お方からか盃を頂戴致して居る處でございます。若し貴郎がたがお出でに成つたら是れへ呼べいとの仰せでございます。若し貴郎がたがお出でに成つたら是れ浪人「然うか、其れではお目通りを致さう」と衣服を改め十有余名の人々は太助に案内をさせて奥の一間に通り遙かの方に一同は頭を下げて扣へて居ります。此時御老公忠興殿には忠興「コリヤ、予は松平忠興で有る、其方等は何れの家來何れの浪人なるや、姓名を名乗れ浪人「ハ、ッ、吾々は以前當宇都宮與平大膳太夫家來當時浪人兵藤玄蕃と申す者でござる、之れに扣へて居ります。是は伴五郎、與平源八郎、桑名友之進、與平傳藏、森甚太夫等皆々宇都宮浪士の者共でございます。忠興「して其方共等は何故に與平家を浪入を致したので有るか玄蕃「其義は則ち之れに扣へて居ります。與平源八郎の父

内蔵之助と申する者同家中山騎隼人兄弟の爲めに先年當地菩提所高
 善寺にて歎し討に遇ひましたるが故に義に依つて若年の源八郎に助
 太刀を致し仇討の本懐を遂げさせたが故に職祿の返上を致して浪
 人と相成りましたのでござります、唯今之れに持ち参りました此
 首級は敵山騎隼人の舎弟當時出羽山形の奥平家國家老夏目勘解由方
 へ養子に参つて居ります途に主馬と申する者、今度比殿の名代とあつ
 て江戸表へ参ります途中に待ち受け同國置賜郡米澤の領分野淵村
 の庚甲塚の片傍りにて討ち取りましたのでござります、此上は此の
 生首に闘し状を添へて誠の仇たる山騎隼人は當時江戸表本郷御弓町
 天下の御旗本大久保助左衛門殿の長屋に滞在せるよし、之れに贈
 つて場所を定め勝負を決せんとするの所存でござる」と一伍一什と
 申し上げますと之れを御聞き遊ばしたる隠居忠興公にはハハと
 膝をお擲きに成つて忠興ア、ア、勇なり義なり、今天下大平にし
 て、何れも武を忘れ世の中遊惰に流るゝ折柄、其方等の如き義勇の

武士現はれて眠を醒させると云ふは實に適れどや云はん賞り遣すぞ
 よ、玄蕃ハ、ア、難有くもお賞りの言葉を下し置かれまする段身に
 取りまして如何ばかり大慶此れに過ぎず忠興して其方等は無祿の浪
 人なれば若し金に差支の如き事あれば何時たりとも當宇都宮に申し
 送るべし、其節は必ず入用の金は調達致し遣はすぞ、之れは聊か
 ながら肴料として其方へ與へるぞ、と下げに相成つたる金子は
 五十兩でござります、忠興今少し遣したけれ共今度は日光東照大権現
 の廟へ参詣の歸途なれば僅少なから之れ丈け遣はすぞ、玄蕃ハ、
 ア、吾々の如き浪人者に難有き下言を下さる而已か其上莫大の
 金子までお下げ下さる段死しても忘却仕らず忠興ム、其れでは是
 れにて分るゝぞよ、首尾能く江戸表へ参り本懐を達せよ、去ばであ
 る、と其儘供人を従へ宇都宮城へお歸り成る、後に正義浪士の入
 るは浪士太助、和郎の相忽しいのには實に困る太助何にが粗忽しう
 ござります、浪士大事の生首を置いて其儘に便所へ行くなんて實に危

除の次第、畢竟彼の様な方であるから能いけれ共若し公儀の役人
 で、も有つて見よ、吾々の身の上に関する太助、貴方がたは其の様に仰
 るけれ共私しが斯う云ふ事をしたから五十兩でもお貰ひ成すつたの
 でせう、それなら私しに五十兩の内一割の口錢を遣ると仰つても宜
 しうございませう浪士、コリヤ太助、其んな氣業な事を云ふな、サア
 之より、善提所へ参らん、一同は高善寺に参り墓前に主馬の生首
 を備へ出家を頼み墓回向をさせ、之れより一同は交るく、今焼香
 にかゝらんとする折柄高善寺の表門の方に俄に騒ぐ鯨波の聲、太助
 は何事が起つたかど門外へ飛び出して見れば向ふの方より後鉢巻玉
 棒、振身の槍刀を携へて同勢凡そ六五十人、砂煙を蹴立て、今しも
 高善寺を目指して進つて参りますと云ふ、サア此人々は何人でござ
 いますせうか一寸此迄にて一服致します……

第四席

借ても高善寺奥平内藏之助の墓所に向つて正義の人々は今しも焼香
 を致さんとする折柄門外には異様の風姿にて抜身の槍刀を携へて進
 つて参りまするを見ました一心太助は大に驚き、門内に駆け戻り、
 大助、且、且、何方、大變でございます、只今此高善寺の門外へ斯様
 く、筒様、の姿にて駆け付けまするが之れ正に出羽の國山形奥平
 家から貴方がたをば討ち取らんと参りし者に違ひは有りませうし
 て見れば斯く安閑と焼香などをしてござる譯にはいさませうし、と
 知らせましたる故一同は大に驚き浪士、ソレ用意あるべし、と今既
 に立上らんとする處を兵藤玄蕃は玄蕃、アイヤ方々静まり賜へ、之れ
 は決して出羽の山形奥平家より参りし人数に非ず、拙者考ふる處に
 ては先刻大谷の茶店に於て高恩を蒙りし松平下總守殿の隠居より
 吾々が高善寺に於て墓回向を致して居る内萬一出羽山形奥平家より
 討手が向ひなば一同の迷惑なる事を察しあつて差向けられたる
 人数に相違有るまい、と一同を制止し止めて悠々として兵藤玄蕃は表

門外に出で見れば案に違はず真先に進みましたるは用人黒坂善造
 玄善「是れは當家内家來方には斯く異様の風姿にて出で成されし
 は何事ぞござるぞ善造去れば先刻大谷の茶店に於て其許違に分れ
 城内に引取りに相成りしは老公の仰せには如何にや黒坂善造
 奥平家の浪人兵藤玄善其他の共は今高善寺に於て墓回向を致して
 居るに違ひなし、其處へ羽州山形の討手等が向ひなば定めて難義を
 致すで有らう、依つて其方は屈強の武士を引連れ高善寺門外に有つ
 て正義の浪士共を守護致すべしとの嚴命にて只今推參致したので
 ござる、心静かに焼香を遣げられよ」此言葉を聞いた兵藤玄善は難
 有涙に咽び玄善「斯くまで吾等を思はれぬ人数まで差向けられ守護
 下さる段此高恩は返すくも難有く存じ奉ります」ど高禮を述べ
 て門内に退き悠然として焼香を果し、下總守殿の家中方へは厚く一
 禮を述べて分れを告げ宇都宮を出立致し日を重ねて江戸表神田三
 河町三丁目一心太助の宅へ秘かに夜に入つて到着致しましてござる

ます、其處で一同評議の上闘状を認め場所は牛込高田の馬場に出張
 致して互ひに勝敗を決すべしと云ふ文言にて其闘状を夏目主馬の生
 首の髻に括り付け玄善太助、明日其方が此生首を携へて本郷御弓町
 大久保助左衛門の門長屋に入込み敵山崎準人弟九平及親父將監等の
 目に留まるように致し置いて貰ひたい太助「委細承知致しました」と
 其夜は明けて翌日一心太助は首を包みし風呂敷包みを携へ本郷御弓
 町の大久保助左衛門の屋敷へ遣つて参り、之れを山崎親子兄弟の目
 に留る様に致そうと思ふても何うも都合が悪い、自分か仇山崎の坐
 敷借りを致して居る庭先さへ忍び込むと云ふ譯にも行かず、其處で
 仲間部屋に参りますと日頃懸念にして居る淺吉と云ふ者が何か内
 職を致して居りますから太助「オ、淺吉、誠に久しう淺吉「オ、
 太助兄哥ですか、和郎さん永く商ひに廻らねえが休でも悪るかつた
 のですか太助「ナ、然うシアねえ、實は乃公ア出羽の酒殿山へお山
 をして居たから其れで此方へ來なかつたんだが漸々昨夕歸つて來た

んだ 淺吉「然うかい、何故和郎が来ないのたろうと評をして居たんだ
 太助「其處で淺吉、何か和郎に土産を買つて来ようと思つても繁昌な
 か江戸へ田舎の物なんぞ仕方がねえと思つて何んにも買つて来な
 つたら、土産の代りに和郎に一寸一杯買うから其處まで来て呉んね
 二 淺吉「兄哥、何うも濟まねえ、和郎に御馳走に成るばかりで一度の
 返しもした事アねえ 太助「アア、其んな事を云はねえで一所に來ね
 二 淺吉「其れヒア御馳走に成ろう」と淺吉は太助に連れられて上野廣
 小路に森山と云ふ料理店が有る、其れへ連れて上り太助「アア淺吉
 慮しねえで廻りねえ 淺吉「如何したんだイ太助の兄哥 太助「其處で淺
 吉「之れア小遣にしねえと金を一兩取り出します 淺吉「オヤ、太助「兄
 哥「元談ヒアねえせ、御馳走に成つて其上斯んな金なんぞ貰つたら濟
 まねえ、之りア和郎に返しませう 太助「アア、其んなに言わねえで
 取つて置きな 淺吉「何うも氣の毒だねえ、其れヒア貰つて置くま、
 太助「時に淺吉、乃公が和郎に折り入つて頼みた事があるんだが聞

いて呉んねえか 淺吉「何んだ太助兄哥、乃公が身に出来る事なら何ん
 な事でも聞くま 太助「外ヒア無へが此處に此風呂敷包みがあるんだ、
 是れを手前が持つて歸つて晝間は行けねえから日の暮れに和郎の主
 人の座敷借りをして居る本田與三郎と云ふ人があるだらう 淺吉「ま、
 、有る、彼りア乃公が御主人や御旗本方の金齒組銀齒組の御方へ
 の金貸しの金主だ 太助「サア、其本田與三郎と云ふ人の坐敷の庭先さ
 の雪見燈籠か何んでも介意ねえ、其人の目に付く處へ置いて貰ひた
 い 淺吉「其れで此風呂敷包みは何にが這入つて居るんだい 太助「何にが
 這入つて居ようが何うしようが乃公の言ふ通りして居るんだい 太助「何に
 だ 淺吉「けれ共ねえ、中に何が在るか知らねえものを持つて歸る譯に
 いけねえ 太助「然んなに迂論に思ふなら中を見るが宜い 淺吉「然ん
 なら見るま」と何氣なく開けて見て 淺吉「太助兄哥、否やだ、之れ
 ア人の首ヒアねえか 太助「然うだ、生首だ、淺吉「何故和郎斯んなもの
 を雪見燈籠や春日燈籠に乗せて置くんだい 太助「オ淺吉、其本田與

三郎と云ふ奴は以前野州宇都宮奥平家の家老職山崎將監の伴山崎半人弟九平、其譯は斯うく箇様く、と前々よりの事を一伍一什物語る、其れで此首と云ふのは山崎半人の弟だ、此處に聞状が添へて在るんだ、之れを見やアがつたら弟が殺されたんだから無念に思つて高田の馬場へ出張するだらう、其所で今云つた正義の御浪人が御若年の源八郎様に助太刀をして討たせるんだ、斯んな悪人に家を貸して居りア御羅義の基だ、一層追ひ出して仕舞ア譯はねんだ、何か都合よく遣つて呉んね、淺吉、然うか、其れヒア屹度都合よく遣つ付けると太助、然んなら必ず遣り損なは無いように遣つて呉れ、と此處で太助は何かの事を頼んで置いて三河町三丁目へ歸つて来て此事をば浪士の人々へ物語る、之れを聞いたる浪士の人々は、其れヒア必ず明高田の馬場に出張するに違ひあるまい、此時こそ必ず日頃の無念を晴さんと云つて居ります、其れには引き替へ大久保助左衛門の仲間淺吉は太助に分れて御弓町の屋敷へ歸つて日暮を待つ

て居ります、内に難て夕刻と相成ります、淺吉は右の風呂敷包みを手を携へ仲間部屋を出て庭先の方へ廻らんと中門の外まで来り門内を覗いて見ると折しも椽側の處で當家の主人大久保助左衛門隣家の金齒組の旗本が三四名、山崎將監の伴半人弟九平、是れ等を相手に唯今酒盞の最中でございませす、依つて淺吉は今持つて行つて目付けられては言辭が出来ね、何んでも今夜の内に彼奴等の目に止るようになければア太助の兄哥に済まね、何うしたもんだらうと考へて居りましたが淺吉オ、然うだ、此奴ア此風呂敷包みの先を掴んで一、二、三、イと見當を付けて彼奴等の酒を飲んで居る真中へ放り込んで遣らう、と其處で淺吉は中門の屋根越しに門内へ放り込みましてございませす、すると恰度一同が酒宴を致して居ります、履脱の石の上へドス、ドス、と落ちて来た、ハツと物音に驚いて山崎半人の弟九平、九平、オヤ兄上始め御一同、何んだか只今履脱の石の上へドス、ドス、と落ちたものがあります、何んでございませうが一

浄瑠璃坂 仇討

應見届けて参りませう」と庭前に来り見ると風呂敷包みが一個轉り
込んで居りますから其れを提げて縁側へ立戻り九平「箇様なものか庭
先に落ちて居りましたか何んでございませう」と一同が開いて見ま
するどコハ如何に人の生首でございませう、何者が箇様な悪戯を致し
ましたか必ず之れは裏門の屋根越しに投げ込んだものに違ひござい
ますまいと尙も能くく、検めて見ますると是れなん出羽の山形夏目
勘解由の養子に成つて居ります弟の首級でございませう、何者の爲めに討たれ
準人「是れはお兄上弟主馬の首級でございませう、何者の爲めに討たれ
たのでせう」と見ますると書付が結び付けて有りませうから取る
手遅しと封おし切り開いて見ると其文に、先年宇都宮御善提所に於
て其許兄弟にて殺害致され候奥平内藏之助伴源八郎幼少に付き吾等
義に依つて助太刀成さんと浪人と相成り處々其許等の行衛を相尋ね
居候處其許日頃の勇氣にも似合は姿を隠し候段申怯未練の致し方
然るに今般奥平家一老職夏目勘解由の養子、則ち其許の弟主馬を羽

浄瑠璃坂 仇討

州米澤御領分野淵の庚申塚に於て討ち果し其主馬の首級に鬮狀を添
へて其許等兄弟に之れを送る、依り血統の兄弟の無念を思はれ候へ
ば明朝午込高田の馬場に出張せられ、其際互ひに勝敗を決すべき
もの也、寛永九年七月山崎準人、同九平殿へ、兵藤玄蕃義黨中「之
れを讀み終りましたる山崎準人、無念の涙骨髄に徹し準人「倍てこそ
吾舎弟夏目主馬は浪人共に討たれたか、ア、殘念や口惜や、サア
第九平、其方の爲めにも骨肉の兄の仇、今朝高田の馬場に出張なし
屹度勝負を決すべし、早く仕度を致せよ」と立上らんと致します
を始終の様子を見て居りましたる親山崎將監は將監「コリヤ待て兄弟
必ずとも短兵急事なかれ準人「其れじやと申して御父上、現在弟の
敵ヤツカ此儘に捨て置かれませうや將監「コリヤ、必ず宇都宮浪人輩
の計略に乗るな、彼等は當御屋敷に隠通れて居る上は將軍家御直參
の御屋敷故無法に亂入する事が出来ざる故弟主馬が今般殿の御名代
にて江戸表へ出する途中に待ち受けて之れを討ち取り其首級に鬮狀

討 仇 坂 璃 瑠 淨

な添へて磨りしは其方等兄弟を高田の馬場へ誘き出して討んとする
彼等の作略に相違あるまい、其計略に乗つて、左様御父上は仰せら
成るまい、此處は思案の致し處であるわい、隼人左様御父上は仰せら
れまするに、共々親子の者が當家に隠れ居る事を知つて居る宇都
宮浪士の奴輩、若し吾等兄弟が高田の馬場へ出張成さる時は必ず
御當家へ亂入に及ぶに違ひない、左すれば御當家の御迷惑は必ず
まするが其義は如何に遊ばしませるか、將監左れば御當家の御迷惑は必ず
にぬいで遊ばすお旗本方へ委細を打聞けて御願ひ申してある以上は
何處まで御一同の御力を借るより外に思案は無い、何卒か御一同
様只今御聞き及びの通り次第、何卒吾々親子の者を御助けあらん
事をば願ひ申しあげます、之れを聞いたる當家の主人大久保助左
衛門又はお願ひに居ります、長田文之丞、建部甚太郎、森岡織部、
其他の人々、如何にも善悪は云はず、一端汝等を飽まで助け遣す
と申し上は、何處までも力に成つて居る所存である、然し當家に秘

討 仇 坂 璃 瑠 淨

し置くと云ふ譯には行かん、今宵の内に秘かに吾々金齒組の組合の
内牛込山伏町久貝左京の屋敷、此處は山の手にて静なる處であるか
ら之れへ今宵の間に山崎親子の者を落して仕舞へば必ず宇都宮の浪
人共が當家へ來るに相違ない、其時浪人共を公儀の罪人として繩を
打ち大公儀に引渡して仕舞へば必ず浪人共は相當の咎めを仰せ付け
られる、然れば其方等親子は枕を泰山の安きに置く事が出来やう、
將監誠に難有き仰せ、左様ござれば何分宜しく御願ひ申し上げます
之れに依つて金齒組の悪旗本等が計つて山崎親子のものも其夜の内に
に秘かに山伏町久貝左京の内に送つて仕舞ひました、然るに箇様な
事とは夢にも知らず、藤立蕃其他の人々は今日こそ年來の仇を報じ
んもの勇みに、勇んで夜明け方、仕度をして高田の馬場へ出張致
しまする時に、太助を呼んで、左様ござれば何分宜しく御願ひ申して
か、其方は之れより本郷御町へ参り、愈々山崎兄弟親子が高田の馬
場へ出張のたか否やを知らして呉れ、と云ひ置いて、未だ夜の明け

討 仇 坂 璃 瑠 淨

が高田の馬場で何時まで待つても減多に山崎親子が居る氣遣ひは無
 けよと之れを聞いたる太助は大に失望落膽致し其徳行弓町の屋敷
 を飛び出し急ぎ急いで牛込高田の馬場へ駆付け来り太助へ「且那
 方、貴方がたの年來の望みも空しく成りました、實は昨夕の間に
 敵兄弟の奴等を悪族本等が計つて何處かへ落し、仕舞つた様子、之
 れに何時までお待ち成すつても出て来る氣遣ひは有りませんから
 も角も三河町の私宅までお歸り遊ばしませ」之れに依つて宇都宮
 浪士の方々も今は如何にも致し方なく一先づ三河町まで引き上げま
 したが一同行は一同借て兵藤玄蕃殿には此上は如何成さる御所存で
 さるや、左衛門殿は今は最早是非が無い、此上は吾々一同本郷弓町
 大久保助左衛門殿御屋敷に参り願ひ申して彼等親子の逃げたる先
 きを教て貰うより外に致し方が無い一同然らば其探索は此一心太助
 に命ひ付けまして如何でござりまする、玄蕃否や、太助を吾々の手
 先に逃ふと之れに目を付けて左すれば吾々一同の隠家を失ふ様に相

討 仇 坂 璃 瑠 淨

放れません内に三河町を立出で、牛込高田の馬場へ出張致します、
 一心太助は此様子を見届けて置いて其儘本郷御弓町大久保助左衛門
 の屋敷を指して遣つて参ります、太助「オ、浅吉、何うだ昨日貴様に
 頼んだ一件、都合よく行つたか、浅吉「されば彼の時和郎に頼まれて例
 の風呂敷包みを山崎兄弟の居る奥座先へ持つて行かうと致した
 家の木葉旗本が集まつて椽側で酒盞を致して居つたから見付けられ
 ては成らねへと思つて見當を付けて置いて中門の屋根越しに門内へ
 我り込んでのだ、太助「オ、浅吉、不可ね、事をすまぬ、都合よく彼
 等の目に止る様にして呉れたかい、浅吉「其れかね、兄哥彼等が酒盞を
 して居る履脱の處へ宜い具合に落ちたんだ、するど其れを椽側へ拾
 ひ上げやがつて何うやら其れを見た様子、處が大助の兄哥、右山崎
 親子の奴を昨夕の間に悪族本奴が何處かへ落して仕舞つた様子だ、
 大助「エ、何にかい、浅吉「行つた先には判らね、其れだから正義のお方
 ア、皆無何處へ落したか、其處ん處は判らね、其れだから正義のお方

討 仇 坂 瑠 淨

成る、依つて之より一同打揃ふて落ち行く先きを教へて貰ふより外
 に途はござらん、太助の苦勞だが本郷の弓町まで案内を致してくれ
 太助宜しうございます」と一心太助は先きに立ち正義の浪人を案内
 致し本郷の弓町大久保助左衛門の門前に参りました時分は恰度七ツ
 下り、大門は締つて通用門が開いて居ります太助へ且那方、之れ
 が大久保助左衛門の屋敷でございますと善、其方は決して内へ
 這入らないように表門外に扣へて居れ」と太助を門外に待たして置
 いて十有餘名の内中央七八名は共に門前に待たして置き、殘余の浪士
 は其儘玄關に關り一同お願ひ申し上げます取次「……」と、其れ
 へ一人取次ぎに出ました若武士、武士、各々方は誰方でござる一同「吾々
 は野州宇都宮以前奥平家浪人でござる、當家の主人大久保助左衛
 門殿に御目に掛り願ひ申したき義有つて推參致しましてござる、
 武士何等の願ひかは知らざれ共殿様は最早所にて有之から何なり
 共取次ぎを致すから其れに於て申せ、善、然らば申します、一當家の

討 仇 坂 瑠 淨

長家に座敷借りを致して居りました本田奥三郎と云ふ者の行衛が致
 へて頂きたう存じます取次「ハ、ア、然うで有るか、其れなれば別に
 殿様に伺ふ事は無ひ、其者等は先達で當家を出立致し目下行衛は相
 知れん、善、其許は存知無くとも當家大久保助左衛門殿は承知
 の筈、是非御目に掛り尋ね申したいから取次ぎを願ひます取次
 其りア、其方等が如何程申しても殿様には存じは無い、善、けれども
 永く當家の座敷を拂借致して居つたもの、行く先きを御存じ無
 い事はございますまい、是非取次ぎを願ひます取次如何様に其方
 共が申しても行つた先きが判らんに致し方は有るまい、取次ぎを
 致す事は相叶はん歸れ、善、如何様仰せられても殿様に御目通り
 を致しませぬ内は歸りません」と玄關で彼れ是れ申して居ります處
 へ出で来りましたる大久保助左衛門助左、ヤア家來共、斯く暮れ合ひ
 に及んで居るのに玄關先きに何と論じて居るのじや、取次「左れば
 前申し上げます、是れに扣へて居りますは野州宇都宮浪人、一當

家に先頃座敷借りを致して居りましたる本田與三郎の行衛を致へ
 て呉れいと筒様申しますから行つた先きが判りませんと申します
 に、是非殿様にお目に掛りたいと斯く聲高に申して居るのでござい
 ます助左「ふ、ふ、然うか、コリヤ宇都宮の浪人共、只今汝が相尋ぬ
 る本田與三郎なる者は成程先達てまで當屋敷に居たには違ひないが
 都合に依つて他へ移つたので有るが何處へ今は移つて居るか判ら
 んのであるぞ、玄蕃「左様仰せられまするけれども長く當り長家を拜借
 致して居りましたるものが今日は何處其處へ移ると云ふ位ひの事は
 申し置いて出立致したかと存じます、何卒本田與三郎一家のものが
 参りましたる處を教へるのはと願ひ申します助左「假令何んと申
 しても知らんから知らんと申すのヒアワイ、玄蕃「吾々は彼れ本田與三
 郎本名山崎將監準人親子等を討たんが爲り職祿まで返上致し浪々の
 身となり辛苦艱難を致して居るのでございませ、あわれお情けを以
 て何卒居所をお教へあらん事を願ひ申します助左「賢言わい、知ら

んど云ふて居るに強ひて云ふて呉れいとは何事だ」と互ひに玄關先
 きで争ふて居ります、大久保助左衛門殿、斯く夜に入つて居ります、
 て高階を發してござるや、助左「左れば文之、面殿、聞き下され、只今
 宇都宮浪人共が永く屋敷に居りましたる本田與三郎等の行衛を教へ
 て呉れいと申しますから知らぬと申すに強ひて教へて呉れいと申し
 ます、故其れで今斯く申して居る最中でござる文之「左様でござるか
 コリヤ、宇都宮浪人共、當家には左様の者は居らず、又行く先
 きを知らんから知らんと云ふに貴様等は天下の旗本に對して無禮過
 言、助左衛門殿、兎や角と論ずるに及ばん、此奴等は公儀直參の旗
 本の屋敷を荒しに参つた狼藉者、早々細打つて大公儀へ差出しな
 され、一人も逃す事は相成らん、ソレ表門を開して仕舞へ「ハッ」
 と答へて家來の面々は表の通用門を締めて内等より門を入れて仕舞
 つた文之「ア、浪人共尋常に門を廻せ、玄蕃「コリヤ怪しからん事を仰せら

れる、吾々は決して本屋敷を荒すの狼藉のど云ふ義ではござ
 らん、唯一意に本田與三郎の在所を尋ね申すのでござる、決して
 狼藉は致しません、文之、其れなれば何故一兩人打連送て参らん、斯く
 七八名も徒黨を致して参るは是れ徒黨の罪脱れ難なし、
 細に掛れ」と正義の武士を無法に細に掛ようと致しませぬ、
 此に於て立聞きを致して居りましたる一心太助、大助之りア大變だ、
 分れ給て置く時は悪旗本奴等は無法にも繩打つて大公儀に引出すは
 必定向然んな事に成つたら大變だ、斯う云ふ時に願ひ申すが
 駿河喜錦小路の大久保の親分より外には無ひ」と一心太助が草駄天
 走り此納りが如何相成りまするや一寸免を蒙りまして直ぐに申し
 上げます。

第五席

引續ひて伺ひます、奥平願浄瑠瑠坂の仇討は已に宇都宮浪士の
 々々、賊山崎半人の行衛を探さんが爲め本郷の弓町大久保左衛門の
 屋敷へ参り段々譯を申して踪跡を尋ねますと雖も其實を云わす
 却て正義の浪士の人々を徒黨の罪人として細を打つて大公儀へ引出
 さんとするの有様、此願浄を表門外に於て立聞致しましたる一心太
 助は、コソ容易ならん一大事と、其儘駿河喜錦小路に於て日頃自分
 を愛して下さる大久保彦左衛門様の屋敷へ駆け付け、裏所口へ飛込
 んで参りましたが、大聲上げて太助、天下の一大事でございませぬ、何
 卒か大久保の親分に早く乗出しを願ひます、例の口から出餌目の
 大法螺を吹いて居りますと、此時裏所に扣へて居りましたる、
 人、伊藤次郎助と云ふ人、次郎、コソヤ太助、何んだ貴様、日も暮れか
 つて居るに矢庭に裏所へ飛び込んで天下の一大事である親分に乗出
 して下さいとは、何んたる事を申すのだ、親分と云ふのは誰様の事
 だ、太助、オイ、用人、乃公の親分と云ふのは當家の殿様の事だ、次郎、

討 仇 坂 璃 瑠 淨

コリヤ、馬鹿な事を云ふな、殿様を親分、なんて何故其んな軽
 々しい事を申すのだ、太助、オイ、其んな事をグズ、云ふ事はね、
 和郎さんの何んにも知つた事はね、乃公の親分と云ふのは大
 久保の殿様だ、早く其様云つてお呉んなさい、天下の一大事だ、伊
 藤次郎助も困つた奴だ、おもひました、其場を立つて奥向へ参りますと
 助の事でございませう、仕方なく其場を立つて奥向へ参りますと
 奥座敷には先刻四ッ谷荒木坂の水野十郎左衛門と云ふ旗本が参り
 今何にか話しの最中故、次郎、へい、申上げます、彦左、オ、次郎助、
 何事だ、次郎、エ、只今、臺所口へ神田三河町三丁目、
 の一心太助が参りまして、何んだか大變に池食つて、天下の一大事
 有るから、大久保の親分に早く出張つて呉れろ、と、簡様に申して参
 りました、何時もの通り彼の法螺吹きでございませう、控着い
 りました、思ひます、けれども強て前に然う申して呉れ、と云ひませ
 事だ、とは、思ひます、けれども強て前に然う申して呉れ、と云ひませ
 から此段を前に取次ぎを致しますが如何仕りませ、彦左、オ、

討 仇 坂 璃 瑠 淨

然うか、彼奴は實に愛嬌が有つて憎む事の出来ない奴だ、町人な
 らも大和魂を持つて居る奴だ、予が爲めには可愛い子分だ、わい、次郎、
 殿様、貴方が左様な事を仰いますから、何處までも彼れが付け上り増
 長するかも知れません、彦左、イヤ、苦しうない、可愛い奴だ、早々
 是れへ通れと申せ、次郎、ハッ、と答へて、伊藤次郎助は再び臺所口に來
 り、次郎、コッヤ、太助、殿様が、目通りを許されるから、此方へ通れ、太助、
 へい、御免なさい、と、其儘、太助は奥の間に來り、太助、へい、親分、今晩は、
 彦左、オ、太助か、能く参つた、何んだか、貴様は天下の一大事
 有るから、予に出張を致して呉れいと云ふて参つた、さうだが何事だ、
 太助、聞いてお呉んなさい、其譯と云ふのは、斯々簡様に、然かく、で
 ございませう、だから親分に、乗り出しを願ひ申しますのです、
 彦左、ヤ、何が其れが、一大事だ、高が宇都宮浪人の身上に關る、
 の事、じやないか、太助、其れでも、只浪人の身上に關ると云ふ位、
 和郎さんが急にお尻を上げね、から、其れ故、天下の一大事と云つたの

本たりども用捨は致さん、此の處に於て貴方がたを相手となし尋常
 の勝敗を決します事、此の處に於て貴方がたを相手となし尋常
 と答へて十有余名の人々は既に身拵へをなさんとする様子を眺め
 る大久保助左衛門、長田文之丞、兩人「ヤ、宇都宮浪士共、借ては
 天下の旗本へ白刃を向けるとして見れば飽まで汝等は狼藉者ならん
 之善、其狼藉ならぬ吾々を狼藉者になさるが故に據處なく貴方がたを
 相手に花々敷此の處に於て勝負をなし切り死を致す覺悟でござる」
 と一同刀の柄に手を掛けて既に鞘挿ひをせんと云ふの意氣込み助左
 コリヤ、待て、左様な亂暴の事を致しては相成らんとぞ、
 決して吾々は亂暴は致さん、徒黨の罪人と仰せられ細を打つて大公
 儀へ引出されては吾々一同の難儀でござるから斯くの通り據處なく
 相手を仕る次第でござる、ヤ、早く御用意あれと、益々浪士の勢
 激しく、助左衛門、文之丞は臆病と云はん、浪士の勢に辟易なし
 身震ひを致して居ります、處へ表門を破れるばかり、ヤ、ヤ、ヤ、

です、ヤ、怒々致して下されては正義の浪士方の命に關る一大事、
 早く乗り出してお呉んなさい、何にをグツクして居なさるんだ、
 日頃の勇氣にも似合はねねじやねねか、彦左、八釜敷い奴だ、
 れでは子が乗り出して遣る、時に水野十郎左衛門殿、唯今お聞き
 廻りの次第、何卒か貴公も拙者と共に行つて遣つては下さるまいか
 十郎如何にも承知仕りました、然らば是れより同道を致しませう、
 彦左、コリヤ、太助喜べ、是れに居られる水野十郎左衛門殿も同道を致
 して遣ると仰るから、禮を申せ、大助、是りや何うも荒木坂の殿様難有
 うございます、其れヒア何卒か早くして下さい、是れに依つて大久
 保彦左衛門殿は早速馬の用意を致し、大助を案内者とし、水野と共
 に馬に打ち乗り本郷の弓町、今しも大久保助左衛門の屋敷門前まで
 駆け付けて来た、此時門内玄關前にあつては宇都宮正義の浪士の
 人々、玄善、是れはとまでに申譯を致すと雖も飽までも吾々を狼藉者の
 罪に陥し大公儀へ差出すと云はれては今は止む事を得ず天下の御旗

淨瑠璃坂仇討

さど云ふのは拙者一向存じんのござる彦左知らんなら知らん何
 故に當に此浪人を歸して仕舞はん、其れに居られる長田文之丞和
 郎は當家へ何の用で來て居られる文之左様でござる、隣家助左衛門
 殿御屋敷穩當ならん譯が聞えます故隣家の交誼を以て駆け付けま
 したる處右の始末、依つて此浪人共は公儀直參の屋敷を願さんとす
 徒黨の罪人と存じ細を打つて今大公儀へ引出さんと致しまするに反
 て吾々旗本を相手に致して勝負を決せんと云ふ穩當ならん始末で
 さる彦左、然うか、其れは面白、成るはと宇都宮浪人の申す條
 道理千萬、狼藉で無い者を狼藉の罪に陥されて公儀へ引出されては
 相成らんから不得止相手を致すと云ふのだ、何故其方等も天下の旗
 本でないか、高の知れたる浪人共に喧嘩を買はれて尋常の勝負を致
 す事も出来んのか、チア此彦左衛門此處にて見物を致すから浪士を
 相手にも勝負を致せ、ノオ十郎左衛門殿、十四五年前は大阪難波合戦
 隨分取地に於て勇ましい事も見たが今は太平にて暫く其う云ふ事も

淨瑠璃坂仇討

彦左、コリヤ、開門を致せ文之、誰方でござる彦左、大久保彦左
 衛門、水野十郎左衛門である、早く開門に及べ、此群を聞いた助左
 衛門に文之の亟の驚き、ア、悪い所へ彦左衛門、十郎左衛門が乗込
 んで來たわいと思ひました仕方なく小門を開けさせると、其れへ
 這入つて参りましたる彦左衛門、十郎左衛門の二人、玄關の方を見
 ますると何か穩當ならぬ有様彦左、コリヤ助左衛門、夜中と云ひ此有
 様は何事であるか助左、左れば、是れに居ります者は舊野州宇都宮
 奥平家の浪人共でござる、其れが斯く十有余名致して手前屋敷へ罷
 り出で斯うく箇様くの次第でござる彦左、然うか、然から
 ば此の浪士共が敵と視う山崎半人と云ふ奴等、貴様の屋敷に本田與
 三郎と款名して隠れて居たのであらう、それを糺さんが爲め貴様に
 結つて願つて居るのだから何故行衛を致へて遣らんのだ助左、其れは
 ……成る程手前の屋敷に先達てまで坐敷借りを致して居つたには違
 ひありませんが都合によつて他へ移りましたので、其變りました先

浄瑠璃坂仇討

助左衛門門外之函は互ひに顔と顔とを見合し、吐息をつき、助左衛門は、

浄瑠璃坂仇討

見た事も無い、オ水野殿面白く見物を致さうではござらんか、十郎、

に長田文之丞殿、悪い處へ大久保彦左衛門、水野十郎左衛門が参り
 ました、何處までも宇都宮浪士の奴輩を徒黨の罪に陥さうと致して
 居りまする處へ馬で乗り付けて来たと云ふのは何うも合点が行かな
 い、殊に彼の彦左衛門の尋ね鹽梅では宇都宮浪士の者共と氣脈を通
 じて居るのでは有りませうか、手前は同じ大久保を名乗つて居る
 同家では有りませうけれ共何うも彼の大久保彦左衛門殿とは平素意見
 が合ひません、最う斯うなる上は假令職碌を抛つとも飽まで山崎親
 子の者を助けて遣らんければ相成りませうまい、文之如何にも助左衛門
 殿の云はれる通り、手前も同意でござる、此上は牛込山伏町久具
 左京殿の方へ通知致し、向山崎親子の者は何處までも金齒組の旗本
 が力を添へる事に致しませう」と是れより悪旗本奴は飽まで山崎親
 子の者を保護致すと云ふ、茲に秘密を申し合して居ります、其れに
 引換へ宇都宮の浪士の人々は神田三河町一心太助の宅へ立歸つて参
 りまして兵藤玄蕃は玄蕃何うも各々方、危い處で有りましたるに大

久保様の事情にて危難を免れました、併しながら何うして大久保
 彦左衛門様や水野十郎左衛門様が彼の願ぎの中へ乗込みに成りま
 したらう、太助且那方、其りや此一心太助が表門外で聞いて居りまし
 たのに彼の願ぎ故、此奴ア此儘打捨て置いては貴方がたの命に關
 ると思ひましたから日頃私しを可愛がつて下さる駿河臺錦が小路大
 久保彦左衛門様の御屋敷へ私しが駆け付けて参つて委細をお願ひ申
 したる處幸ひ四ッ谷荒木坂の水野の殿様も側にお出で成すつて、其
 れレア乃公も行つて遣らうと云ふので、兩人で出張り下されたの
 ですよ、玄蕃然うであつたか、其れは太助何うも頓智の可い事をして
 呉れたものだ、然う云ふ事であるならば吾々が大久保様の御屋敷へ
 参禮に参りたいいければ、今は何れも日陰の身の上であるから大久保
 彦左衛門さまの御屋敷へお出入を致しては、何うも恐れ入る次第であ
 るから和郎が明日吾々に代つて参禮に行つて貰ひたい、太助へい
 宜しうございますと、其夜は明けて翌朝日本橋の魚川岸に参り何か

大久保の殿様がお好きな肴を買ひ整へ、其れを以て一心太助が駿河
 臺の屋敷へ参りましたる處、今朝紅葉山千代田城へ登城なす
 つて未だ下りが無いと云ふから暫く臺所に待つて居りまする處
 へ刻限と見へまして城内から下り、お歸り……と玄關より知せ
 て来る、彦左衛門の老公は奥向きへ通り成りますると用人の伊
 藤次郎助が其れへ手を仕へ次郎の前申し上げます、只今一心太助が
 臺所へ参りまして下りを相待つて居ります彦左、オ、然うか、
 其れヒア太助を是れへ通せ次郎「ハア長りましてございます、と其場
 を退き臺所口に來り次郎太助、殿様が御目通りお許しだから通るが
 よろしい、難有うございますと、太助は奥向きに通ります、
 老公は彦左、オ、太すか、唯今は結構な肴を呉れた然うだ、貰つて置
 くぞよ太助「ハイ殿様、昨夜は宇都宮の浪士共を救け下さいまして
 難有うございます、一同になり代つて私しからお禮を申し上げて
 彦左、予は今朝久々將軍家の御機嫌を伺はんと紅葉山千代田城

へ登城致し將軍家へ挨拶をなし其儘前を下り老中方の用部屋へ
 参りし處何か頻りに老中方が評定をして居られたから其席に列
 り聞いて見ると、先達て宇都宮浪人共が羽州米澤領分野淵の庚申塚
 にて當時山形の城主九萬石奥平大膳太夫の名代夏目主馬と云ふ者
 討ち取つたる趣にて山形奥平家より其浪人共の相年齢等を書き認
 め大公儀へ願出したる様子、是れに依つて大公儀にては其浪人共を
 召捕うと云ふの評定で有つた、其れを予が其論を破つて一時は沙
 汰止みになるように致しては來たが併し、何れ油断をして居たなら
 ば正義の浪人は捕はれんければ相成らん、左すれば大公儀より細
 付の儘出羽の國山形へ送られる、然う成つて見ると壘む仇討も出
 す國法に處せられて浪人共は殺されて仕舞ねば相成らん、其れが誠
 に不憫至極であるから其方を呼び遣つて申し聞そうと思つて只今
 下つて來たのだ、太助、其正義の浪士を其方の内に置く事は願
 險の次第で有る、其れ故一同は何れへなりとも身を隠し其上敵の行

衛が知れたならば江戸表へ乗込んで尋常の勝負を致すように致し此
 處一端は其方より申し聞し江戸の土地を立退くよう申し退れ太助
 何うも殿様難有ふございます、其れヒア立歸りまして其よしを一同
 に申聞かします彦左オ、左様致せ、其處で予も表面つては言はれ
 ぬけれ共飽までも正義の浪人を助け吃度此敵討の出来るよう致して
 造る、悪人山崎隼人とか言へる奴を金齒組銀齒組の木葉旗本の奴等
 が加擔をなしおるよし、吾々白柄組は仁と義とに依つたならば水火
 の中へでも飛び入つて人を助けて遣ると云ふのが本意である太助誠
 に何うも何んどもお禮の申し上げようもありません、立歸りまして
 此事を浪士のお方に申しましたならば何の位ひ喜ぶかも判りません
 左様なれば殿様免を蒙りますと、お暇を告げて三河町の宅へ立歸
 つて参り一同に向ひ太助借て旦那方、お喜び成さいますし大久保の
 前の仰るのには斯うく箇様く、依つて貴方がたは何れへなり共
 隠家を變へてお忍び成さいます、然うして敵の行衛が知れましたならば

其時はお知せ申し上げますから此江戸表へお乗込みなされて本懐を
 お遠げ遊ばしませ、之れを聞いたる正義の人々は、涙を流し大久保
 彦左衛門様のお情け、難有ふございますと駿河臺の方を伏し拜んで
 の喜び、此時兵藤玄蕃は玄蕃然らば同一、先づは何れへなりと
 も身の隠れ家を設けて其上太助より確乎なる知らせを待つて此江戸へ
 乗込み本懐を遠する事に致しませう、其れに就て此處に難義なのは
 悴の彌五郎、風邪にて大熱、此身体の勞れて居るのを迎れて立退い
 ては尙休に害を醸す、之れは何うしたもので有らう、すると太助が
 太助エ、兵藤の旦那様、成程今此若旦那彌五郎様の内を動か
 しては不可ませんから少しお熱の去りますまで手前の奥の離れで
 養生を致しませうから貴方がた丈けは是非人目に掛らぬ内一刻も早
 くお立退き下さい、玄蕃然らば斯く云ふ兵藤玄蕃は下野國鍋掛と云ふ
 處に小畑直衛と云ふ紳主が有る、之れは日頃より交際の間柄で有る
 から此處へ隠れる事に致そう、然して始終に各々方又は太助にも氣

派を通ずる事に致して置かざれば相成りませぬ、此處で一同は申し合しまして一先づ神田三河町の一心太助の宅を夜にまぎれて忍び出で散りくハ、と成つて自分等の目指す方へと立退く事に相成りましてございます、處が兵藤彌五郎一人丈け、一心太助の奥の離れ坐敷を病間と致し太助を初め子分の忠八勘次の兩人が交るく、藥萬端の氣を付けて看病怠りなく致して居りますもの、何うも男と云ふものは病人の看病は行届かないものでありまして、一に看病二に薬とか申しまして成程薬を飲ましましたも看病人が行届ませんと、反て其れが害をなすものでございます、其處で太助は太助、忠八、勘次、太助、親分何んです、太助何うも若旦那の看病は男とや何として遣り切れぬ、乃公の家には女氣が無から斯う云ふ時に不都合で行けぬ、是りや乃公の考へるのに、野州宇都宮の片傍の雀の宮宇古井戸にお出で遊ばする兵藤玄蕃旦那の奥様、又若旦那の親造、絹江様、此の親造の絹江さまを江戸へお向へ申して

此看病をおさせ申したならば乃公ア宜からうと思つた、其りやア一番宜う兩人成るは是りア親分宜い事を考へなすつた、其りやア一番宜うとわせう、太助、其んなら手紙を出そうと、太助は曲みなからに手紙を認め宇都宮在古井戸の閑居へ是れを送りますと、古井戸に在つて兵藤玄蕃の奥方と親造の絹江の二人は此手紙を見て大に驚き捨て、は置けないと是れから相江は夫彌五郎の看病の爲めに江戸表神田三河町一心太助の宅へ乗込んで参ります處から此處に悪旗本奴等が計りに謀つて此神田三河町一心太助の宅へ夜隠に及び乗込んで参り兵藤彌五郎をば生捕らんとするを其頃名代の豪傑、澁川流の達人、澁川伴五郎と云ふものが之れを助けますと云ふ實に勇壯愉快なる話、しに成るのでございますが一すこの邊にて一服致しまして早速申し上げます……。

浄瑠璃坂 仇討

借ても宇都宮在宇古井戸に居る兵藤玄蕃の奥方は仲頼五郎の病氣の
手紙を見て相江に向ひ奥方其妾は苦勞ながら頼五郎の病氣に付看
病の爲り江戸表へ行て下さるよう、女一人の道中は案じられる故若
黨三間忠平を連れて行つて下さるよう、委細長りましてございます
ると旅装束を整へ三間忠平と云ふ若黨を連れまして野州宇都宮を出
立致し泊りを重ねね日を重ねね江戸神田三河町一心太助の表口へ来りま
したる頃は屹度夜の四つ時、方今で申します午後の十時頃でござ
います、此時家内には一心太助、晝は商ひに廻り其序では敵の行
衛を捜し夜に入れば交り、此中は大に骨を折つて呉れて氣の毒だ、
コオ忠八、勤次、貴様等も此中は大に骨を折つて呉れて氣の毒だ、
人の辛抱して遣つて来れ、就ちア奥の離れにお秘藏申して有る御病
ア悪旗本奴等が浪人方へ目を付けて居るよし、夜の夜中に何に怪
けて来せアがるかも知れねぬから假令誰れが看を買ひに来ようとも

浄瑠璃坂 仇討

夜は商ひを止して迂濶に表を開ける事は成らねぬ、二人「エ、親
分可うございます、減多に表は開けア致しません太助其處で、三
人が夜通し起きて居られるものヒアねぬから、一時交りに一人づゝ
が起きて居るようにしようヒア無いか二人「エ、宜しうございます」
と互ひに若旦那頼五郎さまの事を案じ心を付けて居ります、一處へ
表の戸をドン／＼／＼、二人「そうりア親分、酔をすれば蔭とやら、
何か来ました、太助、どうか、篤と様子を聞いた上で無くちア開けら
れねぬ、二人「エ合点でございます、オ、誰れだい、女一寸此處を
開けてお呉れ、勤次「親分……女に怪けて来ました、太助「女でも何ん
でも可いから、一寸此所を開けて下さい、當家に兵藤様と云ふ方が
すか、女「ア一寸此所を開けて下さい、兵藤……兵藤は戦争の時用ゐる
お出で成さいませう、勤次「ナ……兵藤……兵藤は美濃の國だ、騒動は
火事か喧嘩か大地震です、女「いゝね、兵藤様と云ふお方に遇ひに

來たのです。忠八「オ、私ちの内ア看屋です。鯛か飯か鋪の刺身、其外人間の買ひ置きアしませんよ。女いゝに宇都宮から兵藤様に遇ひに來たものです。是非兵藤様に遇はしてお呉れ。忠八「親分、何うしませう。宇都宮から兵藤様に遇してお呉れ。忠八「親分、何う待て、乃公が一つ聞いて見て遣らう」と太助は表の戸の處へ参り太助「能方ですか、夜分ですから判然云つて下さい。女「オ、然う云ふ聲は太助ヒアないかい。太助「オ、ッ、然う云ふ貴方は新造。絹江様ヒア有りませんか。絹江「ア、此聲を聞いて太助は直ぐ表の戸を開き、見れば絹江でござい、すから太助「コレへ、親造さまでございませう。オ、貴方は三間忠平様、何卒此方へお這入り下さい。忠平「否や、吾れは親造さまを和郎の方へ送り届けたならば直様本國へ引返さねば成らん。左様ならば新造さま、是れにて免を蒙ります。絹江「あ、大きに遠方苦勞で有りました。國表へ歸りやうたなら母上様へ無事に太助の宅へ着きました。赴を申し上げて呉れ。忠平「委細承知

致しましてございませう。去らば免」と其儘本國宇都宮へ引返しませ。後太助は表の戸締りをなし太助「親造さまには宜うこそお出で成さいました。ヤ、忠八「儲り聞きアがれ、若旦那様の親造だ。其れに兵糧は戦争の時に用ひるものだ。燈籠は神前にある、養老の瀧は美濃國にある。願動は火事か喧嘩か大地震なんて余計な事を云つて居やアがる。ア、親造さん、家の若い叔等は無禮を申しました。が、何卒お勘辨を願ひます。ア、何卒お與へお通り成さいませ。して、病入へお安心をおさせ下さいませ。之より絹江は奥の障に廻り久々夫婦の對面をなし、互ひに身の難難を歎きました。先づ絹江が参りましてからは、大に頼五郎も力付きましてございませ。から、太助も大に是れで安堵の思ひを致して居ります。するも成る日に太助の内へ参りました。人は其頃品川船場町に町道場を出して居る。品川の柔術の名人。品川伴五郎、此の人は一編實父伴龍軒の心に遠反き勘當の身と成りました。其れを一心太助が謝罪をして以

浄瑠璃坂仇討

開かして呉れたら何うだ、和郎は私しが一端親伴龍軒に勘當を受け
たる時に其方が謝罪をして親父へ謝びをして呉れた、其思が有
るから乃公は和郎が大恩人だと思ひ其恩を忘れぬが爲めに折々訪問
もし又泊りても貰う事に成つて居て何時も心善く泊めて呉れるのに
今夜に限つて泊められぬと云ふのは判らないしエないか、サア其
理由を聞かして呉れ、何んぞ乃公が和郎の氣に入らん事をした事が
あるか、其れなら其れで判然に云ふて呉れ、其れなら和郎に悪ひ處
は謝びる事に致すから太助何んにも悪ひ事と云ふては別に有りませ
んが、今夜は泊められぬのです、依つて今夜は此邊の何處かの宿
屋へ指宿をしますから、其れへ行つてお泊んなすつてお呉んなさい
伴五夫れは否やだ、宿へ行つて泊る位ひなら何も和郎に指宿をして
貰う事は入らん、何うあつても今晚は是非和郎の處で泊るから然う
思へ太助、オイ、判らねエ事を吐しアがんな、乃公の内には今晩差支
があるから泊られねエと云ふんヒアねエか伴五、サア太助、其差支の

浄瑠璃坂仇討

前へ納めましたと云ふ、太助へは非常に恩義が有りますから、江戸
へ参りますれば必ず太助の家へ訪問れます、又歸りが少しく遅なり
ますると太助の宅へ泊つて歸るようにする位の間の柄でございます、
其澁川伴五郎が恰度其日の夜の五ツ時伴五太助、伴五郎である太助、
イヤ、是りや澁川の若先生ですか、何處へお出でに成つたのです
伴五、今日は牛込邊から本郷邊の赤旗本様方の赤屋敷へ赤積古に参り
今歸途だか今夜は最う夜にも入つて居るから和郎の方で從前の通り
泊めて貰ひたいと云ふと太助は心の内に思ひには、此澁川伴五郎
と云ふ先生は何んでも市ヶ谷牛込本郷邊の山の手の木葉旗本の屋敷
へ日々出這入りをするが、若しや敵山崎隼人へ加擔の悪旗本から頼
まれて乃公の内へ探索に来たかも知判らない、是りや迂濶に泊りら
れないと思ひましたから太助、若先生、今夜はお愛憎さまです
が私らの内へお泊り申す事は出来ません伴五、何故泊められない太助
何故でも泊められねエから泊められねエと云ふんです、伴五、其譯を

有ると云ふ事を知つて今宵當家に参つたのだ、何んにもグズグズ云ふ事は無い、一許せと云ひ乍ら其儘奥へスカと上つて行く、太助は「何うも今晩は伴五郎先生の腹の中が判らない」と子分忠八、勤次にも必ず今晩は油断をするなど云ひ聞かして居ります、折しも其夜は夜半の頃、表の戸をドン／＼と激しく擲き、男「コリヤ表を開けい、お用だ……」忠八「親分、何んだか上の役人らしうこのす、彼の通り表を擲いて居りますが何うしませう太助伴五郎先生は何うしたイ忠八「奥の間で蒲團も着ねエで着の身着の儘手枕をしてグズグズ寝て入来しやいます太助起せ／＼」忠八「先生、一寸起きて下さい、何んぞ寝て居るやいな、何んだ忠八先生、只今表の戸を激しく擲くものがございます、何うやら役人らしうござわす、何う致しませう、伴五、ソレ何うだ太助、此差支があるから乃公が今晩貴様の内へ泊つて置つたのだ、今宵表へ来た奴は誠に公儀の役人では無い、必ず擬役を致して兵藤彌五郎と云ふ貴様の内へお秘し申してある字

都宮の浪士を召捕りに来たのだ、其處で太助斯う致せ、病人の寢床を何處か押入れの内へでも變へて、其處で拙者と家内とが一つ床の中に寝て居るから其れを知らずに乗込んで来て宇都宮浪人と思つて吾れを生捕らんと成したる其時は起き上つて其者等を片端から取つて投げるから、其方初め子分と共に荒縄を以て其奴等を縛して仕舞へ、今宵表へお用と申して参つた奴は本郷邊の木葉旗本に違ひ無ひ太助「エ、宜しうございます」と是れから奥の障子敷の押入れに隠し蒲江と伴五郎は夫婦の体に見せかけ枕を並べて頭から蒲團を被つて居ります、斯くして置いて一心太助は太助「ヤア可いか、忠八、勤次、今に澁川伴五郎先生が狼藉する奴を取つて投げたら腰骨の抜けるような目に遇はし其上荒縄でフノ縛つて仕舞へ、兩人へ、合点です、親分大分今夜は面白うございますね」と若い者は勇み喜び、荒縄を幾筋も其れへ取り出し、充分の用意を致して居ります、此方は表に来て居ります武士、武士「コリヤ、何をグズ

コリヤ〜浅吉、貴様が何んにも太助に口を交く事は無い、黙止つて居れば可い
 が、一應吾々が其方の宅を家探しを致すから左様心得い太助へ……
 間拔な私らの宅、迂論に思召すなら遠慮はいりません、這入つて家探しでも何んでも勝手になさいませ、助左、オ、云ふに及ばん家探しを致して呉れる、ソレ各々方、何れも這入つて搜索を致されし心得たりと一同はドカ〜つと太助の家へ這入つて参りまして、其處上此處よと家探しを初めまして、此時一心太助に子分の忠八等は互ひに顔と顔とを見合して口に言はねど心では、今に此奴等奥の離れへ行つたら、濫川先生のがめに酷ひ目に、出遇うんだと太助、サア忠八、勤次、可いか彼奴等が取つて投げられアがつたら、今や〜と待つて手に縛つて仕舞へ、合點だと思入勤次の兩人は、彼方此方と探しまし居ります、其れとは知らず金齒組の悪旗本等は、彼方此方と探しましたければ、一向宇都宮の浪入らしい者も見へませんから、漸々奥

致して居る、早く明けなから表の戸はに來りまして門を脱しするど、如何に、表の方には本筋御弓町大久保助左衛門、長田文之進、建部甚太郎、之れなん金齒組の旗本輩、十有余名の者等が大久保助左衛門の仲間浅吉を高手小手に縛りて有ります、助左、コリヤ太助、其方宅に先達て予が屋敷にて亂暴なさんと致した、野州宇都宮浪人共を匿ひあるよし之れに依つて今宵召捕りに罷り向ふたので有る、太助へ……殿様方、此太助は其んな不正な人を匿ひました覺へはございませぬ、其れは何者が其んな事を申しましたのか、助左、其れは之れなる仲間浅吉が白状に依つて相判つたのだ、至く其方宅に奥平浪人が隠れ居ると申したのだ、太助、コリヤ浅吉、和郎と乃公とは日頃から懸意にはして居るけれど、乃公の宅に宇都宮浪人を匿まつて居るなんて何故其んな事を云つたのだい、浅吉、何あに太助の兄哥、其れは斯う云ふ譯なんだ、と既に淺吉が言辭をしようど致しするを、大久保助左衛門は助左

の離れの方へ来て障子を開いて内方を見れば屏風を巻いて誰れか
 其内に寝て居る様子、之れこそ擬ふ方なき宇都宮浪人であらうと思
 ひまじたる故、屏風を取り除け見ますと、案に違はず其の處に寝
 て居るものあり、助左「ヤア各々方、宇都宮浪人の踪跡は相知れたり、
 何れも早や参られよ」と呼ばりましたる故、旗本等は「ハッ、ッ、其
 へれ乗込み来り文之「コリヤ、其の處に寝伏して居るものこそ宇都宮
 浪人の者であらう、ヤア目を醒して尋常に繩に掛れ」と呼ばります
 ると雖も態と澁川伴五郎先生は狸寝入りをして居る助左「ヤア面
 倒なり」と着て居る上、浦團を奪ね除け、用だ……用だ」と一
 同が寝て居る伴五郎を取つて押へんと致したり、此時寝て居たかと
 思ふ伴五郎は「ヤ、ッ、ッ、と一降掛けたかと思ふと足蹴に掛けて二
 人の旗本を彼方に蹴飛ばし、起き上りさまに前に立つたる旗本を襟
 取り衣被ぎと柔術の奥義に依つて彼方此方へと投げ付けて大音上、
 伴五「ヤア、一、心太助、頼籍者に繩打てぬッ」心得たりと一心太助

に子分の忠入、勘次の三人は、着鏡を手に提げ其れへ飛込んで来る
 が否や、倒れて居ります金齒組の旗本を太助「コリヤ、一、畜生、夜
 の夜中に乃公の家を無法に荒しに来やアがる、思ひ知りアがれ」と
 ビニ「……」ビニ「……」ビニ「……」ビニ「……」ビニ「……」
 ……大助「コオ、其んな意久地の無知事を云ふない、手前達ア武士ヒ
 アねねか、町人の吾々に叩かれアがつて助けて呉れの免なさいの
 で何んの事を吐すのだい、糞でも食やアがれ、是れから己ぬ等をふ
 ん縛り町奉行へ連れて出るんだ、ヤア忠入、勘次、縛つたか二人、
 ニ、小口から縛つて仕舞ひました、ニ、先生、殘らず縛つて仕舞
 ひましたが、何う致しませう伴五「オ、苦勞である、其奴等を殘ら
 ず其處へ引据え、忠入「ヤア此方へ来せい」と一同の旗本を庭先きの處
 へ引据えます、此時澁川伴五郎先生が燈光を掻きたて縁側に持ち來
 り伴五「コリヤ、頼籍者、面を上げい」と云はれて意久地の無へ旗本奴
 等は面倒無いかから面も上げず差し平伏いて居りましたが今は仕方な

く頭を上げて能く見ますと、如何に、濫川流の柔術の達人、
 濫川伴五郎でございませうから大に驚き一同「ヤア貴方は濫川の先生で
 有りますか、何故に今宵拙者が太助の離座敷を借り受けて心善くも
 いますか、何故に今宵拙者が太助の離座敷を借り受けて心善くも
 入つて居る其寢入鼻をば宇都宮浪人なぞと難題を云ひかけ何故斯く
 なる狼藉を致された助左左れば濫川先生、是れば全く當家に宇都宮
 浪人が隠れ居ると云ふ事を聞き、今宵當家へ詮義に参つたのでござ
 る、然るに伴五郎先生とは知らず、睡眠をお防ぎ申した段は平に
 用持に預り此の場は一先づ見通し下されたい、伴五左様でござるか
 もの、間違ひで致されたと云はれるなら拙者は兎や角は申しません
 が然し當家の主人太助と申しませうは承知の通り正直潔白なる者
 で有るから何んと申しませうか一應彼れに挨拶を致して見ませう、
 ユリヤ太助、正にもの間違ひから出来た事で有るそうだから今宵
 の事を拙者が謝びを致すから其方も家内を荒されたる處は勘辨を致

せ太助、濫川先生、外の事なら勘辨も致しますが是ればかりは勘辨
 が出来ません、私しは今までに後ろ附い事は微塵も致した事の無
 へ人間です、其れに此處に居ります、其淺吉を高手小手に縛めて是れが私し
 から懸念に致して居ります、其淺吉を高手小手に縛めて是れが私し
 の家に宇都宮浪人が隠れて居ると云ふ證據人だと款つて夜の夜中に
 人の家内を荒しアがつた糞旗本、何うしても此儘にア勘辨が出来ま
 せん、其れだから夜が明けましたら此奴等を町奉行へ連れ
 のでございませうよ、畢竟今夜貴方が私し方へ泊り成すつて下さつ
 たから能うございませう、吾々三人ばかりで有つたなら必ず家
 探しをするなど申し立て、金銭物品を盗み取らうと云ふ此奴等は
 盗賊です、其れだから何處までも、濫川伴五郎が仲裁を致しませ
 知が出来ません、伴五郎、斯く濫川伴五郎が仲裁を致しませ
 と雖も唯今宵お聞きの通り、何うしても本人は勘辨が出来ませんを
 うです、此上は何んども致し方がございませんから、明朝は

浄瑠璃坂仇討

町奉行所で申開きを致されたら宜しからう、借てく町人風情の爲
めに旗本衆が町奉行所へ連れて出られるなどは、氣の毒千萬な
事をさるわい、ワツハ、ハ、ハ、と笑つて居れる一同、何うか、
生、此通り頭を垂れて謝びを致しますから平に仲裁の義をお願
ひ申します、伴五太助、彼の通り、一同が頭を下げての重々の謝罪
是非、今宵の處は、此伴五郎に任して勘辨を致せ、大助、オオ、其處に居や
アがる木葉旗本、耻を知りアがれ、其れは、オオ、其處に居やアがる浅吉、手
前、は乃公の家内に宇都宮浪人が居るなぞと云つた、うだが乃公に覺
への無へ事を何故、其んな事を吐しアがつたのだ、浅吉、何ゝに太助の兄
哥、新う云ふ譯、なんだ、聞いて呉んね、先刻俄に乃公を殿様が用事
があるから、此方へ来いと云はれたから、直ぐ殿様の御目通りをする
と物をも云はずに、矢庭に私ちをソソ縛つて仕舞ひ、コリヤ、浅吉、是
れから貴様を神田三河町の太助の宅へ連れて行つて、其方を詮據人だ

浄瑠璃坂仇討

と云ふ事に致すから、太助の宅へ參つても決して貴様は物を云ふ事は
ならん、吾々の云ふ儘に成つて居れ、と云はれて乃公を縛つて和郎
の宅へ連れて来たのだ、何んにも乃公、一心、太助の宅に浪人が居る
なんて、な事を云つた、覺は、微塵も無へのだ、唯、日頃から和郎と乃公
が、と懇意にするから、其れを應用に斯う云ふ事をしたのだ、乃公も斯
う云ふ旗本の屋敷へ奉公して居ても、不可ね、から此れを幸ひにお暇
を貰うから、何卒、か太助の兄哥、和郎の内へ肴の賣子にでも置いてお
呉んね、太助、其りア、浅吉、宜くね、事だ、殿様から暇でも出すと云ふ
のなら、貰つても可い、けれど手前からは、宜いよ、オオ、大久保の殿様
いけね、マア、暫くは奉公をして居るが宜いよ、オオ、大久保の殿様
仲問下郎と云ふ者は、口さが無いもんだ、今夜の事を若し世間で、饒舌
られたら、其時、ア和郎さん達の御身の上に関りますよ、其れだから
此、浅吉は成る丈、け大事にして、お遣なさい、大久保、助左衛門も酷ひ
口上だと思つたが、勇左、左様なら、益川先生、お死を戴ります、と一

討 仇 坂 璃 瑠 淨

いす、成るはと慈恵は人の爲めならず、人を救けて置けば我身に
報ふて来るとは此事でございませう、和郎さんの勸當の謝びを
致したただけて斯くまで私しる思つて下さるは嬉しうございませう、若
旦那様にも新造の網江様にも今宵の危難は是れにお出で成さひま
す、網江の夫婦は一人誠にて、瀬川先生には日蔭の身の吾々を救け下さ
いまして、千万辱う存じます、伴五、ナニ、是れしきの事を禮には及び
ません、然しながら太助、此後は尙更ら用心に用心を致さんければ
相成らん、斯う貴様の家へ目を付けると又此後如何なる
事が起るかも知れん、拙者が毎晩貴様の家で泊れると宜いければ
然うは行かん、若しや乃公の泊らん時に彼んな事が起れば、今夜
の様に出来なひが、此の上は何う致すか、太助、ア、何う云ふ具合に
致したものでございませう、チニ若旦那様、新造さま、如何致し
ませう、彌五、ア、有るに有りがひ無き日蔭の身、殊に病人の拙者を皆

討 仇 坂 璃 瑠 淨

同と共に放々の体で其儘表の方へ出て行きました、ございませう、後
は瀬川伴五郎、伴五、何うだ、太助、愉快な事で有つたのう、太助、何うも先
生今夜は難有うございませう、和郎さんが今夜私らの内にお出でが無
かつたら、忽ち兵藤彌五郎様や新造の網江様まで召捕られて如何
な憂目を見るかも知れなかつたんです、が能う泊りに来てお呉んなす
つた、今夜斯う云ふ事が出来ると云ふ事を知つてお泊り下さりたの
です、か、伴五、素より左様だ、先達て本郷の町、大久保、助左衛門の屋敷
へ宇都宮浪士が乗込み何か、先達て本郷の町、大久保、助左衛門の屋敷
と成つて居る、彼の時何んでも一心太助が誘引を致して連れて行つ
たどの事、して見ると貴様の内へ何時木葉旗本が乗込んで来て何ん
な事をするかも知れり、是りア折々太助の宅へ泊りに行つて萬
一の時には救けて還るが恩報しをするの時、有ると其れで貴様の宅
へ泊つたのだ、是れを貴様に初めから明白に云ふと、貴様の氣性とし
て乃公に其んなら然うして呉れ、とは云ふまは、助太、ア、難有ふござ

様
が
心
配
を
し
て
下
さ
る、
一
層
本
國
宇
都
宮
へ
歸
る
事
に
致
さ
う
か、
太
助
、
其
り
や
行
け
ま
せ
ん、
お
國
表
ま
で
お
歸
り
が
出
來
る
位
ひ
な
ら
何
ん
で
此
太
助
が
心
配
を
致
し
ま
せ
う、
其
お
体
で
は
迎
も
自
由
に
歩
行
は
叶
ひ
ま
せ
ん、
如
何
致
し
た
ら
宜
か
ら
う、
と
大
に
心
配
を
致
し
て
居
り
ま
す、
此
時
濠
川
伴
五
郎
は
伴
五
其
れ
ヒ
ア
太
助
斯
う
し
よ
う
か、
一
層
兵
藤
お
夫
婦
を
斯
く
申
す
濠
川
の
道
場
へ
お
連
れ
申
し
た
ら
何
う
で
有
ら
う
太
助
、
コ
リ
ヤ
先
生、
其
う
し
て
下
さ
い
ま
し
た
ら
大
磐
石
で
ご
さ
い
ま
す
伴
五
、
そ
ん
な
ら
一
刻
も
早
く
籠
を
履
ひ
品
川
の
道
場
ま
で
お
案
内
致
す
事
に
致
さ
う、
と
是
れ
よ
り
太
助
は
駕
籠
を
履
ひ
品
川
の
道
場、
細
江
を
品
川
船
場
町
濠
川
伴
五
郎
の
道
場
へ
匿
ふ
事
に
致
し
ま
す、
是
れ
な
ら
ば
大
丈
夫
と
喜
ん
で
居
り
ま
す
處
へ
又
々
悪
人
共
は
手
を
廻
し
濠
川
伴
五
郎
の
道
場
を
探
り
に
掛
る、
之
れ
に
依
つ
て
濠
川
伴
五
郎
は
非
常
に
力
を
盡
し
ま
す
と
云
ふ、
一
層
追
々
最
と
面
白
さ
お
話
し
に
相
成
り
ま
す
が
一
寸
一
服
致
し
ま
す、

第 七 席

借
て
兵
藤
五
郎
夫
婦
の
者
は
駕
籠
に
乗
せ
ら
れ
ま
し
て
秘
か
に
濠
川
伴
五
郎
一
心
太
助
が
其
駕
籠
に
附
随
ひ
品
川
船
場
町
の
道
場
に
連
れ
歸
り
奥
深
く
之
れ
を
匿
ひ
置
き
ま
す、
斯
う
致
し
て
置
け
ば
先
づ
大
丈
夫
で
ご
さ
い
ま
す、
處
が
此
處
に
話
は
變
つ
て
牛
込
山
伏
町
久
貝
左
京
の
屋
敷
に
於
き
ま
し
て
は
金
齒
組
の
悪
族
本
が
大
勢
集
ま
り
ま
し
て
山
崎
將
監、
伴
半
人、
弟
九
平
等
は
共
に
集
り
ま
し
て、
種
々
様
々
と
話
し
を
致
し
て
居
り
ま
す、
其
時
大
久
保
助
左
衛
門
長
田
文
之
函
は
二
人
吾
々
は
昨
夜
神
田
三
河
町
一
心
太
助
の
宅
に
乗
込
み
家
探
し
を
致
し
奥
の
隠
れ
に
於
て
儲
に
宇
都
宮
浪
人
と
思
ひ
ま
し
て
取
り
押
へ
ん
と
致
せ
し
處、
濠
川
伴
五
郎
の
爲
め
に、
飛
ん
で
も
無
い
目
に
遇
さ
れ
ま
し
た、
之
れ
と
云
ふ
の
も
拙
者
等
が
山
崎
氏
に
他
ま
で
も
力
に
成
る
積
り
で
致
し
た
の
で
有
る、
先
夜
は
大
久
保
彦
左
衛
門
や
水
野
十
郎
左
衛
門
等
が
乗
込
み
折
角
宇
都
宮
浪
人
を
召
捕
ん
と
致
し
た
る
を
妨
げ
ら
れ、
實
に
心
外
千
万、
此
上
は
何
處

までも此浪人の行衛を深し此恥辱を雪がねば相成りませぬ申し
ますると一同の旗本も言葉を揃へ一同如何にも吾々は今更後へ引く
譯には参りませぬ何處々々までも山崎親子の者を救けて遣らんけ
れば相成りませぬと種々様々に不得要領評定を致して居ります
之れを聞いたる山崎將監親子兄弟は將監是れは各々方斯く吾々の
非運なる者を斯くまでお力に成り下さる段實に何んともお禮の申し
上げようもございませぬ隼人「コリヤ下郎の勘造貴様は昨夕各々方
の供をして三河町の太助の宅へ乗込んだる際兵藤彌五郎の妻の絹
江を見たど申して居たが相違ないか勘造「はい其れは慥かに見まし
たに違ひございませぬが何分彼の時に澁川伴五郎先生の爲めに不
意を食つて彼んな始末に相成りましたるから申す事も出来ませぬ差
控へて居りましたのでございませぬが彼の時枕を並べて見て居りま
したは正に兵藤彌五郎の妻の絹江に相違ございませぬ此時側に
て之れを聞いて居りましたる大久保助左衛門に長田文之頭は二人其

れヒヤ矢張り一心太助の宅に秘匿ふて有るに違ひ有るまい其れヒ
ア尙も太助の宅に目を付け一人たりども宇都宮浪人を召捕り如何に
しても此恥辱を雪がねば相成りませぬ然し今度は吾々が逆も顔出
しは出来ませぬから久貝左京殿是非此後は貴殿が盡力下されイ
左京左れば一心太助と申しまするは以前は銀坐三丁目水木三郎右衛
門の宅へ手代奉公を致して居りましたる時彼れを救き香爐を十余
品購着そうと思ひましたに反て彼奴の爲めに恥辱を受けたる意根が
ござるから捕者も何處までも山崎親子の爲めに力添へ其れから
は捕者が飽までも盡力致し尙も此上は神田三河町の宅を探り愈々
彼の宅に居る事が判然致したならば乗込んで参り召捕つて仕舞う事
に仕りませうと是れよりは一層仲間共を以て一心太助の宅の近傍
に忍ばせ暇に探らせ見まするけれども最早太助の宅には居ない様
子何うやら品川船場町澁川伴五郎の道場へ秘しましたる趣之れ
を篇と探索を致しましたが何分相手は澁川流の柔術の達人なれば

迂闊な事は致されぬ、何んでも彼れ伴五郎の宅へ然るべき者を問
者に入れて家内の様子を探らせる事に致さん、此處に悪人奴等は
悪計の打合せを致して居ります、其れに引換へ品川船場町に有つて
は、濠川伴龍軒、伴五郎の親子は、兵藤彌五郎夫婦の者を大切にして
奥深く秘して居ります、處へ或る日立派なる武士一人仲間を連れ
て、濠川の玄關に來り、武士お頼み申します、
が段小倉の袴に稽古着を着て玄關に出で來り、誰方でございますか、
武士、拙者は長門國豊浦郡府中毛利甲斐守の家來、牧島庄藏と申す者で
ござる、豫て桑術を學びたいと存じ居りましたる處、然るべき好き
師匠もございませす、處が今般江戸詰を仰せ付けられましたるに付
き、之れ幸ひ江戸表へ参つたならば好き桑術の師匠を撰み、之れに
隨ひ稽古を致さんものと存じ居りましたる處、備當の道場、濠川先生
の、高名を承り参上致しましたる儀でございます、何卒今日より此
指南に預りたう存じます、仲間に持せて参りし、風呂敷包みの菓子

折と懐中よりは束修として金五百疋、之れを折と共に「甚だ輕少で
ございます、之れはほんの名刺の代りでございます、と其れへ差
出し、武士何卒か濠川先生に宜しく取次ぎを願ひます、取次、之れは先
生が何んと仰せられまするか申し上げますから、暫く其れにお待ち
なさい」と菓子折と五百疋を持つて奥へ這入りました、暫くして
再び其れに出で参り、取次、何卒か此方へお通りなさいませ、然らば
免と案内に連れられて此方の道場へ通ります、濠川伴五郎が其
れへ出まして、仲五、是れは初めてお目に掛ります、拙者は濠川伴五郎
でございます、唯今は結構なる菓子、又はお町噂なる束修まで、忝なく
受納仕ります、未熟ながら桑術が熱心とあれば拙者流義は教導
申し上げます、然し規則と云ふものがありませんから、唯今御覽に入
れます故、其通りお守下されんければ相成りませぬ、其れへ規則
書を取り出します、之れを牧島庄藏は受取り、熱覽致しました、
庄藏、是れは結構なる規則でございます、如何にも此の義承知致しまし

討 仇 坂 璃 瑠 淨

てございます。伴五「然し、牧島氏、今日より、稽古にお掛りなさるか。如何でござる。庄藏「今日は未だ初見への事なれば、明日より改め、稽古を願ひます。尤も屋敷が遠方でございますから、毎日、能う参りませんから、隔日にお願ひ申します。伴五「屋敷が遠方もあるなれば、拙者は何れの屋敷へでも決して厭ひません。不肖は大休、隔日に、は、大名方や、旗本方へ、稽古へ参ります。故長府公の、屋敷へ参つて、稽古を致したらば、何うでござる。然らば、何にも遠方の處へ通ひなさらひでも宜しうござらう。庄藏「否や、其れには及びません。若年ではございますし、通ひます。が、反て、吾身の修業でございますから、左様なれば、明日より改め、参上致します。れば、宜しく願ひ申します。す」と挨拶を致して、其儘に其日は稽古も致さず、其儘道場を立ち出で、ましてございます。後見送つて、澁川、伴五郎、門人を集め、伴五「方々、唯今長府の家來と申して参りし、牧島庄藏は、何うも考へて見ると、彼れ誠長府の家來で無ひらしい、何か彼奴の眼光、拙者と互ひに話

討 仇 坂 璃 瑠 淨

しをして居ながらも、事ありげに「ロロ」と、四方八方を見て居る。看様油断ならし、彼奴は誠長府毛利家の家來ではあるまい、事に依つたら、悪人衆の廻し者か。判らん、門人と成つて、吾道場に入り込ませし、宇都宮の浪士を探索に來せ、た奴か。相判らん、村山運平殿、貴殿も苦勞ながら、彼奴が後をお付け下さい、愈々長府の屋敷へ這入るか。見届けてお出で下さい。畏りました。村山運平と云ふ弟子が、若類を着換へ、其儘後をば見へ隠れに、高繩通りを付けて呉る、す。ると、牧島庄藏と名乗つた奴は、長府の屋敷へは歸らずして、牛込山伏町の、久貝左京の屋敷へ這入りました。村山運平は表に來つて、門に打つた。久貝左京の屋敷へ這入り、村山運平は表に來つて、門に急ぎに急いで品川の道場へ立歸り、村山「へい、若先生見届けて参りませ。してございます。伴五「其れは大に苦勞千萬、如何でござつたか、長府毛利甲斐守殿の、屋敷へ歸りましたか。村山「否や、先生の、推量に違はず、彼れは牛込山伏町の、久貝左京と云ふ、小身旗本の、屋敷へ這入

りましたのを健に見届けて参りました
 らば吾が鑑定に違はず、正に悪旗本より頼まれて吾屋敷へ探索に来
 たものに違ひない、シ其れなれば明日彼奴が稽古に参つたならば
 一怖し恐怖して遣らう」とシ蓋川伴五郎は其日を相待つて居ります、
 其翌日出て参りましたるシ牧島庄藏は庄藏へ先生今日は、昨日は
 面倒をお願ひ申しました、何卒か今日より稽古をお願ひ申します、
 伴五郎如何にも承知致した、然しながら牧島氏、吾が蓋川流は他の流
 義と違つて稽古が手荒さございませすから其思召で願ひなさい、
 倒流や楊真流は五年も六年も致しませんと充分に覺へませんが、
 川流は三年の處は一年で致へて仕舞ひますから、其稽古で願ひな
 ざるよう庄藏「雖有ふございます」と之れから稽古着をし道場の真
 中に控へて居る、蓋川伴五郎も同じく稽古着にて其處へ出て参り、
 伴五郎ア牧島氏、拙者の襟に左右の手を宛け力に任してお締めな
 い庄藏「ハッ」と云ひながら両手を延し伴五郎の胸倉を掴みますシ伴五

然しく、默止つて居ては不可ん、臍下に力を入れて、エツと膝をお
 發し成さい庄藏「ハ………エイツ 伴五郎うだ、充分に手を延して力を入
 れるのだ、宜いか、其手を今拙者が解くのだが、其れを解かさな
 ように力に任して拙者を捻じ伏せるようにしなければ相成らん庄藏
 宜しうござります、エイツ、ヤ、ッ、ッ 伴五郎然うだ、其手を放すな………
 今だぞ」と云ひながら、エイツヤッで一睨宛けるよと相見へたが、
 忽ち牧島庄藏奴を道場の片邊に、ッカと投げ付けたり、起き上らん
 とすつ處を又もやエイツと云ひ乍ら蓋川流の眞の當て身を入れて
 ると其儘………と絶氣を致しました、又もや其れを抱き起しエ
 ヲと活を入れると呼吸吹き戻す、又エイツと當て身を入れる、抱き
 起しては活つを入れる、呼吸吹き返す、當て身を入れる、氣絶をす
 る活を入れる、續けざまに五六度も遣られますと牧島庄藏奴は眞
 青に成つて、ウフ、ウフ、と妙な聲を出して居る、伴五郎うだ、牧島
 氏先づ柔術と云ふものは斯う云ふものだ、庄藏「マ、先生、中々、劍術

と違つて活かしたり殺したりするとは實に何うも酷ひ事でもございま
 す十 伴五、未だ是れからですか伴五、然うだ、是れを辛抱せんと行かん
 ムーッ、未だ是れからですか伴五、然うだ、是れを辛抱せんと行かん
 のだ、柔術の法と云ふは先づ活法が二十八に殺法が三十六、活かす
 法は殺す法と違つて二十八よりないのだ、是れは天の二十八宿、地
 の三十六禽を方取つたものだ、天地陰陽の法だ、其れだから柔術を
 學ぶものでも活法と云ふものは中々教へるものでない、此活法を無
 暗に教へると入りざる事を致す者が多いから教へるものではござい
 ませんとうで、其處で澁川先生は牧島庄藏を再び道場へ來んように
 する爲めに致すので有りますから中々初めから斯う云ふ事をする
 のではございませぬ、全く悪人より頼まれたと云ふ事を知つて無暗
 と遇酷事を致しましたのです、伴五、サア今日は是れ位ひに致して置く
 又明後日参られい、追々酷ひ積古を致しますから其積りで出でな
 さ、」 牧島庄藏奴は、心の内に、始めから斯んな酷ひ目に遇しアが

つて、今度目の稽古には何んな目に遇うかも判らんと、其儘に休は
 ッラ、」に成つて庄藏、サ、左様なら又明後日上ります」と色青さり
 て表の方へ出て行きます、後には之れを見て居たる弟子の人々、弟子、
 何うも若先生には手酷目に遇しましたナ、伴五、サ、敵の間者と知つ
 たから其れゆへ目に物見せて遣つたのだ、是れで最う一二度來せる
 から、最一つ激しい目に遇はし腕を脱し腕を抜き、仕舞ひには首の
 骨まで曲げて遣る積りだ、と又も其日を待つて居ると、此方は牧島
 庄藏は高細まで遣つて來ましたけれど、此牧島庄藏と云ふ奴は、旗本方へ
 中から駕籠に乗つて牛込山伏町へ歸つて参ります、駕籠屋を歸し久
 貝の屋敷へ還入つて参りました、此牧島庄藏と云ふ奴は、旗本方へ
 出入をして居る野州島山の浪人でございませぬ、金齒組の旗本一同
 から頼まれ、山崎將監親子の者にも金を貰やアがつて慾と二人連れ
 で澁川の道場へ間者には参りましたが、初めの一日で疑り、
 庄藏、サ、唯今立歸りました、左京如何だ、澁川の道場に宇都宮の浪人

が奥深く秘匿つて有るだらう庄藏「イヤ何うも各々様方酷い目に出
 遇ひました、今日初めて澁川伴五郎叔が稽古をすると申して其最初
 に斯く儲様へに致しまして私しの体はまるでへナクに成りまし
 た、何卒か此役は今日限り免を蒙ります左京「コリヤ牧島貴様も
 山崎親子の者より多分の金子を貰ひ一端承知の上間者に入込んだの
 も参つて篤と動静を探つて呉れ庄藏「イヤ宜しうござります、左様に
 云はれて見ますると仕方ありません、必ず明後日参つて今一應探
 索を致して見ませう」又も其翌々日品川の道場に来り庄藏「へエ！今
 日は伴五郎、牧島氏か、ヤア参られい、今日は豫て申し置いた通り
 一昨日の稽古から見るると一層激しうござりますぞ」と云はれて牧島
 は心の内で、何んな事をするのかと怯々として其れへ参る、伴五郎
 は「エイッヤ、ッ」と膝を蒐けるかと思へたるが牧島の右の腕を
 捕へたが到頭腕を引つて抜ひて仕舞ひます庄藏「ア、！先生、是れは

何うなります、伴五郎何うなるものが、腕を抜ひたのじや、ソリヤ以前
 の通り直して遣る、エイヤッ庄藏「ウ、へ、へ！先生、モ、以前の通
 り納りましたした伴五郎「エイヤッ」と云ふかと思ふと臆は忽ち脱れて仕舞
 つた、すると牧島は「ウア、ウア、」と口からダラ／＼涎を
 流し、して中風病みの通りで有ります「ソリヤ苦しいか其れ以前の
 通りに致して遣る」と云ふたり臆は以前の通りに相成ります
 まるで牧島庄藏の体は玩弄品の通りに致して居ります伴五郎「サア、最
 う今日は是れで稽古は仕舞ひヒア、又此後は一層稽古が荒いから其
 心得で参られ」と其日も其れで牧島庄藏はヤレ／＼と思ひながら
 牛込山伏町へ歸つて参り、一同に向ひ庄藏「あ一同、最う此上参りま
 したら、澁川伴五郎に殺されて仕舞ひます左京「然うして居る内に体
 が堅まります、是非行つて下さい」と云れて仕方なく矢張り隔日／＼
 に道場へ通ふて居ります、伴五郎は斯うして二三度懲らして遣つた
 ら出て来る氣遣ひは無からうと思ひましたるに相變らず牧島庄藏は

討 仇 坂 璃 瑠 淨

之れは父上、宜い事を氣付き成さしました、然らば左様致しま
 せう、と是れより神田三河町の一心太助の處へ人を遣し、相談が有
 るから直ぐ来て呉れ、と云ふて遣ります、其處で太助は何事やらん
 ど、急ぎ品川の道場へ来ります、と云ふて居る、病入で無ければ可
 う、と云々で悪人共から問者が入込んで居る、病入で無ければ可
 いが彼の通りのお熱、若しもの事が有つては吾々が申し譯が相立た
 ん、とやに依つて東禪寺の門内に居る花賣爺の一人者、之れに頼ん
 で隠れ坐敷に秘し置き、蓋げながら拙者等が氣を付けるが如何だ太助
 成るはと先生、宜しうございませう、然らば然う云ふ事に秘に頼ひ申
 しませう、と此處に皆々相談致し、又も其夜の中に秘に頼ひ申
 門の内なる、花賣の爺を頼んで奥の一間へ秘匿ふ事に相成りまし
 ございます、新く致して置いて折々川へ秘匿ふ事に相成りまし
 太助も時々、病氣なぞの手當を致し、毒に成らない看なぞを持
 つて来ては悪義に余念はございません、一すると此處に牛込山伏町に

討 仇 坂 璃 瑠 淨

稽古に通ひますから、仲五郎は若婢い奴だと思ひまして、父伴龍軒に
 向ひ、仲五郎の父上、如何したものでございませう、父伴、是りア不可
 ん、吾々親子が眼を配つて居れば、大丈、夫では有るけれども、何時も
 家内に、物々として居る体ならば、假令旗本が五十人、百人、乗込んで參ら
 うども、物の數も致さな、吾々は月の内に七、八、十度は、諸候方の
 赤屋敷へ、稽古に上らねば成らず、其方も又、一、六、或は三、八、の日に
 は、折角の連申、相成、兵藤、若、吾々が留守に不意に、乘込まれた
 時、折角の連申、相成、兵藤、若、吾々が留守に不意に、乘込まれた
 心、添へも水の池と相成、道理、コ、ヤ、何んとか、工夫を致さぬば相成
 るまい、仲五郎、致したものでございませう、父伴、筒様致せ、此先
 さの、高細、東禪寺の門内に花を商ふて居る一人者の爺が居るだらう
 仲五郎、ハイ、承知致して居ります、父伴、是れは至つて人の出で入りの少
 い静かな處であるから、彼の爺に頼んで向ふの間に、間を借り受け
 て、此處で秘匿に、病入の彼、養生を致させるが宜からう、仲五郎成るはと

在つては悪人山崎將監、悴隼人、第九平の兄弟、或る時親子の者は
 膝を交へての秘々話し將監「コリヤ悴隼人、九平の兄弟、斯くまで
 旅本方が吾々親子の者を盡力下さる、然し夏目勘解由殿へ養子に
 遣したる主馬を米澤領分で討ち取つたのは兵藤彌五郎で有るよし、
 して見れば其方兄弟の爲めには現在の弟や兄の仇、何うして其
 方等兄弟は兵藤彌五郎を討たねば相成るまい、其れだから牧島庄藏
 殿を問者とは致して居るが未だ其れも充分相判らない様子、何んで
 も此兵藤彌五郎の行衛を探し兄弟して討取るように致せ隼人如何に
 も此父上、其義は承知致しましてございます」と悪人は悪人で斯く
 彌五郎を随け観つて居ります、此處に神田三河町に在る一心太助
 は或る夜自宅に於て寝て居ります、眞夜中時、子分の忠八、勘次が、
 二人「オ、親分、儲りしなさい、何んたか和郎さんは大層叫まれて居
 なさる、何んか悪い夢でも見なさいましたかい、ワン／＼と最前
 から叫なつて居なさらる太助ア、應答しい二人親分、何うかしたんで、

すか、大層汗が出て居ます、太助乃公ア今大變に悪い夢を見た、
 氣にかゝるの兵藤の若旦那、乃公ア是れから高細まで行つて様子
 を見て来るから手前等は家内を氣を付けて居ねえ」と云ひ置いて身
 仕度致して今表の方へ出て行かうとして居る、處へ男「オ、太助の
 親分太助、淺吉「ア、此の間は乃公の内を恐怖したが手が
 前が「モヤ乃公の事をか饒舌はすまいと思つて居たが其れに彼んな
 不意な事が出来て吃驚した、然し淺吉、手前にも頼んで置いた、
 の行衛は判らぬ、か淺吉、然うだ、未だ儘かな事は判らぬが、先
 山の手の牛込邊だ、然し親分大層悪本奴等が悪人に加擔をして
 居るから余つ程氣を付けなくつちや行けね、太助、其りや淺吉、
 勇だ、尙此上とも宜しく願ひ、其處で太助は淺吉に分れて其儘
 急いで高繩東禪寺の花賣の爺の宅へ来て見ると、何か内には女の泣
 き聲、合点行かじと泣いて居る、澁川伴五郎先生も同ト「手を拱き之
 に坐りワイ／＼と泣いて居る、

浄瑠璃坂仇討

れも泣いて居ります様子太助先生、新造、何うかしましたか、何んで然んなに泣いて居なさんです、仲五左れば太助、太變な事が出来たわい、兵藤彌五郎殿は不慮の最後を遂げられた太助、若旦那様、新造さん何うしたんです、貴方も側に居て成すつて、若旦那様が、最後とは病ひしたんで、貴方も側に居て成すつて、若旦那様が、腹を當てられ、此の通りのお最後を遊ばしたのだ、背のはさから大變に様様が悪ひからお薬を取りに行きかけた、瀧川様へお知らせ申し、然うして、薬を取つて見れば早や旦那様の呼吸は絶れて有る、仲五、拙者も、網江殿の知らせを聞いて急いで駆け付け来りし折柄、此、東禪寺の門内より武士二人が擦れ違ひに外へ出たが、其の時之れを知つたなら、其武士を引捕へる處で有つたが、東禪寺の寺武士が品川へでも来見に行くと、有らうと、思つた故に、其時は油断を致し居つたが、道入つて見れば彌五郎殿の此最後、ア、誠に氣の毒な事が出来たわい、太助如何も残念な事が出来致しました、何れ此、山

浄瑠璃坂仇討

筋兄弟の仕業に違ひ有りませぬ、然し乍ら、身に傷と云ふなア付いては居ませぬ故、表向きの非ひも出来ませぬから、此儘東禪寺を頼み申す事に致しませう、と此處に彌五郎の体は東禪寺へ頼み申すの非送を済まして、此時瀧川伴五郎は、仲五、太助、此、網江殿は何うする、太助、是、ア私しが以前奉公致して居りました、銀坐三丁目の水木三郎右衛門を頼みまして、之れへ預ける事に致しませう、然うして此赴は下野國銅掛にござる親且那兵衛様の方へお知らせ申し上げます、と此處で太助は、網江を連れ水木三郎右衛門の許へ参り、委細を話し、網江を預け、自家へ歸つて参りまして、手紙を詳しく語り、子供分の忠八に云ひ付け、下野の銅掛にござる兵衛様、引連れて百姓のす、兵衛様は之れを見て大に驚き、彌五郎の源八郎を引連れて百姓の姿に變じ、江戸表へ入り込み、尙は敵の様子を探らんと千住の大橋まで来る、計らさり、此處に於て立寄、源八郎の叔父、彌五郎の山形へ送られ、追手の者に召捕られ、網乗物に乗せられて、本國出羽の山形へ送られ

浄瑠璃坂仇討

引續いて伺ひまする、浄瑠璃坂仇討の事は、一心太助が子分忠八
と申者に云ひ付けて、兵藤五郎殿が返り討に成りしを、野州銅掛
宿に隠れてござる、兵藤玄蕃大に驚き且は歎き又は怒りまして、此
と是を聞たる、兵藤玄蕃大に驚き且は歎き又は怒りまして、此
を義黨の人々に知らしめると此を聞いたる浪士の人々銅掛宿
藤玄蕃の隠れ家に來り一同借玄蕃殿承りすれば、吾々の微運悪人等の悪運の
不慮の最期胸中察し申上げます、吾々の微運悪人等の悪運の

浄瑠璃坂仇討

まする途中、宇都宮正義の浪人を始め大久保彦左衛門、水野十郎左
衛門等の屋敷へ出入を致します浪人を共謀ひ遂に野州銅掛ヶ原に
て此網乗物を打破りますると云ふ實に勇ましき話しに相成ります
るが、一寸死を蒙りまして、次ぎの一席に詳しく話しを致しま
する。

第八席

願さ、此上は江戸表へ乗込、敵の行末を探し本懐を遂げやうと存じ
まするが、如何でござる玄蕃、イヤ、未だ討べき時來らず依て拙者
一人江戸表へ参り、仲五郎の墓参りを致し篤も敵の動靜を探らん
と存する、此時奥平源八郎、源八伯父上、私も供を仕りたう存じま
する、私の爲には姉御なれば兄上の墓参りを致したうござる玄蕃、
然らば同道せん、然し拙者の考へには、日蔭の身なれば成丈け自立
ぬやうに百姓が江戸見物と云ふ婆に疊して行事に致さうと是より
手繰木桶の肴物に小倉の帯、紺の山形付の脚半、差を帯し、銅掛宿
を立立を致しました、然るに話し替つて江戸半込山伏町久貝左京の
邸に有つて、悪旗本一同如何に山崎兄弟、其方等先夜高繩東禪寺に
参り、兵藤五郎を返り討に致した何れ此事が浪人共に聞こへる、
左すれば必す江戸表へ乗込、亦たるは必定依て途中に待受け召捕つて
仕舞、羽州山形へ送らば如何で有る、此時山崎兄弟、其義は早速
奥平家の番頭役淺野丹五郎の許へ通知致し置きましたれば、奥平上

邸より急度其手配りに及びます一同夫れは重疊々々夫なれば程遠
 からぬ内には召捕られるで有らうと悪人共は斯く密計を企て居
 ります然るに奥平家上邸に居る番頭淺野丹五郎は隙て山崎半人兄
 弟と内通を致して居ります所へ山崎半人より兵藤彌五郎を討取り
 し趣を知らして参り尙此事を聞き宇都宮浪人必ず江戸表へ乗込來
 るは必定なれば召捕下されたいと申し送りましたるが故に淺野丹五
 郎は此事江戸家老又は留守居徳の人々に申し入千住口へ人数を巡
 し今にも兵藤玄蕃黨の乗込來るを待受る所充分の手配りに相
 成居るとは神ならぬ身の夢にも知らず兵藤玄蕃源八郎の二人は百
 姓の姿に變じて日光街道を日を重ね千住口迄來る白晝に入込事も
 如何哉と夕景千住宿へ掛る折柄要介雲介へイ且那宿迄お駕籠に
 か乗り成すつて下さい兩人折角でございませすがモウ宿迄は近ふこ
 さいますから今日断り申します要介オイくそんな事云はねいで乗
 つて下さい今日断り申します要介オイくそんな事云はねいで乗

卒の願み申します二人けれ共吾々は乗りません夫共宿が違方なら
 乗せて貰ひますが近うございませすから断り申します雲介ヤイ土
 百姓吾々が譯を云つて頼んで居るに強情な奴だ乗り來たる人足共一同オ
 ら乗せるのだと云つて居る所へ追ひく乗り來たる人足共一同オ
 イ兄弟如何したのだ雲介乃公が朝から錢の面を見ないから頼んで居
 るに強情な此百姓夫れだから無理から乗せやうと云つて居るんだ
 一同コウ兄弟グツく云ふ事アねへ乗らねへと云や叩き殺して
 仕舞へと飽迄無法な事を申し掛けますから是れを黙つて堪らへ
 て居りましたる玄蕃源八郎兩人ヤイ人足吾々を百姓と侮り無法
 な事を申すと勘辨せんぞよ一同何に勘辨も糞も入る物かニヘイ且
 那時分は宜さそうでございませす何にか相圖を致しますと此
 時千住の問屋場の際に隠れて居りましたる奥平家の番頭淺野丹
 五郎數多の粗子を引き連れ夫れへ現はれ丹五ヤア珍づらしや兵藤玄
 八郎其方等先達羽州米澤領野淵の康申坂にて殿様御名代

主馬に何んの御答りも無く是れ國家老夏目勘解由が依怙の汰沙然
るに其主馬の殺されしは天道の正明實に當然也又十有余名の人
々ど浪人せし砌は折々出會候が近頃では一向遙も致さず何れに居
るや存し申さず假令居所が知れたればとて何んしに白狀致さうや
丹五上の御沙汰を依怙とは何事だ不埒者り其方も舊十八万石の
其食を喰んで居たのでは無いか兵勝然れば其食を喰むのがイヤに
職祿返上して浪人を致したコリヤ淺野丹五郎汝の父丹藏正月元
旦に宇都宮大下馬先にて何者共知れざる曲者に殺されたて有らう
夫れを何んの答りも無く國家老夏目勘解由が計らひに依つて病死
の届其の上汝へ家督をさせたは是れ依怙の沙汰に非ずや如何じや
丹五ヤア不届なる玄蕃ヤア者共玄蕃源八郎を拷問に掛け
と申しませぬ此時側で聞いて居りましたる同役松井文左衛門
文左アイヤ淺野氏暫く御待あれ如何に玄蕃殿には一別以來先
以御壯健珍重にござる借其許に御尋申致は當地神田三河町三丁目

夏目主馬殿を討取候段重々不届至極依て只今召捕に向ふたり最早叶
はぬ尋常に繩に掛け玄蕃ヤア借は吾々が江戸表へ参るを知つて召捕
らんとするか源八郎油断を致すなハツと答へて源八郎旅差の一刀
鞘を拂ふ兵藤玄蕃も同じく鞘を拂い、サアコイ來れど身構に及ぶ
此時淺野丹五郎は「夫れ者共召捕」と下知を傳へます心得たりと
數多の人数玄蕃源八郎へ討て掛りますと下知を傳へます、
盛して働いては居ります二人を駕籠に乗せ與平家の下邸へ引上げる
取つて押へられる直に二人を駕籠に乗せ與平家の下邸へ引上げる
聖朝兵藤玄蕃源八郎を吟味せんと夫れへ引出して、淺野丹五郎
丹五如何に兵藤玄蕃其方共先年與平家を浪人なし十有余名徒黨して
殿様御名代夏目主馬殿を羽州米澤領にて討取候段重々不届至極殊に
十有余名の者等は何れに潜伏居るや有休に白狀致せ如何じや玄蕃夏
目主馬の殺されたる事に存しん然し今承つて喜ぶ事なせ成れば
彼主馬が御善提所高禪寺にて、奥平内藏之介を不意に切殺せしに其

に住居致す、魚や渡世一心太助と申者は舊御身様が召使はれたる、仲間太助と申者でござらう兵藤如何にも左様でござる文左如何成程にて御暇を出されしぞ又當地へ参りしや承りたう存する立善然れば彼が姉たる咲と申者が、淺野丹藏方に奉公中何にか無禮を致したと有つて御手討に成りし由、兩親も相果國に居るのも面白からずと暇を取ら江戸表へ参つたのでござる文左然らば正月元旦大手馬先の亂暴人は太助と申事で其際評判を致したり、然らば此義御貴殿知らんとは申されませぬ、其後浪士の人々神田三河町太助方へ到着せられて、本郷御弓町大久保助左衛門と云ふ御旗本の邸へ亂入なし、又兵藤五郎殿御病氣の際、太助方に潜伏居たる時何にか騒動の有つて、澁川伴五郎が仁に依りて危難を遁れたる趣是等は如何でござる立善扱は御當家には悪人華人とコリヤ御同意でござるか、其上吾々正義の者を召捕られたか文左控へ召され山崎半人が浪人の後何れに居るか更に御當家には御存じ無い、其許こそ一心太助と申合隠謀と

企て候段重々不埒此上は太助と突合せ申付け、夫れ兩人と揚合へ入れ、ハアッと言ふ足輕共兵藤立善、源八郎を揚り合へ入れる、斯く致して置いて、一心太助義は町奉行へ届け置き早々召捕つて仕舞へ、これに依りて奥平家より町奉行へ届け置き早々神田三河町三丁目自身番へ来り、町役人當町内魚屋渡世通名一心太助と申者不審の筋有て召捕に向ふたり、早々是れへ呼寄せ「へい畏りましたと、早速太助の宅へ来り町役太助さん只今奥平家よりお前さんに御尋の筋有るとの事何卒か自身番家迄御出下され太助何に乃公に不審の廉が有ると奥平家より役人が出張した、宜い承知した」と羽織を着て太助コウ忠八、乃公は自身番へ行つたら召捕られるかも知れない、万一召捕られたら直さに駿河臺の大久保の親分へ此事を知らしめて呉れ」と云ひ置いて、町役人と諸共に自身番へ参る、此時町役人町役「へい、是れが即ち太助でございます役人太助不審の筋有る依つて召捕るから左様心得、夫れ太助に繩を掛け、御用だ太助コウ乃公

に不審の廉が有るとて細を掛ける面白い乃公は今迄不正な事は少しも致した事ア無い夫れに召捕ると云ふなら召捕跡で此太助に謝る様な事が出来るぞア引立役人控へ夫れ引立いと太助を細付にて其儘奥平家の邸へ引立ます、此事を町役人より太助の内へ知らせず、するど子分の忠八は捨置かれんと急ぎ駿河盛錦の小路、大久保彦彦左衛門殿邸御勝手口へ飛込来り忠八へい申上げます天下の一大事ございませす早く親分に御乗り出しを願ひます、此事を聞いたる用人伊東治良介、治良、ヤイ其方は太助の子分忠八や無いか忠八へい左様でございませす治良何んだ天下の一大事なぞと何にか天下の一大事だ、忠八へい私らの親分太助が只今奥平家より役人出張して召捕つて歸りましてございませすから天下の一大事と申し上げたのでございませす治良何にか夫れが天下の大事だ貴様の親分太助も折々そんなつまらん事を云つて来る困つた奴だ暫らく夫れに控へて居れ」と申置いて此事を御主人様へ申上げると、大久保忠教彦彦左衛門………何にか太助が

奥平家へ召捕れた、夫れは捨置事は相成らん予が急度助け遣はすと申て若い者を歸やして仕舞へハア………と伊東治良助は壺所に來り治良、コリヤ忠八、御主人様が助け遣はすと申し居られる故に安心して立歸れ忠八へい如何も難有ふ存じませすと喜び立歸ります、此時大久保忠教、忠教、コリヤ治良助、其方奥平家へ参り留守居役の者召連れ歸れ」と申付けましてございませす、ハアと伊東治良助は早速奥平家留守居、奥村三右衛門に面會なし治良主人彦彦左衛門御對面の上、御尋問の義有る依て只今拙者と同道にて御出下されたい三右衛門承知と早速此事を江戸家老に届け置き、伊東治良助と諸共に同道して駿河盛大久保の邸に來り、彦彦左衛門に對面致しませすと、大久保忠教彦彦左衛門如何に奥平家留守居役其方を呼寄せたは外の義では無い、當地神田三河町三丁目一太助と申者何にか不審の筋有るとて捕らへに相成候由、彼太助は予が邸へ出入の者夫れ如何成不正を働らさしや一應相尋ぬるので有る如何じや三右衛門、彼は宇都宮浪人

討 仇 坂 璃 瑠 淨

禪寺にて大法事の折から、山崎半人奥平内藏之助口論の上、互に及
 傷に及びました。夏目勘解由の養子主馬成る者、後れて高禪寺
 に來り不意に内藏之助の後ろより切付ました。夫れが爲に内藏之助は
 遂に落命を致しました。山崎半人共家名斷絶と相成りましてございます。彦左是れは斯く有りた
 船半人共家名斷絶と相成りましてございます。彦左是れは斯く有りた
 さ事である、亡君の法會の場所に於て家老職の身を以て及傷に及
 ふと云ふは不届極、家断絶とは當然の事である、して奥平内藏之
 助を切り殺したる夏目主馬なる者は如何なる所置に行ふたか三右へ
 イ、是れは其儘に差許しなして、喧嘩の起りは山崎半人にて夏目主
 馬は半人が弟にして殊に國家老夏目勘解由の養子なれば別に何のあ
 谷めも無く差置いたのでございます。彦左して何か、兵藤玄蕃其他の
 者が奥平家を浪人致したるは如何なる評で有る三右是れは其後十余
 名の者共、速印をして奥平内藏之助の家名再興を願ひ出すると雖も昨
 も名聞届け之れ無きを恨み、還に職祿返上の上浪人を仕り、既に昨

討 仇 坂 璃 瑠 淨

兵藤玄蕃と申者と、聯合不正の筋を働か候事故一應召捕へ兵藤玄蕃と
 突合せ吟味を致さんと召捕りましたのでございます。彦左、……一
 心太助が不正な事を働らさしどは驚き入つた、如何成事を致せしや
 心得の爲に相成、サア如何云ふ不正を働らさしや承り度早く聞か
 て呉れ三右、彼舊は兵藤玄蕃の方には、奉公中玄蕃の伴五郎が妻を貰ひし
 まする節、二枚的を遣ひましたるは、斯様く云でございます。夫れ
 を山崎半人は是れを亂さんと彼大助の姉妹を吟味せんと淺野丹藏方
 て手討に相成し、夫を遣はし、思ひ、正月元日姿を變じ宇都宮下馬先
 に槍持共が喧嘩の騒ぎに乗じて其槍を奪ひ取山崎半人が股を突き
 淺野丹藏は物の見事に突殺し、其槍を奪ひ取山崎半人が股を突き
 は勇壯なる事を致した、彦左、……夫れ
 した三右、半人は手寫養生家抱はらず又淺野丹藏は伴五郎を以て家
 督相續の義相叶ひましてござる彦左、……夫れ
 人を致せしは如何云ふ譯からだ、三右是れは先主奥平忠教菩提の爲高

年夏目主馬なるものが、主君の名代にて江戸表へ出府の折柄、羽
 州米澤領、野淵庚申塚にて切り殺したる者は全く宇都宮浪人共なら
 んど殿しく詮義の折柄、山崎隼人へ浪士の者等より開状を付け牛込
 高田の馬場にて勝敗を決するなどは重々憎つき致し方、之れ兵
 藤玄蕃等の仕業と探索中、今度計らず千住口に於て召捕りまして、
 段々吟味に及びまする處、寛永七年正月元日の朝未明、宇都宮大手
 下馬先に於て狼藉を働きましたる者は之れ大助なる事相知りました
 るが故に、即ち一心大助を奥平家へ召捕りましたのでございませ
 彦左、ム……何か、奥平家にては何者とも知れざる者に殺されたる
 野丹藏の家名は伴丹五郎を以て相續を申し付けられたので有るか、
 騎隼人は家老職の身を以て何者とも知れざるものに深手を負ひなが
 ら、何の難も無く其儘に差置いたのヒアな三右、へい、左様でござい
 ます彦左、又、奥平内蔵之助は菩提所高禪寺に於て夏目勘解由が一子
 主馬が切り殺したに依つて家名斷絶を申し付け、又夏目主馬は何者

とも知れざる者に羽州米澤領分にて殺害をせられたるが、其の義に
 就いては親勘解由には何の咎りも無く無難に差置いたので有るか、
 三右、へい、如何にも左様で彦左、して見ると奥平家にては何者とも判
 然せざる者に殺されたるもの、家名に傷を付けんのが家風で有るか
 三右、ム……へい彦左、何うシア、何者とも知れざる者に殺されたりと
 有れば、必ま家名に傷を付けるが當然で有るに、且つ其れ而已なら
 す浪人が山崎隼人へ開状を付けたのが不埒と申すが、浪人山崎隼人
 の身の上の事を何故其方等が存じて居るか、ム、借ては山崎隼人等
 と氣脈を通じ内通を致して居るな三右、イニ、中々内通なぞを致した
 事はございません彦左、内通を致して居らんのに何故浪人山崎隼人の
 事を心得て居るか三右、イニ、ハ……彦左、コリヤ殊に只今此彦左衛門
 が承る處の一條、奥平家にては、一々公平の取計ひ、甚だ不埒至極
 而已ならず神田三河町肴屋波世一心大助を召捕りしは、一々訊問の上
 の事の有るか、何を大助が不正の事を働いた、ム……辨く云ふ彦左

く時は大久保彦左衛門に如何なる事を云はれるやも知れないと早速
 太助を其れへ引き出し役人「コリヤ太助、一端其方を當與平家に於て
 は不審の廉を以て召捕りしが、一時疑は晴れた事故難有ふ心得い
 すると一心太助は「ハ、ア、こいつは乃公の親分大久保彦左衛門か
 ら遣り込められアがつたに違ひは無へ」と思ひましたから太助「ヤ
 奥平家の役人奴等、其れだから初めから乃公を神田三河町の自身番
 屋で細を掛ける時分に然う云つた、乃公に細を掛けると今に己ぬ等
 が泣き面を見るよと云つたらう、乃公ア此儘にア歸らねエ、サア何
 の罪が有つて細掛けたんだ、此儘歸る事は出来ねエ、役人「コリヤ、
 太助、貴様が今に來つて然う威張つては困る、何分一時疑が晴れた
 から宿下げを申し付けると云ふのだから、何卒此儘歸つて呉れ、
 大助「さア見やがれ、其れヒア手前の方から歸つて呉れエと云やア
 歸つて進らア」と太助は大言を吐いて其儘與平家の屋敷を飛び出し
 ましてございませす、後に與平家の役人共は一心太助を歸しまして、

衛門は將軍家と異見番、請役人諸大名の惣目付役を蒙る上は聊かた
 り共不正の取計ひを致す事は相成らん、又山崎隼人、淺野丹藏、夏
 目主馬の義に付いては重々不均一の沙汰有之から兵藤玄蕃を初め十
 有余名が職祿返上の上浪人を致したので有らうが、然るに此度千住
 口に於て召捕りし兵藤玄蕃、與平源八郎の二人、江戸屋敷に於て吟
 味を致すと有るならば斯く云ふ彦左衛門其節立會に及び調べをば傍
 聴するから左様心得い、斯んな人に此吟味を聴かれて堪るものでは
 ございませんから、與村三右衛門は三右一應立歸りまして重役共と
 相談の上追て御返答を仕ります彦左「ヨシ、其れなれば其れで宜い
 付いて、先刻申しした一心太助と云ふ者は潔白義侠心の者ヒア、之れ
 を與平家に留め置く事は大に宜しく無いぞ、立歸つて重役共へ篇と
 此事を申し聞かせ、之れに依つて與村三右衛門は大久保彦左衛門に
 言ひ伏せられ放々の体にて立歸り、此の趣きを重役共に申し上げま
 す、其處で一端與平家へ召捕つたる一心太助は、長く屋敷へ留め置

浄瑠璃坂仇討

す、私らは之れから發足して正義の浪人方へ内通を致しまして、
 度其手配りに及びます彦左否や、太助、今暫く貴様は此江戸を動
 く事は出来な、誰か顔の差支のない若者を一人鍋掛の方へ差し遣
 はせ、何れ奥平家にては大勢致して玄蕃、源八郎を護送するに違ひ
 ない、唯宇都宮正義の浪人ばかりでは所詮玄蕃、源八郎を救ける事
 は出来な、依つて水野十郎左衛門、其他白柄組の人々と相談して
 屈強の者を助勢として鍋掛けへ差し向ける事に致すぞ、太助、何うも有
 難ふございます、其れにア何分殿様、宜しう願ひ申しませう、と其
 儘神田三河町の宅へ立歸つて参りました、子分、勘次と云ふ者を呼び
 此者に委細を申し合ひて野州鍋掛ヶ原へ差し向けると云ふ、ア是
 れからが鍋掛ヶ原に於て網乗物を打ち破り兵藤玄蕃、奥平源八郎の
 兩人を救け出す話してございます、一寸の免を蒙りまして、次
 席に……。

浄瑠璃坂仇討

兵藤玄蕃、奥平源八郎の兩人は逆も江戸屋敷に於ては吟味が出来な
 い、其う成つては大久保彦左衛門が立會を致すと云ふ、此れに立會
 れては一大事で有るから、是りア本國山形へ差送り國表に於て吟味
 の上、國法に處すると云ふ事を大久保彦左衛門殿へ申し送る事と致
 しましてございます、此處に一心太助は奥平家を飛び出すより、吾
 家へも歸らず駿河臺大久保彦左衛門の屋敷へ参り、目通りを願つ
 て太助、何うも殿様、難有ふございます、貴方の御聲が、りて私らも
 歸る事に相成りました彦左、其れは結構、時に太助、兵藤玄蕃、奥平
 源八郎の二人は江戸屋敷で吟味をすれば、本國山形へ差送り相成
 と云つたが、逆も江戸表では致すまい、斯云ふ彦左衛門立會をする
 が、此の玄蕃、源八郎を山形へ送られて仕舞へば國法に處せられて
 殺されるは必定、山形へ網乗物にて送る途中宇都宮浪人共へ内通を
 致し、野州鍋掛ヶ原あたりで隠れて此網乗物を奪ひ取り、玄蕃、源
 八郎を助けける様の手段を廻らさねば相成るまい、太助、其りア宜うごわ
 り、

借ても奥平家に於きましては兵藤玄蕃源八郎の兩人を網乗物に乗
 せ、番頭役淺野丹五郎が足輕其他の人々合せて五十余名にて前後
 を守り、江戸表を發足なし、初めの泊りが粕壁の宿、二日目か中前
 の宿、三日目が白澤泊り、四日目が夫田原泊りと新しく相定めて居り
 ます、然るに此處に一心太助の子分勘次は鍋掛宿に來つて正義黨の
 人々へ此事を通知し及ぶ、之れを聞いたる、奥平傳藏、桑名友之進
 兵藤玄蕃、太夫、細江又左衛門、毒武平等の正義の人々、「此上は吾々は
 源八郎、玄蕃殿の兩名を救いねば相成らん」と勇み進んで打喜び
 ました、然し敵は大勢、味方は小勢、不意を打たされば所詮此網
 乗物を打ち破る事能はず、先づ大田原へ出張つて先き供を窺ひ其の
 上の手配を致さんと何れも其仕度及んで居る處より、大久保彦左
 衛門、水野十郎左衛門、兼松又四郎等の白柄組の人々等より、屈強

第九席

の武士十余名、鍋掛宿へ乗込ませまして、此處に双方の人数合し
 て二十余名、大田原の宿へ出張つて様子を探つて居ります、話代
 つて奥平家の同勢は其夜は宇都宮の泊り、何れ明朝此の宿を立つて
 大田原へ來る、其間に鍋掛ヶ原と云ふ處が有る、是れへ隠れて網乗
 物を打ち破らん、網乗物の來るを今か、と相待つて居ります、
 此方は淺野丹五郎、宇都宮に泊つて翌朝此宇都宮を出立なし、網乗
 物を守護致して通り掛つた鍋掛ヶ原、折しも片邊の草原より現れ出
 でた、正義の浪人、大音上に浪人、ヤア、吾こそは宇都宮の浪士、
 奥平傳藏、桑名友之進、義に依つて兵藤玄蕃、奥平源八郎殿の、
 人を助けんとす、妨げんとする奴は片端から切り落す、覺悟致せ、
 一同は面も振らず切つて出る、此の時丹五郎等も豫て期う云ふ事
 も有らんかど、選みに選んだ武士が付けてございますから丹五ッレ
 各々方、宇都宮の浪士が切つて出たるぞよ、防げや戦へや」と大
 音上に下知をなす、心得たりと奥平家の屈強の武士は皆々抜刀にて

討 仇 坂 璃 瑠 淨

亂れたかど、見れば年輩の武士が五六人の武士を下知して頼りに
勤ひて居ります。様子、コツ天の救けなるかど喜び勇んで直ぐ様手に
元へ近寄り奥平家の同勢を切つて、切り廻る。此の間に奥平傳藏
桑名友之進は綱乗物に近寄り、之れを切り破り、中より兵藤玄蕃
源八郎を助け出す。玄蕃源八郎の兩人は大に喜び、兩人唯今御助勢
を下されたる年輩の武士は何人でござるか、と見れば是れこそ餘人
に非ず、先達で御高恩を蒙りし野州宇都宮御城主松平家の御隠居松
平忠興公、一手は其れに諸手を仕へ、皆々是れは御老公忠興公に候や
先達ては種々様々の御高恩を蒙り、今亦吾々非運の者を御助け下さ
れ候段、返すくも難有さ合仕せに存じ奉ります。忠興、オ、浪士の者
共、今回兵藤玄蕃源八郎が召捕られ出羽の山形へ護送せらるゝと
云ふ事を聞き、武術に達せし若武士を謀ひ加勢と致して是れまでに
罷り越した。先づ一同も無事に何よりの事である、見れば浪
士の者共の内、先づ手寫を受けし者ある様子、是れは予が預つて充分の

討 仇 坂 璃 瑠 淨

浪人組を相手に、チヤン、チヤリ……、ンと切り結ぶも中々網乗物
に近づく事能はず、案外にも困難でございませ、此時大久保彦左衛
門より差し向ければ、兼松又四郎より差向けましたは尾崎謙藏、此
人々向
けたる村越軍次、兼松又四郎より差向けましたは尾崎謙藏、此
が切つて出で、働きますと雖も、中々敵は少しも屈する氣色は
相見へず、此處を大事と働きまするが故に、何うしても網乗物に近
寄る事能はず、之れが爲めに正義黨の浪士の人数は大に困し果て、
居ります、折柄彼方のかたより年輩の浪士、五六名の若武士を従
へ通ります、今しも奥平家の番頭役淺野丹五郎が四方八方へ下知を
して居る後、方より物をも云はず、淺野丹五郎の細首を切て落す、
一ッ一ッ、解けるよと見へたが、浅野丹五郎の細首を切て落す、
丹五郎こそ宜い災難、向ふばかりに心を奪れて居る其後、ろから首を
切つて落したのでございませ、此丹五郎が討たれたと云ふ處からし
て俄に奥平家の同勢は亂れて来る、此方は浪士の人数、何故に敵が

養生を致させる、手病養生叶ひ次第江戸表へ差し向けるから江戸表より参りし者は早々後を介意はず立退く事に致せ、是に依つて江戸表より加勢に参りし者共は分れを告げて江戸表へ立歸る事と相成り、下總守忠興公は正義の浪人を連れて秘かに夜に入つて宇都宮に立歸られ、一同の者の手傷の養生をおさせ成る、此時大田原飛彈守殿より出張の役人が後へ乗込んで見れば奥平家の武士は澤山に討たれて居りますから、其趣きを出羽の國村山郡山形へ報知に及ぶ、是れを聞かれましたる奥平家に於きましては人数出張致し其れく死骸の取片付けを致し、其の上浪人組を嚴重に探索を致して居ります、証しは江戸に變つて神田三河町の一心太助は大久保彦左衛門様よりの知せを聞いて、大に喜び太助コリヤ此度び盡力を成し下されたる白柄組の旗本様方を充分に饗應をせなけりア成らない、然し此太助が是れをすると云つては又乃公に目を付けられど堪らねへから水木の旦那を頼み、例の茶の會に事を寄せて、

招き申して馳走をしよう、と考へ、早速銀坐三丁目水木三郎右衛門の方へ來り太助旦那、此度野州鍋掛ヶ原に於て網乗物を破つて兵藤玄蕃様、源八郎様を救け下されたのは、白柄組の旗本で有ります、此の體に饗應を致したうございませす、貴方の名前を借りてしまし、ては又目を付ける奴が有りますから、貴方の名前を借りて茶會をすると云ふて饗應を致したうございませす、何卒ぞ願ひ申します、三郎如何にも承知致した、と早速水木三郎右衛門より書面を認め、て白柄組の方には新造の絹江様をば一心太助は前日より献立の工風を致し、當日には愈々當日、大久保彦左衛門、水野十郎左衛門、近藤登之助、阿那四郎五郎、兼松又四郎、駒木根彈正、其他の人々は水木三郎右衛門の方へ出て來る、一同坐敷に相列びました、處へ馳走萬端を其れへ取り出し、絹江が給仕人となり成り、種々饗應を致します、酒宴酣に相成りました、此時に駒木根彈正

は、先き程よりの絹江の立居振舞を見て大に感ずる處が有りました
 ものど見へまして弾正「ア……」水木三郎右衛門、是れなる婦人を暫く
 の間此駒木根彈正の内へ預り受けると云ふ事は相成まいか、何うも
 行儀作法と云ひ、立居振舞まで實に感心致した、拙者が娘又は女中
 共へ女の禮儀作法又は仕付け方を教して貰ひたいのであるが、何う
 だ拜借は出来まいか三郎「ハイ、意に叶ひましたら、連れ歸り下さ
 いまして差支はございませぬ、何れかへ屋敷奉公を致させたいと思
 つて居たのです、すると大久保彦左衛門は彦左「アイヤ駒木根氏、其
 婦人は此水木の宅へ預つて有る、豫て話し申す奥平内藏之見の娘
 今般救け得さしたる源八郎の姉で有るから、何卒かお連れ歸りの上
 は大切に致して下さい、彈正「マ、さこそ、流石は家老職の娘だけあ
 つて實に正しき者である、然らば駒木根彈正が拜借して連れ歸る」
 と難て酒宴も相済みまして分れ、立歸る、然るに駒木根彈正は
 絹江を連れて牛込山伏町の宅へと歸られ、奥方又は娘、又は

側女の一人々へ行儀作法の教へ方を申し付け、絹江は才智も有りま
 す、宜しうございませぬ、時々駒木根様の御姫様と諸共に物見に上り
 が宜しうございませぬ、或る日御姫様と共に物見に上つて絹江「ア
 往來を眺めて居ります、或る日御姫様と共に物見に上つて絹江「ア
 ノ、御姫様、此お向ひの御屋敷には始終客來が絶へず有ります、様
 子、御姫様、何んと云ふ御旗本でございませぬ、御姫様、其の御屋敷は
 久貝左京と云ふ金齒組の御旗本で、吾が父上とは御旗本だ、絹江「然
 う久貝左京と云ふ方は余り御評判の宜しからん御旗本だ、絹江「然
 うでございませぬ、御姫様、又も馬で五七名の御旗本が入來し
 やいませした様子でございませぬ、又も馬で五七名の御旗本が入來し
 左京の屋敷に於きましては金銀入齒組の御旗本奴等大勢集まり、其
 に、大久保助左衛門、長田文之丞、兩人如何に山崎隼人兄弟、承れば
 今度折角奥平家に召捕りし兵藤玄蕃、源八郎の兄弟を野州鍋掛ク
 原に於て浪人輩の爲めに網乗物を破られ、未だ行衛の知れざる容子

實に残念ではござらんか。此時久具左京は左京助左衛門殿、文之丞殿、何んでも其網乗物を破る原加勢の中に年輩の旅武士が大變の働きををしたと云ふ事を聞いて居ります。若しや身の内親類、駿河、其處等には拙者脱意りは無ひ、段々拙者探つて見まするか、助左衛門、へ出張つた様子は更にござらん。左京、これ共何れ白柄組の連中から加勢が出張つた様子は、遠ひ有るまい、既に此の間、水木三郎右衛門方にて、茶の會と號して白柄組の旗本等に大層な馳走をしたと云ふ事を聞いて居る。助左衛門の義は此助左衛門も承つて居る。然らば左京殿、身も水木三郎右衛門方へ茶の會などに参加られたる事有るよし、一應水木三郎右衛門の方を探つて見られよ、彼の一心太助と云ふ奴は以前車で有りませうから、篤と探り下さらないか。左京、否や、拙者は當時は一切水木の方へは足踏みは出来ないと、先達ての香爐の一件から

で、然し何んとかして探つて見たいもので有る。と種々談合を致して居ります。庭先に罷り出まして勘造、「イ申し上げます、私し唯今使ひに行つての歸りがけ、此向ふの駒木根様の物見下を通ります。源八郎の姉の絹江奴が當夜敷の方を指差しをして何か饒舌つて居りました。是れを聞いたる金銀入齒組の旗本奴等、「其れこそ大變、借てこそ當家に山崎親子を秘匿ある事を知つて大久保彦左衛門に頼まれて駒木根彈正へ絹江を問者に入れて當家を探らんと云ふ下心と見へたり、して見れば吾々一同も評義をし直して、篤と相談を致さねば相成らん、就いて山崎親子を當家に置く事は出来ん、何れへか外かたへ預け代へを致し、其上絹江を誘拐し、彼れを締め上げたなら、宇都宮浪士の居所が判らうかと存じます。左京如何にも是れは妙計、然らば準人殿は當分何れへも連れ申す事に致そう。助左市ヶ谷

淨瑠璃坂建部甚太郎殿屋敷、是れこそ屈強の隠れ家と存する、如何に建部甚太郎殿、何卒か山崎親子の者は、身の屋敷へ預り下され、甚太如何にも承知致した、然らば今宵山崎親子の者を送り下されたい、して絹江を誘拐す手段は如何なる所存なるや、左京左れば拙者、向ひ同志の屋敷なれば、絹江が使ひに出るか、又は駒木根の與方等の供先で有らうが必ず引つ捕へ、之れを誘拐して連れ歸り詮議をするに如かず、之れに一決致して銘々は一先づ屋敷へ引取る事に相成りました、此時駒木根彈正様の物見に有つて絹江は絹江彼れは姫様、只今向ふの久貝の屋敷より出でに成る、旗本様方の名前には存じ有りませんか、姫妾は一向知りませぬ、彈正絹江く、是れへ参つて茶を一服、たて、呉れないか、絹江、ハイ唯今其れへ参ります、絹江は物見より下りて参つて、所望の茶を一服差し上げて、絹江殿様へ伺ひ申し上げます、向ふの久貝様の屋敷には折々大勢の旗本方が集りてございますが、彼れ

は何んの寄り合ひを成さるのでございます、彈正彼れか、彼れは放蕩無頼の久貝左京の屋敷へ類を以て集るの例の通り、皆木葉旗本が何か判らん集りをするのじやない、絹江大抵何の邊の旗本でございます、彈正一寸見處では本郷、弓町邊から小石川、牛込、市ヶ谷邊の者が来る様子で有る、其れを詳しく聞いて何にするのじや、絹江殿様へ願ひ申し上げて居ります、私父の仇山崎親子兄弟を探ります、手掛りの一つにも成らうかと尋ね致しますのでございます、彈正、オ、成る程然うじや、エ、其れなれば、吃度探索をして遣らせる事に致し、弾正、オ、然うじや、太助なれば、序才は有るまい、然らば書面を認め、中間にでも持して遣れ、畏りました、絹江は太助の方へ詳しく書面を認め、中間にでも持して遣れ、長りました、絹江は太助の許へ持たせて遣ります、太助は此手紙を開封して讀み終り

ましたが太助久貝左京の屋敷と有つちア逆も乃公が入り込むと云ふ
 譯には行けない、彼の野郎は香爐の一件で酷い目に遇はした事が有
 るから、此奴ア明日の朝、肴河岸へ乗込んで牛込山伏町邊へ出入を
 する肴屋を頼み探索をさせるより外に仕方が無へ」と其翌日日本橋
 の魚川岸にと違つて來り、組合の者を段々聞き合して見ると牛込薬
 店の八造と云ふ者が此久貝の屋敷へ出入をするに云ふ事を聞き出し
 太助、コオ八八造、ヤ、太助の兄哥、早ふございます太助手前何か、
 久貝左京と云ふ旗本の屋敷へ出入をして居るか八造、然ら、出入
 入をして居る、太助、何うだ、向ふの屋敷は疫病神と人も恐れ、小商
 人などは出入をせんと聞いて居るが拂ひなどは三十日〳〵に呉れ
 るかな八造、以前は太助の兄哥然うで有つたが、先々月から座敷借り
 をして來た武士が有つて其れからは、大層肴も能く賣れて一々現金
 で呉れるんだ、太助、其客人の面を手前見た事は無へか八造、何んでも
 見た事は無へが奥深くに居る様子で表などへは滅多に出で來ね、様

だ太助、其れヒア是れから手前行くだらうから、乃公が云つたなんて
 な事を云はずに向ふの仲間か何んかに聞いて知らして呉んぬ、か、
 八造、宜しい承知しました、屹度兄哥の宅まで知らします、其れヒ
 ア何卒か頼むと分れを告げて得意廻りも済まし、薬店の八造の返
 事を待つて居ると、恰度晝過ぎと云ふ時分に表から駈けつて來たの
 か八造、八造、オ……太助、兄哥、カ、つ、ま、ら、ぬ、事、が、出、來、た、よ、和郎の
 尋ねる客人は都合が有つて俄に他へ轉居をしたから、今日から肴は
 其んなに入らぬと云ふ事だ、太助、其れア八造、大に肴苦労だつた
 何れ後日、禮をする、と八造を歸して置いて太助は大に歎息をし
 て太助、借ては駒木根様の、屋敷へ絹江様を問者に入れて有る事を知
 つて他へ轉居をさせた、是りアグス、〳〵して居て敵を逃がして仕
 舞つては正義の武士方が苦心を増す道理、コ、リ、ヤ、斯、う、し、て、は、居、ら、れ
 ね、大久保彦左衛門の殿様に、結り申して討たして貰は、ア、成、ら
 ね、と是れから太助は大久保彦左衛門様に、結り申すと云ふ、是

宇都宮浪人の踪跡を詮議せんご始終相江の出るのを氣を付けて居り
 ましたる處が頃には寛永九年三月彌生の時駒木根彈正様の御屋敷
 には奥様御姫様の御花見として女中方を從へ向島へと御出で
 になり小梅の木母寺と云ふ寺の座敷を借り遊ばし酒宴を
 始めてお出でなさいましたのが恰度其日の夕暮時まで愉快をして
 入らせられたましたる處へ御屋敷より向島の堤防
 たるから其御駕籠へ御石しとなり駕籠脇には武士二人中間二
 人枕橋の方へとお歸りに成る折しも片邊の堤防より現れ出でたる
 を枕橋の方へとお歸りに成る折しも片邊の堤防より現れ出でたる
 三四名の悪者共突然駒木根彈正様の御供先きへ亂暴を致して掛り
 ます此時各家來の面々は狼藉よ曲者よと立願ひで居ります
 其の内此駕籠の脇に扣へて居たる相江を肩に引擔ぎ白袴の森を指し
 て後を見ず急ぎ行く此時淺草諏訪町の町人松前屋五郎兵衛が
 一太助を連れ急ぎ行く今日しも向島の花見に参つて居りましたが

れが爲めに彦左衛門もワツと御腰を据へて居る譯には行かん去ら
 ば敵を討たして遣らんものど一層力を盡されて、遂に寛永九年三月
 廿四日の夜、名高き市ヶ谷淨瑠璃坂と云ふ所に於いて本懐を達し
 せるの講談でございませすが、暫時休息致しまして後の一席にて結局
 を告げる事に致します……。

第十席

へい申し上げます、先般復讐美談奥平願助と題しまして、前編を出
 般致しまして永々辨じ来りませしたのが、最早此一回を以て終局を告げる事と
 致しまして、此處に敵山崎將監準人同しく弟九平の親子に加担をなし
 た、金銀入齒組の旗本輩は飽までも悪人を助けける宇都宮浪人、正義
 の武士の仇討を妨げ、殊に駒木根彈正の屋敷へ間者に入込んで居り
 ます、奥平内蔵之助の娘、則ち源八郎の姉の相江を誘拐し、然して

聽て夕方に相成りましたから、去らば歸らうと二人連れで、向島
 の堤防へ掛つて参ります、此折柄一心太助は太助松前屋の旦那、何
 うやら花見の浮れ客が喧嘩でも初ましたか、何にか大變に騒いで居
 ります、五郎へ、「ア、何にか大層の間違でも出来た様子だ、太助且
 那、無暗にお出で成すつて怪我でもしてはいけませんから、暫く
 待ち成さいます」と云つて居ります、處へ悪者が絹江を肩に引擔いで
 ン、く、駈け行く様子、之れを見たる五郎兵衛は五郎是れア太助、
 喧嘩に事寄せて女を誘拐す奴に違ひない、之りヒア助けて遣らねば
 成らんから、和郎も共に働いて呉れ太助へ、「合點でございます」
 と一心太助に松前屋五郎兵衛の二人は今や來ると待ち受けて居ると
 も知らず、件んの曲者はン、ン、と足早に駈け付けて來る
 處を一心太助は突然に、其曲者の横面をホカインとぶん殴りました
 るが何をか以て堪るべき、ア……ッ、と驚き擔いで居たる絹江を其れ
 へ、「ッ、かど落し、コッ、堪らんと遙かの方へ逃げ行きます、太助強悪い

野郎だ、待ちアがれ」と後を追つ掛けましたけれど、其逃げ足早く残念
 ながら見失ふて仕舞ひました、仕方なく後へ取つて返し太助ヤ、松
 前屋の旦那、到頭曲者を取り逃がしました、五郎イヤ大に苦勞だ、
 助けました件んの女は何者で有るかと思れば之れなん、源八郎の姉
 の絹江殿である太助オヤ、貴女は御新造の絹江様ヒアありませんか
 絹江オ……和郎は太助か太助何う成さいましたのですか、絹江今日は
 奥様や姫様の御供をして花見に参り小梅の木母寺で今の先さま
 でお遊びに成つて入來しやつたが、此屋敷から迎ひの御駕籠が参
 つたから歸りに成る其途中で今此の先さで俄に曲者が飛んで出で
 喧嘩をしかけ、其上私しを引捕へ誘拐されんとしたのを和郎に助け
 られたんだ、アレまだ彼の通り駒木根様の家來が曲者と切り結
 んて出で成さる、早く行つて助けて呉れ太助、エ、宜しうござす
 松前屋の旦那、何卒か貴方も共に腕貸しをして下さい、絹江さん、
 貴様は何處へも行かず暫く其處に待つて出で成さる」と絹江を此

處に待たして於て一心太助松前屋五郎兵衛の二人は韋駄天の如くに
駈け付けます、後に潮江は只一人堤の上に行んで居りますと、
恰度其下が竹屋の渡し場、其處に繋いだ一艘の小船、船の内から二
人の若い者が上つて参りました、二人「エー！、モシ新造さま、貴方
に怪我が有つても成りませんから、先づ彼の船まで入来しやいな
せ、潮江和郎は太助の内、若い者か二人「エー！、私等には松前屋五郎兵
衛さんと太助親分のお供をして船で花見に来て居たものです、
衛さんとお出で成さいます、然うかいと潮江は其若者に手を引か
れ、漸々片邊に繋いだ船に乗りましてございませ、潮江は其若者に手
を引か
さまして、
れには引換へ松前屋五郎兵衛に一心太助は喧嘩の場所へ飛び込んで
来るなり、見るく内一人二人の曲者を引綱んで隅田川へ投げ込
みました、太助「コリヤ駒木根様の奥様や姫様でございませ、私
は一心太助でございませ、怪我等は有りませんか、奥「コリヤ和郎

が一心太助で有りますか、別に我怪は無び、然し潮江は如何したか
「太助「へい、潮江様は只今私しが取り返しましたから、此方へ取つて返して見ま
させ、今これへ連れて参ります、太助「新造、潮江様「何うなすつたらう
するど、潮江は居りません、太助「新造、潮江様「何うなすつたらう
と彼方此方を探して居ります、竹屋の渡し場に居ります、潮江様「
し、お出でなさるんのですか、太助「然うだ、渡、其れなら此脇に一艘の小
船を繋いで二人の若い者が居りましたが、其人達らが今しがた船へ
乗せて川下の方へ下つて行きました、太助「エー、ヤア仕舞つた、
折角潮江様を取り返したのに、又も誘拐されたか、と此方へ引返し
て、太助「何卒か奥様や姫様は此儘に歸り下されませ、潮江様は何處ま
でも私しが探しまして取り返し、屋敷へ送り申しますから、是
れから連続中は此處を立つて、屋敷へ歸りなさいませ、後、一心太助
は太助「松前屋の旦那、私しと一所に出で下さいませ、多分潮江様

を誘拐シアがつたのは敵の廻し者に違ひございますまい五郎「ヨイ」
 承知致した太助「ヨイ」渡し守、其船に乗せて何卒か川下へ遣つて呉れ
 ねエか「渡へエー宜しうございます、サアお乗んなさい」是れから
 二人は其渡し船に乗りまして、
 二ノ川下指して追蒐
 けて行きます、恰度佃島の沖へ参りますと、遙かの沖へ一艘の小船
 が艘ひで行く様子、此船に遠ひないと思ひましたから太助「ヨオ渡し
 字、儲り遣つて呉んねエ、乾度禮をするから渡合点でござす」と
 腕を限り、こんかぎり其後を追ふて参ります、一心太助は「大音上
 げて太助「ヨイ、其船待て……」此聲を聞いたる絹江は「絹江「アレ
 彼の聲は儲に一心太助「アレ「エー」と聲を上げますと二人「ヨイ
 八登敷「最う泣いたて願ひだて仕方は無エんだ」と次第に品川沖
 まで参りましたが、到底浪が荒ふございまして沖へ出す事が出来な
 い一人「エオ、是れヒア逆も沖へは出られねエから彼の品川の濱邊へ
 船を着けようヒアねエか」
 コレ其れヒア然うしようど一人は次第に

品川の濱邊へ船を寄せて参ります、此時恰度品川船場町の澁川伴龍
 軒「同じく伴五郎の親子は只今酒宴を致して居りましたが遙かに方
 つて女の聲伴龍「彼の女の聲が貴様耳に這入らんか伴五「エー聞
 へて居ります、伴龍「斯く夜に入つて居るのに品川沖に女の聲、何んで
 も誘拐者と見へる、其方参つて救けて遣れ伴五「長りましてございま
 す」と品川の濱邊に参つて、
 方へ寄せます様子、小蔭に忍んで窺つて居りますと、何うやら船を此
 の濱邊に船を着け、絹江を肩に引擔ぎ、岡へ上り彼方を指して行か
 んどするを、飛んで出でたる伴五郎「突然二人の首筋取つて伴五「ヤ
 イ、待て……」一人「エーッ、何を仕やアがるんだ」と一刀抜いて切
 り付けける伴五「エッ」と云ひ乍ら腕首取つて片邊にメソメソ
 と投げ付けける、起き上らんとするを首筋へク「エッ」と手を掛け取つて
 押へて居る處へ、一心太助、松前屋五郎兵衛の乗つたる船は漸々に
 濱邊に艘ぎ付け來たり、船から踊り上つた二人は二人「誰方か知りま

に頼まれて、全く網江を奪ひ取らうと致したるものに違ひないと白
状を致しました。伴五郎は、敵の山崎親子兄弟は、只今何れに居るか、
ア正直に白状しろ。男左様でございませす、近頃は市ヶ谷淨瑠璃坂、
建部甚太郎と云ふ、旗本の屋敷に奥深く忍んで居ります。伴五郎、
貴様等は旗本では有るまいナ、男如何にも吾々は無祿の浪人であり
まして、ホンの頼まれて致したものでございませす。伴五郎、
様等の命を取らうては云はないが、暫くは此、溢川の屋敷へ留め置
サア太助、斯く敵の行衛の知れたる上は一日も早く此事を、
都宮に潜伏して居られる義徒兵藤立蕃殿を初め、他の人々にも報知
を致し片時も早く敵討の本懐を達しさせんければ相成るまい、
肯乍ら、溢川伴五郎、乾度助勢を致したいから、早く其手配りを付
けるよう致せ。太助、何うも難有ふございませす、此、網江様は何う致
しませう。伴五郎、是れは此伴五郎の道場へ預り置けば大丈夫で有るから
心配を致すナ、太助、其れなら直ぐに其準備に取りかゝります。と一心

せんが難有ふ存じます。伴五郎、コリヤ和郎は一心太助ヒアないか。太助、
エー、貴方は、溢川の若先生ヒア有りませんか、其れヒア、網江様を救
けて下さいませしたナ、伴五郎、如何にも唯今父上と酒宴最中、遙か沖合に
女の泣き聲、多分誘拐者ど心得へ是れへ参つて見る處斯う、
第、其れでは、網江殿でござつたか、ユレは和郎は、淺草諏訪町の松前
屋五郎兵衛であるか、五郎、是れは、溢川の若先生でござりますか、伴五
て太助、何う云ふ譯で、網江殿は誘拐され、其方なり、松前屋五郎兵衛
まで何う云ふ譯で、此處へ追つ蒐けたぞ、太助、左れば斯う、
でござります、其處で、溢川先生、此誘拐した者こそ必ず敵の廻し者
に違ひございません、何卒、此奴を詮議致したなら、必ず敵の手掛
りを得られる事と存じます、篤と調べて見たいものでございませす、
伴五郎、
「見よう」と右の曲者二人を縛り上げ、
此曲者を段々と取調べますと、
案に違はず、敵山崎親子兄弟

浄瑠璃坂仇討

よもに仇討を遂げんとすのしや、何奴が是れを妨げるかは知らざれども、若し此悪人を秘匿いあると云ふ事を此彦左衛門が知つたなら

浄瑠璃坂仇討

太助は品川を立つて神田三河町の方へ歸つて参り、駒木根彈正様の方へは子分忠八を以て絹江を取り返し、越えを申し送りまして、其身は直に駿河臺錦小路大久保彦左衛門様の屋敷へ参り、夜中ながら、目通りを致しまして、太助借て殿様へ願ひ申し上げます、豫ての、お話しに敵の行衛が知れましたら、乾度討たして遣る、どの言葉、此度儘、かに敵の行衛が知れましたら、乾度討たして遣る、どの言葉、此度儘、ませ彦左、ム、して何か太助、敵は當時何れに隠れ忍んで居るか、太助左様でございませ、市ヶ谷浄瑠璃坂建部甚太郎と申す、旗本の、屋敷へ奥深く秘匿れて居ると云ふ事で有りませ彦左、ヨ、其れさへ知れ、ば如何にも此彦左衛門が立派に仇討をさせて遣るから、早々、野州宇都宮に罷り在る、正義黨の者へ此趣きを秘かに通知を致し、目だ、ぬようにして、此江戸表へ入込まして置け、愈々敵を討つと云ふ、當日には乾度此方より沙汰を致して遣るから、左様心得い、大助、有ふございませ、と一心太助は大に喜び、其儘、駿河臺の屋敷を立出で

討 仇 坂 璃 瑠 淨

云ふて立歸る、實に困つた事で有るが何うした事でござらうか、若
 しや當建部の屋敷へ秘匿つてある事を知つて宇都宮浪人が徒黨をな
 し、當家へ亂入致す時は、當家の迷惑となる、何んとか評定をしか
 へければ相成らんが、何ぞ宜い工夫はござらんか如何である、云ふ
 と建部甚太郎、建部吾々が一端山崎父子へ義に依つて加擔を致した、
 今更山崎兄弟を見捨て、は武士道が相立ちますまい、假令先祖の家
 名を潰すとも飽まで山崎親子を助けんければ金銀入齒組の意氣地が
 相立ちますまい、依つて箇様致さう、拙者の知行處が三州の田原と
 云ふ處に有りますから、是れへ先づ山崎親子三名を落す事に致し
 然る後何か能き方法を考へる事に致したら如何でござる、助左成るは
 是れは建部殿の云はれる處至極道理、して山崎親子の者を落す當
 日は何時とお定め成さる、建部去れば其當日は来る三月廿四日の宵、
 を幸ひ、市ヶ谷八幡の九ツの鐘を合圖に山崎親子の者は吾々が前後
 を誰り東海道口まで見送る事に致したら如何でござる、然らば是れ

討 仇 坂 璃 瑠 淨

必ず許しては置かんぞよ、其方と吾れとは同じ大久保を名乗る親類
 同家で有るから一應念の爲り申し聞かして置く、馬鹿な事に加担を
 して先祖傳來の家名を潰すような事をするなよ、助左中々、決して左
 様な事に加担を仕るような拙者ではございませぬ、彦左、其れな
 れば其れで宜い、儘に前以て申し聞かして置くから能く心得て居れ
 と云ひ置いて屋敷を立ち出で又隣屋敷長田文之丞の屋敷へ参り、同
 し事を云ひ聞かし、其れから午込山伏町の久貝左京の屋敷、是れへ
 も参つて否やがらしと云ひ、大抵悪人加担の金銀入齒組の是れぞと
 云ふ族本の屋敷へは毎日、出掛け来て否やがらしと云ふて廻つ
 て居ります、此處に金齒組の大久保助左衛門、長田文之丞、
 久貝左京、宮城監助、其他金銀入齒組の連中は市ヶ谷淨瑠璃坂の建
 部甚太郎の屋敷へ集ま、助左、借て建部氏、困つた奴は大久保彦左衛
 門でござる、毎日も彼れ宇都宮浪人に仇討をさせよう、と云ふ所存
 であるか、毎日、吾々組合の屋敷へ田掛けて来ては否やがらしと

に一決を致そうと山崎親子の者にも此事を申し聞かして、愈々其事の準備に掛つて居ります、然るに此處に大久保助左衛門と云ふ奴は卑怯未練の者で有りまして、ツクツク考へました、是りア最う駄目だ、所詮助かる譯は無、して見ると箇様な者に長く加担をして居れば命を捨てる而已ならず、家名までも断絶、悪人に加担をしては天が許さん、是りア一層吾が親族大久保彦左衛門殿に内通して、正義の浪人に仇討をさせて遣るほうか誠の道であらうと箇様な者へを起し、早速駿河、越前、小路の屋敷へ参り、箇様く云々と一伍一什を申し入れます、之れを聞いたる大久保彦左衛門忠教彦左衛門、能く知らせて参つた、して山崎親子へ加担の旗本は凡そ何人はどで有るか、助左二十名ばかりで有ります、彦左、〇一、然らば其當日には必ず其方は作病を構へて出ないやうに致せ、助左、委細承知仕りましてございませう、之れを聞いたる大久保彦左衛門は早速一心太助を呼びに参りまして、彦左、如何じゃ、太助、宇都宮浪人共は江戸表へ到着を致

したか、太助、へい、一人二人と目立たぬやう到着致しましてございませう、彦左、〇一、其れならば三月廿四日の四ツ時までに身仕度を致して市ヶ谷浄瑠璃坂に集れと申せ、吾れ表向き加勢をする、と云ふ事は出来な、なれども白柄組の重なる旗本を集め援兵として市ヶ谷浄瑠璃坂へ出張し、若し悪旗本奴等が悪人に加勢せんと切つて出でたならば、吾等白柄組の旗本等は之れを防いで戦ふ事に致す、尤も濹川伴五郎にも此事を申し聞かして、浄瑠璃坂へ出張させる事に致す、太助、有難ふございませう、と太助は吾家へ立歸つて参りまして、當時處々に姿を扮して隠れ居ります、正義の浪士共へ此事を通知致し、ます、之れを聞いたる兵藤玄蕃其他の人々は雀躍して大に喜び、愈々當日を相待つて居ります、うち當日三月廿四日の夕方、神田三河町一、心太助の宅に秘かに集まり、此處に一同は堅りの盃をなし、兵藤玄蕃は源八郎に向ひ、玄蕃、如何に源八郎、其方の爲りには父内蔵之助の助、吾が爲りには逆縁ながら、悴彌五郎の仇、今宵を過ぎさず年來の望

を達するの時來れり、其心得にて充分の働きを致せ、入「長りまして
 ございます」此處で一同酒盛をなし、懸て時刻が來りしましたる故
 豫て用意の網福神、上には黒の五ッ所紋付の衣服を着し、一心太助
 は道案内者として三河町の宅を秘かに立ち出で、市ヶ谷淨瑠璃坂ま
 で遣つて参ります、此時早や白柄組の大久保、水野、近藤、阿部、
 兼松、忍びの風姿にて淨瑠璃坂に出張つて居る、澁川伴五郎も
 自分の弟子七八名を引率れて同じく其れへ來て居ります、時に大久
 保彦左衛門は彦左如何にや宇都宮浪士の者共、吾々は天下直參の旗
 本にして表面助勢をするに非ず、唯義に依つて援兵として此の處ま
 で出張致したるのである、相成る可くは吾々の手を借らす汝等の働
 にて首尾能う敵討を致せ、若し仇山崎親子の者に悪旗本奴等が助勢
 をなし其方共へ妨げ致さんと成したる節は止むを得ず吾々一同が切
 つて出で、助勢を致して遣す、其心得にて充分の働きを致せ、玄蕃誠
 に難有き言葉、吾々非運の者共へ助勢をなし下さる段死しても

忘却仕らん、彦左澁川伴五郎、其他のものは援兵後詰として坂の頂に
 押へるべし、又白柄組の吾々は坂の中央に扣へ居るべし、宇都宮浪
 士の者は建部甚太郎の屋敷の窓下、又其向ふ屋敷は紀州新宮の主水
 野飛彈守屋敷の窓下に潜伏致し、敵の出するを待つて名乗り掛けて切
 り込ひし必ず味方同志討ちをなさるよう合言葉を示し合すべし、
 ど斯くの如く手配りを示し合しましてございます、固より大久保彦
 左衛門と云ふ方は効名平助と云ふた頃より徳川家康公の御供をし
 て戰場萬馬、數度の戦争に出でまして能く軍事に馴れて居る人で
 さいますから味方に取つては少しも申分の無ひ手印を致されて居る
 のでございます、借ても宇都宮浪人兵藤玄蕃、奥平源八郎、夏目外
 記、奥平傳藏、桑名友之進、太田小左衛門、轟甚太夫、此黨の人々
 は黒の着付に野袴を穿ち、下には着込みの網福神、白の裨を十手に
 練取、後鉢巻皆々覺への業物、目釘の裏表を濡し、今にも敵が出で
 たるならば、年來の宿意を達せんと勇氣十倍を致して待ち構へる

處へ市ヶ谷八幡の四ツの鐘、只今で申す十時の鐘が鳴りますと、
 此時建部甚太郎の屋敷に有つては山崎監將同じく隼人九平、親子三
 人に加担の旗本、長田文之丞は一同に向ひ文之借て方々、豫て申し
 合したる通り、山崎親子の者を飽までも助け、一先づ建部甚太郎殿
 の知行處、三州の田原へ落すと云ふ事に決定を致した、然るに隣家
 大久保助左衛門は始めより山崎親子の者を自分の屋敷に秘匿ひ名ま
 で本田與三郎と改名させ、何處までも義に依つて是れを助けんと申
 して居たりしに今日に至り俄に病氣で有るから不參を致すとの事、
 是れ誠の病氣とは思はれん、必ず變心を致したに相違有るまい、此
 上は吾々家を捨て命を捨て、何處へも山崎親子を助けて遣り
 たいとの精神でござる、依つて各々方も其の積りにて東海道品川ま
 で見送りを致して遣らうではござらんか、此言葉聞いて金銀入齒
 組の人々は「實に長田文之丞殿の言葉勇し、善悪に拘らず一端
 武士が言葉を契ふて置ひて、今更後へ行くなんぞと云ふ卑怯未練の

事は出来ぬ、何處までも力を添へて山崎親子を助けるのが武士道
 で有る、イヤ此上は山崎親子の者共、早々仕度を致すべし、と此育
 業を開きましたる山崎親子の者は悪人ながら目にも泣きを浮め、
 まで方々が吾々如き者へは助勢を下さる段精々世々の高恩、必ず
 忘れば仕らずと泣き流して打喜び、去らば出立と云ふ事に成り一
 同は酒宴をなし、豫て宵暗を僥倖に人目を忍び落す積りの處が、彼
 れ是れ時を移しましたが、今しも市ヶ谷八幡の四ツの鐘が鳴りまし
 たる故、隼人九平の親子兄弟は族裝束に身を扮し、之れを見送り
 騎將監、隼人九平の親子兄弟は族裝束に身を扮し、之れを見送り
 して出掛ける旗本は建部甚太郎、長田文之丞、宮城監物、久貝左京
 四宮敷馬、大島庄太夫、加藤萬藏、山田鑑之丞、泊勘太夫、渡邊大
 之進、編て十名、之れ金銀入齒組の旗本、此又旗本の屋敷へ豫て出
 入を致す浪人、久留米浪人、大河原太郎左衛門、佐竹浪人、篠塚
 東馬、野州鳥山浪人、牧島庄藏、宇和島浪人、佐藤甚一郎、因州鳥取浪

人竹田五郎左衛門、丹後宮津浪人内海東雲齋、奥州津輕浪人加島左
 藤信州上田浪人佐川幸一郎、泉州岸和田浪人生田七兵衛、奥州棚
 倉浪人星谷源左衛門、是れ亦締て十八、前後を併せて二十三名の同
 勢にて仕度と致し、今しも小門を押し開け静々と出掛け恰度市ヶ谷
 淨瑠璃坂の水野飛彈守殿のち屋敷を過ぎんとする頃、其の長屋の窓
 下に潜んで居つたるは、是れなん宇都宮浪士の隊長兵藤玄蕃、ハ
 く、と其れに現れ、天地に響く大音上、玄蕃、ヤア、其れに來りし
 は、以前野州宇都宮の城主奥平大膳太夫殿家老職、當時浪人山崎將
 監、単人、九平の親子等と見たるは曲目か、吾れこそは同じく宇都
 宮浪人兵藤玄蕃、義に依つて奥平内藏之助の敵、又逆縁ながら竹
 五郎の仇、イヤ尋常の勝負を致せ」と呼はりました、此時又もや片
 邊の屋敷の窓下より現れ出でたるは是れなん奥平源八郎、源八如何に
 や如何に山崎単人、九平の兄弟、吾れこそは内藏之助の一子源八郎
 なり、父の敵、ヤ尋常の勝負致せ」と之れも同じく名乗りかけたなり

處へ彼方此方より隠れ忍んたる浪士の人々、トツと一時に立ち現は
 れ、甚太夫、夏目外記、山崎親子吾れこそは奥平傳藏、桑名友之進、大
 枝清九郎、桑名惣平、吾々は義に依つて若年の源八郎に加担をなす
 ものなり、イヤ尋常の勝負をなせよ」と呼はり乍ら一同に刀の鞘を
 拂つて山崎親子の者に切つて掛かる、不意を食つて山崎親子は大に
 驚き、借ては兵藤玄蕃徒の奴輩で有るが、今は是れまでなりと親子
 の者も一刀の鞘を拂つて正義黨の浪士の人々に切つて掛る、之れを
 打ち眺めましたる金銀入齒組の旗本初め之れに附屬の浪士の者共、
 「ソレ山崎親子の者等を討たすな、宇都宮浪士の奴輩を切つて捨て
 上」と是れまた一同は刀の鞘を拂つて、トツと其の處へ切つて出づ
 るを此方に有つて見て居たる大久保彦左衛門、彦左、ソレ、方々宇都宮
 正義黨の浪人に加勢を致せ」と呼はりましたるが故に、兼松又四郎、
 白柄組の屈強の面々、水野十郎左衛門、近藤登之助、兼松又四郎、

阿部四郎五郎、坂部三十郎、小栗又一、山中源内、松平紋太郎、大島雲四郎、此黨の人々が十有余名、覆面頭巾にて面部を包み、何れも一刀の鞘拂ひに及び、物をも云はず、金銀入齒組の悪旗本へ、ドツと一時に切つて掛かる、心得たりと、又方は鎧を削り火花を散し、チャナヤン……チャリ……と、實に花々敷き大闘ひと相成りまして、さひます、此時、澁川伴五郎は淨瑠璃坂の上の有つて自分付屬の門人を、側に従へ、援兵後詰として扣へて居りましたが、若し宇都宮正義黨浪士の人々が危いと見たるからば、加勢をせんと、脇目もふらず見物を、して居ります、折しも二十四日の夜半の月雲間を破つて漏れ出す、此の月こそ天の賜、と、此處に兵藤玄蕃は山崎監將を相手に切り結び、又源八郎は山崎準人ど切り結び、弟山崎九平は桑名友之進と三方に分れて戦つて居ります、又悪人へ加担の悪旗本共を相手には、白柄組正義の旗本が向ふなり、向は山崎親子の者へ加担をなしたる浪人共は正義の浪人共を相手に、彼方此方に立ち分れ、此處ぞ一生懸

命と切り結んで居ります、處が其近傍の旗本屋敷或は水野飛騨守の屋敷等に於ては、今門外に於て大仇討がある、と云ふ事を知つては、居ります、する、けれ共出ては掛り合ひと思ひましたか、誰れ一人出る者も無く、長屋くの武者窓より此仇討を見物致して居ります、然る處が悪人共へ加担の浪士の勢激しく、これが爲めに宇都宮正義黨の浪人は次第く、に切り込まれて、ワリ、く、と後退りを致すの有様、此体を見ましたる大久保彦左衛門、是れでは成らんと自分の側に共に仇討を物見致して居りました、一心太助を呼び彦左太助、大分味方の旗色が悪いぞ、太助「エー、殿様、何うしたら能うございませう、彦左「否、必ず案ずる事は無い、之れが爲めに後詰援兵として扣へさせたる、澁川伴五郎が居るから、是れに加勢をさせれば大丈夫である、チャア早した、と一心太助は氣轉をさかし、其儘淨瑠璃坂の頂上に駆け付けて、大助「チャア、澁川の若先生、大久保の殿様の命令で有ります、早く加